

靈界物語 第六五卷 山河草木 辰の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記号(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十五巻』愛善世界社

2008(平成20)年06月19日 第一刷発行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2010年03月31日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

総説 そうせつ

第一篇 盗風賊雨 たうふうぞくう

第一章 感謝組 かんしゃぐみ（一六五七）

第二章 古峡の山 こけふ やま（一六五八）

第三章 岩侠がんけふ 一六五九

第四章 不聞銃きかんじゆう 一六六〇

第五章 独許貧とくきよひん 一六六一

第六章 噴火口ふんくわこう 一六六二

第七章 反鱗はんりん 一六六三

第二篇 地異転变ちいてんぺん

第八章 異心泥信いしんでいしん 一六六四

第九章 劇流げきりう 一六六五

第一〇章 赤酒せきしゆのこえ声 一六六六

第十一章 大笑裡だいせうり 一六六七

第一二章 天恵てんけい 一六六八

第三篇 虎熊惨状とらくまさんじやう

第一三章 隔世談かくせいだん 〔一六六九〕

第一四章 山川動乱さんせんどうらん 〔一六七〇〕

第一五章 饅頭塚まんぢゆうづか 〔一六七一〕

第一六章 泥足坊でいだるぼう 〔一六七二〕

第一七章 山嵐やまおろし 〔一六七三〕

第四篇 神仙魔境しんせんまきやう

第一八章 白骨堂はくこつだう 〔一六七四〕

第一九章 谿の途たにみち 〔一六七五〕

第二〇章 熊鷹くまたが 〔一六七六〕

第二一章 仙聖郷せんせいきやう 〔一六七七〕

第二章 均霑きんてん（一六七八）

第三章 義俠ぎけふ（一六七九）

第五篇 讚歌さんか応山おうざん

第四章 危母玉きもだま（一六八〇）

第五章 道歌だうか（一六八一）

第六章 七福神しちふくじん（一六八二）

（
（
（
（
（
（
（
（
（
（

農家の最も氣遣ふ土用十日前の天気は、最も暑氣の激しく、且つガンガンと万木を枯死せしむる如き勢で照り付けねば、満足な米は出来ないと謂ふ時期になつて来た。然るに本年の氣候の不順なる事は、数十年來未だ曾てなき所と老農がこぼして居た。秋の松茸は綾部の八百屋の店頭に、累々として並べられて居る。実に物騒千萬な世の中の状態である。火山の爆發、大洪水、汽車の転覆、飛行機の墜落、労働者の騒ぎ廻り、主義者の検挙、有名なる学者の情死沙汰、ヨ氏との談判、支那のゴタゴタ等、数へ来たれば一として地獄世界の現狀を暴露せないものは無い。ア、世の中は斯くして遂に亡び行く道程に向つて進行しつつあるのではなからう乎。実に心もとなき次第である。此時に際して瑞月は、切齒扼腕、慷慨悲憤するも何の益なき事を覺つた以上は、後の人のために、神界の御経綸の一端なりと述べおかむものと、濁流汎濫せる小雲川の西岸祥雲閣に於いて久し振りにて、例の如く松村、北村、加藤の諸筆録者と共に、本巻を口述し了りました。幸

に愛読の榮を玉はらむ事を希望いたします。

大正十二年七月十七日

総説

芸術と宗教とは、兄弟姉妹の如く、親子の如く、夫婦の如きもので、二つ乍ら人心の至情に根底を固め、共に霊最深の要求を充しつつ、人をして神の温懐に立ち遷らしむる、人生の大導師である。地獄的苦悶の生活より、天国浄土の生活に旅立たしむる嚮導者である。故に吾々は左手を芸術に曳かせ、右手を宗教に委ねて、人生の逆旅を楽しく幸多く、辿り行かしくめむと欲するのである。矛盾多く憂患繁き人生の旅路をして、宛ら鳥謳ひ花笑ふ楽園の觀あらしむるものは、実に此の美はしき姉妹、即ち芸術と宗教の好伴侶を有するが故である。若しも此の二つのものが無かつたならば、如何に淋しく味気なき憂世なるか、想像出来がたきものであらうと思ふ。人生に離れ難き趣味を抱かしむるものは、唯此の二つの姉妹

の存在するが故である。

抑も此の二つのものは、共に人生の導師たる点に於ては、相一致して居る。然し乍ら芸術は一向に美の門より、人間を天国に導かむとするもの、宗教は真と善との門より、人間を神の御許に到らしめむとする点に於て、少しく其立場に相異があるのである。形、色、声、香など云ふ自然美の媒介を用ゐて、吾人をして天國の得ならぬ風光を偲ばしむるものは芸術である。宗教は即ち然らず、靈性内觀の一種神秘的なる洞察力に由りて、直ちに人をして神の生命に接触せしむるものである。故に必ずしも顕象界の事相を媒介と為さず、所謂神智、靈覺、交感、孚応の一境に在つて、目未だ見ず耳未だ聞かず、人の心未だ想はざる、靈界の真相を捕捉せしめむとするのは、宗教本来の面目である。芸術の対象は美そのものであり、而も美は神の姿にして、其心では無い。其衣であつて、其身体では無い。☐ 神は靈なれば之を拝するものも亦、靈と真とを以て之を拝すべし☐ と云つたキリストの言葉は万古不易の断案である。美を対象とする芸術は、能く人をして神の御姿を打ち眺めしむる事を得るも、未だ以て其心を知り、其靈と交はり、神と

共にあり、神と共に動き、神と共に活る、の妙境に達せしむることは出来得ない。譬ば僅かに神の裳裾に触らしめる事は出来得るも、其温き胸に抱かれ、其生命の動悸に触れしむる事は、到底望まれない。芸術の極致は、自然美の賞翫悦楽により、現実界の制縛を脱離して、恍として吾を忘るるの一境にあるのである。それ故、その悦楽はホンの一時的で、永久的のものでは無いのである。其悠遊の世界は、想像の世界に止まつて、現実の活動世界でなく、一切の労力と奮闘とを放れたる夢幻界の悦楽に没入して、陶然として酔へるが如きは、即ち是れ審美的状態の真相である。若しそれ宗教の極致に至つては、遙に之れとは超越せるものがある。宗教的生活の渴仰憧憬して已まざる所のものは、自然美の悦楽では無く、精神美の実現である。その憧憬の対象は形体美ではなくて人格美である。神の衷に存する真と善とを吾身に体现して、永遠無窮に神と共に活き、神と共に動かむと欲する、靈的活動の向上発展は、即ち是れ宗教的生活の真相であらうと思ふ。芸術家が、美の賞翫もしくは創造に依つて、一時人生の憂苦を忘るるが如き、輕薄なものでは無い。飽迄も現実世界を聖化し、自我の靈能を發揮して、清く気高き

人格優美を、吾と吾身に活現せなくては止まないのが即ち宗教家の日夜不断的努力奮闘であり、向上精進である。宗教家の悦楽は、単に神の美はしき御姿を拜する而已でなく、其聖善の美と合体し、契合し、融化せむと欲して進み行く途上の、向上的努力にあるのである。死せるカンバスや冷たき大理石を材料とせず、活ける温かき自己の靈性を材料として、神の御姿を吾が靈魂中に認めむとする、偉大なる真の芸術家である。故に宗教家の悦楽は、時々刻々一歩々々神の栄光に近づきつつ進み行く、永久の活動その物である。故にその生命のあらむ限りは、その悦楽は常住不変のもので、其慰安も亦空想の世界より来るに非ず。最も真実なる神の實在の世界より来るものである。

「我と吾の平安は、世の与ふる所の如きに非ず。爾曹心に憂ふる勿れ、又懼る勿れ」とは正しく這般の消息を伝ふるものである。美の理想を実現するには、先づ美の源泉を探らねばならぬ。其源泉に到着し、之と共に生き、之と共に動くのでなければ実現するものではない。而して其実現たるや、現代人の所謂芸術の如く、形体の上に現はるる一時的の悦楽に非ず、内面的にその人格の上に、その

生活の上に活現せなくてはならないのである。真の芸術なるものは生命あり、活
力あり、永遠無窮の悦楽あるものでなくてはならぬ。瑞月はかつて芸術は宗教の
母なりと謂つた事がある。併し其芸術とは、今日の社会に行はるる如きものを謂
つたのでは無い。造化の偉大なる力に依りて造られたる、天地間の森羅万象は、
何れも皆神の芸術的産物である。此の大芸術者、即ち造物主の内面的真態に触れ、
神と共に悦楽し、神と共に生き、神と共に動かむとするのが、真の宗教でなけれ
ばならぬ。瑞月が靈界物語を口述したのも、真の芸術と宗教とを一致せしめ、以
て両者共に完全なる生命を与へて、以て天下の同胞をして、真の天国に永久に楽
しく遊ばしめむとするの微意より出たものである。そして宗教と芸術とは、双方
一致すべき運命の途にある事を覚り、本書を出版するに至つたのである。

大正十二年七月十七日

第一篇 盜風賊雨

第一章 感謝組（一六五七）

夏の日の強い光に侵されて、水に落ちた船の影は、動く水のうねりに従つて、幾重にも縞になつて、暗い緑に渦捲いて、竿を入れるたび、輪が画かれ、岸のあたりまで、その輪が大きく大きく拡がつて行く。古い陶器の色にでもある様な雨風に晒された船の色は、沈んだ調子に水に接して、積荷の上を、かすつた、強い紅がかった斜陽の色と、稍曲つた帆の半面を照らした光とが、暗い水に映つて、時ならぬ色模様を織出して居る。

ハルセイ沼の辺りに、二人の男が水面を見守り乍ら、雑談に耽つて居る。甲 世の中に何が一番困難事だといつても、世に処するの道程、六ヶ敷いものは無いのだ。日月星辰は大空に懸り、雲は中空に彷徨往来して居つても、人間と云

ふ奴は毎日々々食はず吞まずには生きて居られない。五穀は何程米屋の倉に積んであつても、黄金が無ければ、一粒の五穀も買ふ訳には行かず、酒が何程在らうが、黄金がなければ、自由にならない。朝はハルセイ山から吹嵐す、山嵐に震へながら、身を縮めての野良仕事も、夜は星を戴いて家に帰つて来るのも、皆、其日其日の生活をなし、又は黄金を貯へたいからだ。黄金がなければ、何うも仕様のない今の世の中だから、仕方なしにトランス様になつたのだ。意気地の無い奴は、首を吊つてブランコ往生を行りよるのだが、俺等は一人前の男子だ。まさかそんな卑怯な事は出来ないからのウ。今迄バラモン軍に仕へて居つたのも、つまりは生活の安全を保つためだつた。最早今日となつては、鬼春別将軍も彼の状様になつたのだから、乾分の俺たちはトランスでも為なくては、今日の生活が出来ない。

乙「如何にも、お前の説は至極尤もだ。俺は陸海軍何れかの将校になる、俺は何々の官吏になる、俺は何々の大仕事を企てると云つて、意気衝天の青年でも、その一面は国家を思ふとか、国民を愛するとか、立派に言つて居るが、その半面には、

矢張り月給を沢山に取つて、相当な生活をした、と云ふ念慮より外には何ものも無い。大体表面には、名誉とか、出世とか、成功とか、社会奉仕とか、名前だけは実に立派なことを言つて居るが、ドドの約りは矢張金が儲けたいのだ。黄金が無ければ今日の世の中は、何程聖人でも、学者でも、田舎の爺でも、矢張名誉を得、立身出世したとは言はれない。金のない奴は何時でも、彼奴は相変らず意気地なしだ。困つて居やがるナア位で、社会から追つ払はれて了ふのだ。嬢の禪一枚でも、六一銀行へ持つて行けば、少々ばかり汚くつても金になるが、髯や名誉では借金取りを追つ払ふ訳には行かない。如何に俺は学士だ、勅任官だ、華族だ、おれは社会を取締る警官だ、と威張つて見た所が、肝腎の金がなければ、サア鎌倉と云ふ時には、グーの音も出ない。やつぱり米屋へ頭を下げたり、味噌屋へ味噌をすつて、御千度を踏まねばなるまい。それを思ふと金なるかなだ。併し何程金が欲しいと云つても、トランスになるだけは、考へねば成るまいぞ」

甲「何、現代の人間は優勝劣敗式だから、トランスせない奴は一人もありやしな

いよ。金が無ければ、勅任官でも奏任官でも、カラツキシ駄目だ。況してや判任

雇傭、へツポコ官吏をやだ。昼は廟堂に国政を議して威張つて居つても、夕べに米櫃の泣く音を聞いては、如何なる志士でも、豪傑でも、断腸の涙を溢さずには居られまい。それ故今の世の中は皆までとは言はぬが大小トランスを行らない奴は無からうよ。月、雪、花、恋愛、肉楽などと言つて居つても、明日の食物に芋の小片一つないと来ては、三年の恋も猶覚め了るでは無いか。身には錦衣をまとひ、髭髯いかめしく天下を睥睨し、口角泡を飛ばして、大言壮語を為すも、懐中無一物と来ては、乞食の女だつて相手にして呉れない。威張れば威張る程腹が苦しく、錦を着れば着るほど、胸が苦しい。三歳の童子も、金満家の児は金の威光で尊まれ、阿弥陀様でさへも金箔で価値が出る世の中だ。何程華族でも、法主でも、債鬼の前には頭が上らず、靴屋の息子も金さへ有れば結構な若旦那様と、もてはやさるる世の中だ。たとへ無理しても、金さへ持つて居れば、悪も善で通用するのだから、俺は何うしても初心を枉げない覚悟だ。青楼へ登る時にも、ヘイーいらつしやいと意気な詞や、お通り遊ばせ、と艶な台詞で迎へられても、イザ勘定となつて一文も無いと来ては、如何に嬋妍な美人でも、忽ち額に皺を寄せ、眼

を吊り上げ、柔和なお世辞の良い番頭でも、苦情を述べ立てずには居られないぢやないか。先に艶麗にして柔和なりし其顔は、忽ち鬼かエソマと激変し、入らつしやい、お上り遊ばせ、の言霊は忽ち、出て行け、腰抜け奴、の暴言となり、命令となり、果ては引っぱられた其手で、すげなくも突出され、迎へられた其口から、唾液を吐きかけられる事になるのだ」

乙「成程そらさうじゃ。金が無くては今の世の中に生活する事も出来ない。何うしても衣食住を廃することの出来ない人間は、食はずには生きて居れない動物たる以上は、如何に金銭に威張られても仕方がない。是非共善良なる方法で、黄金を蓄へ、米を買ひ、生命を繋ぐ算段をせなくてはなるまい。

「イザさらば、花見にごんせハルセイ山」

も衣食足り、住居あり、生命あつての上の事だ。そこでこの衣食を満たし、住居を定め、生命を繋ぐ算段するのが肝腎だが、こいつが抑難ケしいので、栄辱も利

害も、禍福も得失も、倫常も学問も、教育も戦争も、皆この必要から湧き出されるのだ。此根本的原理を離れた道徳も無く、此原理を去つて社会なく、国家もない。況んや政治、経済、実業、教育、倫理、科学、宗教をやだ。宇宙間の森羅万象、これ悉く、吾々が生活の資料となり、要素となるもので、この生活の無き以上は、宗教も、坊主も、神主も必要がないのだ。況んや、聖人君子も、天地そのものも、既に必要がない。太陽の光線、星辰の運行、風雨霜雪、河川港海、山岳森林、皆これ、吾々が生活の為に設けられたものでは無いか。この生活をなし、生命をつないで行くのは、人間それ自身でなければならぬ。人生と云ふのは、生活上に於いて、千差万別の状態のあるのを、云ふのだからのウ。成るべくはトランスだけは止めて天与の富源を開拓しようぢやないか

甲 俺たちは、百姓せうにも田畑はなし、鋤鋤、その他の附属道具もなし、商売するにも資本はなし、だと云つて乞食も出来ないから、この世を太く短く暮すトランスを、止むを得ず選ぶことにしたのだ。貴様も今となつて、そんな弱音を吹くもので無いよ。それよりも早く、何とか一仕事して帰らなければ、親分に言訳

が立たぬぢやないか」

かく話す所へ、法螺貝の音ブーブーと、遠く近く、或は高く、或は低う、響き来たる。

甲乙二人の名は、ヤク、エールと云ふ。どこともなく、権威の籠もつた法螺の音に稍怖気付き、傍の灌木の茂みに姿を隠した。治道居士はベル、バット、カークス、ベースの改心組と共に此場に現はれ来り、二人が隠れて居る、傍の芝生に腰打かけ、息を休めた。そして治道居士は二人のトランスが、此密樹の蔭にかくれてゐる事も、バラモン軍の兵士であつて、今はトランスに成下つてゐる事も、靈感に仍つて直覺してゐた。治道居士はワザと大きな声で二人に聞こえよがしに、治道「オイ、ベル、バット、外兩人、どうだ昨日迄トランスをやつて居つた時の心と、只今の心と何方が安心に思ふか」

ベル「ハイ、お尋ね迄もなく、朝から晩迄、戦々恟々として、人の声を聞いてもビクビクし、法螺の音を聞いても、慄ひ上つて居りましたが、斯う何はなく共真心に立返り、あなたのお伴をさして頂き、神さまの愛を悟つた上は、今迄天地暗

澹^{たん}として塞^{ふさ}がつてゐた世界^{せかい}が、無限^{むげん}大^{だい}に拡張^{くわくちやう}し、心^{こころ}の中^{なか}に天国^{てんごく}浄土^{じやうとど}が建設^{けんせつ}され、
こんな楽^{たの}しい嬉^{うれ}しい事^{こと}は、バラモンの軍人^{ぐんじん}時代^{じだい}にも会^あふた事^{こと}がムいませぬワ」
治道^{ちだう}「さうだらう。俺^{おれ}だつてバラモン軍^{ぐん}の中將^{ちゆうじやう}と迄^{まで}なり、三軍^{さんぐん}を指揮^{しき}して権威^{けんゐ}を
誇^{ほこ}り、何^{なに}不自由^{ふじゆう}なく暮^くらして居^をつた時^{とき}よりも、斯^かう比丘^{びく}と成^{なり}下^{さが}り、一蓑^{いっさい}一笠^{いちりつ}で神^{かみ}
の為^{ため}世^よの為^{ため}に、広^{ひろ}い天地^{てんち}を跋涉^{ばつせう}する位^{くらゐ}愉快^{ゆかい}な事^{こと}はないよ。此^{この}広^{ひろ}い結構^{けつこう}な此^{この}世^よの中^{なか}
を、狭^{せま}く暗^{くら}く、恐^{おそ}れ戦^{をの}いてくらすのも、喜^{よろこ}んで勇^{いさ}んでくらすのも、皆^{みな}心^{こころ}の持^{もち}様^{やう}一
つだ。お前^{まへ}もヨモヤ元^{もと}のトランスに、逆^{ぎやく}転^{てん}するやうな事^{こと}はあるまいなア」
ベル「ハイ、どうしてどうして、そんな馬鹿^{ばか}な事^{こと}が出来^{でき}ませうか。これ丈^{だけ}の愉^ゆ快^{かい}
を味^{あぢ}はうた上^{うへ}は、アタ窮^{きう}屈^{くつ}な恐^{おそ}ろしい、トランスなんかになれますか。世^よの中^{なか}に
トランスをやる人間^{にんげん}程^{ほど}、馬鹿^{ばか}の骨頂^{こつちやう}はムいませぬワ。此^{この}世^よの中^{なか}が狭^{せま}くて、大^{おほ}きな
声^{こゑ}で咳^{せき}一つ出来^{でき}ぬやうな気^きが致^{いた}しますからな。何^{なに}程^{ほど}金^{かね}の世^よの中^{なか}だと云^いつても、自^{じぶ}
分の魂^{たましひ}には替^かへられませぬ。折角^{せつかく}結構^{けつこう}な神^{かみ}の分^{ぶん}霊^{れい}を頂^{いた}いて、悪^{あく}に曇^{くも}らして了^{しま}へば、
久^く遠^{おん}の霊^{れい}界^{かい}に於^{おい}て其^{その}報^{むく}いを受^うけ、無^{むげん}限^{げん}の苦^{くる}しみを受^うけねばなりませぬからな」
治道^{ちだう}「そらさうだ。僅^{わづ}かの此^{この}世^よの中^{なか}で、悪^{あく}事^じを為^して、未^{みらい}来^{えい}永^い劫^{ごふ}の災^{わざはひ}の種^{たね}をまく位^{ぐらゐ}

馬鹿な者はあるまいよ。私だとて、別にゼネラルを棒にふりたい事はないが、未
来の程が恐ろしいから、みすばらしいこんな比丘になつたのだ。バット、カーク
ス、ベース、お前もベルと同感だらうなア」

三人一度に幽かな声で「ハイ」と言つたきり、落涙してゐる。

治道「お前等三人は泣いてゐるぢやないか。今の境遇が苦しいのか……イヤ辛い
のか。但しは私の云ふ事が氣に容らぬのか」

ベル「オイ、バット、なアんだ。ほえ面かわいて……余りバットせぬぢやないか。
オイ、カークス、御主人さまの前だ。何もカークスには及ばぬ。遠慮は要らぬか
ら、自分の思つてる事を、ハキハキと申上げるがよからう。……これベース、汝
もうつむいてベースをかいてるよりも、チツと、バットしたら何うだい」

三人一度に涙声になつて、

三人「イヤ、モウ感謝に堪へませぬ。嬉し涙をこぼしてゐるのでムいます」

ベル「ヨシ、それなら分つて居る。サア之から、治道居士様、又テクシーに乗
つて進む事に致しませうか」

後の灌木の茂みから、ワーツと男の泣声が堤防のくぢけたやうな勢で聞えて来た。

ベルは後振返り、

ベル「ヤア何だ。ここにも亦ベソをかいてゐる感謝組が隠れて居ると見えるな……。オイ何者か知らぬが、そんな所で何を吠るのだ。こんな結構な天国に生れ乍ら、泣く奴があるかい。汝も大方神さまの恵に放れた馬鹿者だらう。遠慮は要らぬ。ベル宣伝使が一つ引導を渡してやらう。サア早う、出たり出たり」

此声にヤク、エールの両人は、ころげるやうにして治道居士の足許へ現はれた。ベル「ヤア、汝はヤクにエールぢやないか。こんな所で何が悲しいか知らぬが、吠面かわいたつて、何のヤクにたつかい。ヤクザ者奴、汝も元は軍人ぢやないか。ウン汝はエールだな。元は剣を帯びた軍人ぢやないか。何をメソメソとほエールのだい」

ヤク「ア、お前はベルか。俺は実の事を白状すれば、バラモン軍の解散よりゼネラルさまから頂いた涙金は酒色の為に使ひ果たし、よるべ渚の捨小舟、とりつく

島もないので、そこら中をぶらつきトランスを兩人がやつてみた所、思ふやうに、良心が咎めて仕事も出来ず、困つてゐる所へ、セール大尉がハール少尉と共に、虎熊山に岩窟をかまへ、山賊をやつてると聞いたので、そこへ尋ねて行つて、兎分にして頂き、親分の命令で、今何か可い仕事はなからうかと、此沼のふちで網をはつてゐた所だが、治道居士様とお前との話を木蔭で聞いて、自分の身が恐ろしくなり、何だか今迄の心が恥かしくて、思はず知らず泣いたのだ。どうぞ私も此比丘様に助けて貰うてくれ。鬼春別將軍様ではないか」

ベル「オウさうだ。改心さへすればキツと許して下さるよ。俺だつて二三日前迄は、汝のやうに親分はないけれど、独立でトランス団を組織し、随分悪逆無道をやつて来たが、結局自分が食ふ丈が難ケしいのだ。トランスして居つては、何時までたつても妻子を養ふといふやうな事は出来ない。此位約らぬ仕事はないから、俺もフツツリとトランスは断念したのだ。元はお前の御主人様だから、キツと許して下さるだらうよ」

治道「お前はヤク、エールだなア。こらへてくれ。お前を墮落させたのは皆俺が

悪いのだ。俺はお前たちを墮落させた其罪亡ぼしに、一蓑一笠の比丘となつて、
艱難辛苦をなめ、罪の贖に歩いてゐるのだ。許しも許さぬもない、改心さへして
呉れたら、こんな嬉しい事はない。サア之から俺と一所に、聖地エルサレムへ参
り、魂を研いで、立派な神さまの御子となり、世の為道の為に尽さうぢやないか
ヤク「ハイ、有難うムいます。何分宜しう御願ひ致します」
エール「ゼネラル様、宜しく御願ひ致します。キツと改心を致しますから……」
治道「セール大尉が墮落して、虎熊山とやらに、山賊の張本となつてゐるのか。
之を聞いた上は見遁しは出来まい。之も俺の罪だ、何とかして改心させねばなる
まい。サア、ヤク、エール俺を案内してくれ」
両人は「ハイ承知致しました」と涙を拭ひ乍ら、先頭に立つて、虎熊山の岩窟
へ、治道居士の一行を導き行く事となつた。

(大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 松村真澄録)

第二章 古峡の山（一六五八）

今雲を出でた虎熊山の頂は、夏ながら雪に覆はれて、その上に立つ噴火の煙は、青味を帯びた黄土色をして、南へ南へと靡いてゐる。

道はトロトロ上りになつて、萱野の音淋しく、昔のバラモンの関所跡の門柱が、二本倒れかかつて悲しげに仰天してゐる。あたりの森林の景色は木の色や草の色、山々の色迄が、すべて深山の趣きを持つて居る。左右の密林を脱けると、雨にやつるる音と風に並みふす音許りで、人の丈よりも高い萱草の、中の右も左も雲許り、足に任して登りつつ細谷川を渡つて行く七人は、云はずと知れた治道居士の一行である。治道居士は例の法螺貝を吹き乍ら山野の邪気を清めつつ、密林の中の山径を登り行く。行く手に當つて二人のトランスが又もや路傍の石に腰打掛け、何か雑談に耽つて居る。

甲「オイ、タール、詮らぬぢやないか。バラモン軍に従つて、斎苑の館の征服に行く途中、鬼春別將軍が俄に心機一転し、軍隊を解散させたものだから、俺等も

生れてから、やつた事もないトランスとなり下り、住み馴し故郷に帰る訳にも行かず、セールの親分に従つて、あてどもない鳥を探して日々過ごすのは本当に気が利かぬぢやないか。俺アもう、いい加減に機会を考へて故国へ帰り、何とかして生計を立て、理想の生活を、自分の故郷に於て嘗んで見たいと思ふが、お前は どう思ふか

「タール」馬鹿な事を云ふな。何処で死なうと、構はぬぢやないか。凡て此天地は吾々の故郷だ。貴様の様に故郷と云つたら、自分の生れた土地許りだと思つてゐるのは、未だ真の故郷を知らぬものだ。自分の生れた故郷は只此世の旅の一夜の宿りのやうなものだ。それだから海で死ぬるもよし、山野に於て死ぬるのもよし、河で死ぬるも都で死ぬるも、田舎で死ぬるも、また、旅に出て並木の肥料になるのもいいぢやないか。天に日月星辰を宿し、地に万物を載する所、行くとして己が故郷に非ざるはなしだ。それだから此の天と地との間は、何んな処に於いて暮すも、睡るも、死ぬるも差支はない。人間が斯く悟つた以上は、別に生れた所が恋しいの、命が惜しいのと云ふ道理が無いぢやないか。何国何郡何村の何某の先

祖も、元々其土地から水のやうに湧き出で、菌や筍の様に土の中から、もぐり出たものぢやあるまい。矢張外から移住して来て、其土地を開いたのぢやないか。俺達の先祖にして已に然りとすれば、その子孫たるものは何ぞ奮つて祖先の行動を採らざるやだ。見ず知らずの新しき国に至り、新しき土地を墾いて新しい村を作るも、トランス団を組織するも皆人間の自由ぢやないか。人間たるもの、ここに至つて初めて、其面目を發揮せりと云ふべしだ。一竿飄然として狐舟に棹す、又甚だ快ならずやだ。然るを何万何千噸の汽船に乗つて一度その土地を離れむとする時、数千百の蚯蚓のやうな小胆者は、別れを惜んで涙を振つてゐるが、実に吾人の、之は恥辱ではあるまいか。同じ月の国の此土地に於て活動し乍ら、故郷を恋しがるとは、甚だ以て醜の醜たるものではないか。此地を去つて彼地に至り、隣を去つて隣に至る。何ぞ離別を惜み、心身を痛むるの愚を要せむやだ。貴様の如きは鈍根愚痴、醜態も、ここに至つて真に極まれりと云ふべしだ。あまり腹の中が見え透いて、俺ヤ可笑しうなつて来たわい。些と確りせないか、そんな事でトランス商売が勤まらうかい。一波来りて一波去り、万波来つて万波去る。之海

洋万里の状态だ。激浪も怒濤ももうこれ通常事だ。徒に真の故郷を解せない貴様の如きは、無暗に故郷に遠ざかるのを恐れ、顔色まで蒼白色に変じ、胸を焦す小魂小胆者だ。終には病気を起して縮み上り、身動きも出来ぬ、憐むべき代物だよ。千里の山野を涉つて腸を絞り、一村落の花園に快哉を叫ぶ腰抜け者の如きは、到底人生を語るに足らぬものだ。小さき寒村に、営々として田畑を耕し、田の草取りに日を暮す人間、よろしく寒山氷地、広袤漠々の野に家を築いて以て一大帝国をなして、天地経綸の司宰者たる本分を尽すが、男子たるものの勤むべき所だ。此天地は真に吾々の故郷だ。一夜の宿に等しき産土の地を出でては、再び古巢に帰り、家を求むる如き卑屈の事は為るものではない。之が今日の人間の世に処すべき要訣だ」

エム「お前の弁舌も一応尤もだが、併し乍ら産土の土地を恋しがらないものが、何処にあらうか。生れ故郷を忘れるやうな奴は遂には国を忘れ、仁義道徳を忘却し、妻子に対して不仁となり、祖先に対して不孝の罪を重ねるものだ。望郷の念に駆られざるものは、もはや人間の靈性を忘却した人面獣心ぢやないか」

タール「アハ、ハ、ハ、人の財物を掠めるトランスと成り乍ら、仁義道德も、孝、不孝もあつたものかい。此社会へ這入つた以上は善悪、倫常、孝悌などに超越せなくちや到底発達は遂げられないぞ。俺だつて生れつきの悪人ぢやないから、善悪正邪の區別位知つてゐる。併し乍ら俗に云ふ通り、勝てば官軍敗くれば賊だ。俺だつてトランス様で一生を終らうとは思はない。何とかいい機会があれば世間の所謂善に立歸り、虚礼虚偽の生活を送つて世間に謠はれ度いのは山々だ。其の材料を集むるために好きでもないトランスをしてるのだ……。まだ吾々は仁義道德を称へる丈の余地が無い。そこ迄物質的の準備も無く、世間を詐る偽善の権化となつて威張る所へは行かないのだ。今の間は何よりも商売の發達を考へるのが安全第一だ。金さへ有れば愚者も賢者となり、無学者も学者と成り、悪人も善人となり、蠅虫野郎も有力者と云はれるのだから。貴様も一つ改心してトランスの研究に一意専心没頭するのだな」

エム「トランス学の研究も随分苦しいものだな。南無バラモン大自在天、守り給へ幸へ給へ。」

霜しもおく野の辺べの夜よは更ふけて
身みを裂きる許ばかりの寒かん風ふうに
御み空そらの月つきは清きよく震ふるふ
喧けん々けん轟ごう々ごうの聲こゑ
彼かな方た此こ方なたより響ひびき来きたる
世よは何なんとなく物もの騒さわがし
秋あきの紅もみぢ葉こがらしの閑こがらしに
脆もろくも散ちりて
囀さへづる鳥とりの聲こゑひそむ
あゝ荒あれ果はてし山さん野やの景け色しき
小さ夜よふけて峰みねの松まつ風かせ
庵いほりを叩たたく
夕ゆ日ふひの影かげは暗くらくして
ババララモン男だん子しの意い気き消せう沈ちんす

守らせ給へ自在天

大国彦の大御神

あゝ苦しいせつろしい

こんな浮世に何として

私は生れて来ただらう

「タール、こりやエム、何と云ふ卑劣の歌を謳ふのだ。夏の真盛りに冬だの困だのと、そんな淋しい事を云ふない。バラモン兵士であり乍ら、意気が萎むの何のつて、泣声を並べやがつて、あゝ俺も何だか浮世が嫌になつて来たわい。水は方円の器に随ひ、人は善悪の友によると云ふからな。お前のやうな悪の破産者と一緒

に働いてみると、どうやら俺も世の中の無常を感じて、社会の所謂善の道へ墮落しさうだ。ヤア法螺貝の声が聞えて来たぞ。オイ此奴アどこともなしに権威のある声ぢやないか。サアここで一つ確り、トランスの秘術を尽し、うまく、あれを岩窟に引込まねばなるまいぞ。サア此処で善だとか正義だとか云ふ名詞は抹殺す

るのだ」

と俄にはかに空元からげんき気を出だしてゐる。

治道ちだう居士こじを先頭せんとうに、六人ろくにんの改心組かいしんぐみは密林みつりんの小径せうけいを辿たどつて漸やうやく兩人りやうにんの前まへに現あらはれた。

タール「オイ、ヤク、エール、そのお方は何処どこへおいでになるのだ」

ヤク「此方このかたは勿体もつたいなくも鬼春別将軍おにはるわけしやうくんさま様だ。俺等おれたちやお前等まへたちがトランスに墮落だらくして居

るのを改心かいしんさしてやらうと云つて、今いま、結構けつこうな御説教おせつけうを聞きかして下くださつたのだ。

そしてセールの親分おやぶんに誠まことの教をしへを聞きかせて改心かいしんをさせてやらねばならぬと云つて、

俺等おれたちに案内あんないを命めいじ遊あそばしたのだから、貴様きさまもいい加減かげんに改心かいしんしたがよからう。ト

ランスなんて詮つまらぬからな」

タールは心こころの中うちにて、

「いや、いい鳥とりが引掛ひっかつた。鬼春別将軍おにはるわけしやうくんは今いまあゝして比丘びくになつてゐるものの、

元もとが元もとだから、一万両いちまんりやうや、二万両にまんりやうの金かねは持もつてるに違ちがひない。一つ改心かいしんしたと見み

せかけ、うまく岩窟いはやに引張ひっばり行ゆかう……エール、ヤクの奴やつ、仲々なかなか偉えらいわい。岩窟いはや

の中なかに引込ひっこみ、否応いやおう云いはさず、ボツタくる所存しよぞんだな。俺おれも一ひとつ帰順きじゆんと見みせかけ、
一ひとつ岩窟いはやへ案内あんないしてやらう」
と故意わざと空涙そらなみだを流ながし、

タール「これはこれは鬼春別將軍様おにはるわけしやうぐんさまでムごさいましたか、お久ひさしうムごさいます。私わたしも、
こんなトランスはし度たくありませんが、貴方あなたから頂いただいたお手当金てあてきんは、心こころの悪魔あくまに
皆使みなつかはれて了しまひ、今いまは止やむを得えずセールの世話せわになり、虎熊山とらくまやまの岩窟いはやにトランス
の乾児こぶんとなつて居をります。然しかし貴方あなた様が、そんな姿すがたとお成なり遊あそばし、世界せかいをお歩ある
き遊あそばすのを見みて、懺悔ざんげの心こころが湧わきました。只今ただいま限り私わたしも改心かいしん致しますから、何どう
卒岩窟そいはやにお越こし下くださいまして、セールの大親分おほおやぶんを説とき伏ふせ、善道ぜんだうへ復かへるやう御取おとりは
計からひ下くださいませ」

エム「將軍様しやうぐんさま、何分宜なにぶんよろしくお願致ねがひいたします」

とエムは本ほん当たうに涙なみだを流ながしてゐる。治道居士ちだうこじはタールの心こころの中なかからの改心かいしんでない、
自分じぶんをたばかり為ためだ、とは直覺ちよくかくして居あるが、兎とも角岩窟かくいはやの中なかに無事ぶじに到着たつちやくして、
セール、ハールの巨頭きよとうを改心かいしんさせむと決心けつしんし、ワザとタールの言葉ことばを信しんずるもの

の如く装ひ、

治道「やア、それは何より結構だ。俺もお前の言葉を聞いて感謝に堪へない。サア案内して呉れ」

タール「ハイ、承知致しました。勝手覚えし此山道、近道も知つて居りますれば、お伴をさして貰ひませう」

エム「もしもし、治道居士様、何卒私を貴方のお弟子となし、どこかへ連れて行つて下さいませ。セール、ハールの大将を初め、此タールだつて到底改心の見込みはありません。あんな事云つて計略にかけて懐のものを盗らうと云ふ企みでいますよ」

タール「コリヤ、エム、何と云ふ事を吐すのだ。俺の心が貴様に分らうかい。仮令セール、ハールが悪人でも、もとの主人たる將軍様が、斯うなつて衆生済度に
お歩き遊ばす姿を拝んだならば、屹度改心をなさるにきまつてる……。味方の裏
切りする奴がどこにあるかい」
と小声で窺める。エムは大声を張り上げ乍ら、

エム「もし治道様、御一同様、険呑ですから御用心なさいませ。私は之にてお暇
します。岩窟へでも帰らうものなら、私の今云った言葉を大将に告げ、どんな目
に合はすかも知れませぬから、貴方も何処へ逃げて下さい。さア早く早く、お逃
げなさい」

と云ひ捨て、雲を霞と森林の中へ姿を隠した。

タール「ハ、ハ、疑の深い奴だな。セールの親分だつて、元は真人間だ。治道居
士様の懇篤な説示によつて改心するにきまつてる。此悪人の俺でさへも、将軍様
のお姿を拝んだ丈で、感涙に咽び、最はや悪魔は逃げ去つたのだもの、もし将
軍様、何卒エムの云ふた事を信用遊ばさず、私が案内しますから、何卒岩窟へお
越し下さいませ。さア、ヤク、エール、貴様は將軍様のお後からお伴し、随分抜
かりなく用心して上るのだぞ」

と小声にて囁く。ヤク、エールは默然としてニタリと笑ふ。

治道「アハ、ハ、随分人生と云ふものは面白いものだ。仮令悪魔に謀られよ
うとも命を取られようとも、天に任した吾が身魂、何の恐るる事があらうぞ。之

でも昔は三軍を叱咤した勇将だ。オイ、タール、心遣ひは無用だ。サア早く案内して呉れ。

虎熊の山は如何程峻しとも

安く上らむ神のまにまに。

セー、ハール、醜の司を言向けて

神の大道に靡かせて見む。

仰ぎ見れば山の尾の上は黒雲に

包まれにけり晴らしてや見む

タール「サア御案内致しませう。之から段々坂が峻しくなりますから、足許に気を付けてお上り下さいませ。然らば私が先導致しませう」
と胸に一物、心に二物、罪の重荷を背負ひつつ、喘ぎ喘ぎ上り行く。

(大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 北村隆光録)

(昭和一〇・六・一六 王仁校正)

第三章 岩侠(がんけふ)「一六五九」

虎熊山(とらくまやま)の岩窟(いはや)に捕(と)らはれて居(ゐ)る二人(ふたり)の女(をんな)があつた。何(いづ)れも別々(べつべつ)の室(むろ)に幽閉(いうへい)され、
身(み)の薄命(はくめい)を歎(かこ)ちつつ、窃(ひそか)に歌(うた)をもつて両女(りやうちよ)互(が)に意(い)志(し)を通(かよ)はして居(ゐ)る。此女(このをんな)は一人(ひとり)
はデビス姫(ひめ)、一人(ひとり)はブラワ、一人(ひとり)はブラワ、一(ひと)ダ姫(ひめ)であつた。

ブラワ、一(ひと)ダは窃(ひそか)に謡(うた)ふ。

私(わたし)は悲(かな)しい盲(めくら)の小鳥(ことり) 春(はる)は来(く)れども花(はな)咲(さ)かず

小鳥(ことり)の声(こゑ)も聞(き)こえない 明(あ)けよが暮(く)れよが暗(やみ)ばかり

私(わたし)は淋(さび)しい盲(めくら)の小鳥(ことり) 恋(こひ)の涙(なみだ)の星(ほし)さへ見(み)えず

明(あ)けよが暮(く)れよが暗(やみ)許(ば)かり 恋(こひ)しき男(をとこ)に伴(とも)はれ

父と母との懐を やうやく離れし雛鳥の

古巢に帰るよしもなし 恋しき人は今いづこ

一目遇ひ度く思へども 醜の企みの岩窟に

深く包まれ日も月も 光も見えぬ身の歎き

誰に語らむ術もなし 永遠の涙は迸り

いつしか晴れて逢坂の 関の戸開き鶯の

鳴く音を聞かむ事もがな 思へば思へば父母の

御身の上が案じられ 胸にただよふ万斛の

涙をいづれに吐却せむ あゝ惟神々々

御霊幸倍ましまして 一日も早く三五の

神の司の玉国別が 妾の危難を悟りまし

救ひ出さむと出で来ます 嬉しき便りを松虫の

なく音も細る岩窟の中 吾身の上ぞ悲しけれ

隣の岩窟の牢獄に投げ込まれたデビス姫は、此歌を聞いて、隣室にブラワゝー
ダの囚はれて居る事を悟った。

デビス姫「テルモン山に千木高く 大宮柱太知りて

鎮まり居ます大神に 朝な夕なに仕へます

父と母との懐を 離れて神の三千彦に

救はれ漸うハルセイの 沼の畔に来て見れば

醜の曲津の四つ五つ 霞の中より現はれて

有無を云はさず引捉へ 口には簞ます猿轡

無惨の責苦に会ひ乍ら 此岩窟に引き込まれ

朝な夕なに盗人の セール、ハールの棟梁に

心にもなき恋路をば 強要されて身を藻掻き

歎き苦しむ吾こそは 三千彦妻のデビス姫

今聞く歌は伊太彦の 妻の命にましますか

悲しき浮世の例にもれず 汝が命も悪漢の

醜の企みに陥りて 此処に来らせ給ひしか

あゝ惟神々々 天地に神のますならば

醜の司の魂を 柔げ清め妾等の

二人の苦をば救ひませ 神は汝と共にあり

人は神の子神の宮 神に等しきものなりと

廠の教は聞きつれど かよわき女の如何にせむ

果敢なき浮世の夢路をば 辿る吾身の悲しみは

夢になれよと朝夕に 祈り尽せど恐ろしき

この正夢は晴れやらず 虎熊山の山おろし

朝な夕なに吹き荒み 心を破り身を碎き

もはやせむ術なく涙 涸れ果てたるぞ悲しけれ

あゝ惟神々々 御霊の恩頼をたまへかし

と幽かすかに謡うたつて居をる。隣室りんしつにあるブラワゝ一ダは、此この声こゑを聞きいて稍力やちからづき、夜中やちゆう
人静ひとしづかなる時ときを考かんがへ、幽かすかな声こゑで歌うたをもつて互たがひに身みの果敢はかなさを語かたり合あつて居ゐた。

デビス姫ひめ「ブラワゝ一ダ姫ひめの命みことは如何いかにして

此岩窟このがんくつに囚とらはれたまひし」

ブラワゝ一ダ姫ひめ「曲者くせものにかどわかされて伊太彦いたひこに

逢あはむと思おもひ迷まよひ来きにけり」

デビス姫ひめ「汝なれも亦また浮世うきよの外そとの人ひとならじ

妾わらはと共にとも悩なやみますかも」

ブラワゝーダ姫ひめ 如何いかにして此この苦しみを逃のがれなむ
泣なけど詮せんなき今いまの身みの上うへ 』

デビス姫ひめ 妾わらはとて同おなじ思おもひの杜鵑ほととぎす
忍しのび音ねに泣なく声こゑもかれつつ 』

ブラワゝーダ姫ひめ 伊太彦いたひこや三千彦みちひこ司つかさを初はじめとし
吾わが師しの君きみを案あんじ暮くらしつ 』

デビス姫ひめ 皇神すめかみの守まもらせたまふ身みなりせば
また救すくはるる時ときや来きたらむ 』

かく互たがひに述懐じゆつくわいをのべて居をる。其処そこへスタスタと忍しのび足あしにやつて来きたのは、此岩このがん
窟くつで副親分ふくおやぶんと聞きえたる、元もとバラモンの少尉せうゐハールであつた。ハールは悪人あくにんに似にず、
眉目びもく清秀せいしゆ、白面はくめんの美男びなんである。彼かれはブラワゝーダの嬋妍せんけん窈窕えうてうたる姿すがたに恋慕れんぼし、如い
何かにもして吾掌中わがしやうちうの珠たまとなさむと、恋こひの悩なやみに心胆しんたんを碎くだいて居ゐた。親分おやぶんのセール
が酒さけによひ潰つぶれて寝ねた隙すきを考かんがへ、恋こひの野望やぼうを達たつせむと、足音あしおとを忍しのばせて、この牢らう
獄ごくの入口いりぐち迄までやつて来きたのである。

ブラワゝーダ「訝いぶかしや此真夜中このまよなかに何者なにものぞ

とくとくと帰かへれ醜しこの曲人まがひと。

妾わらわはこそ神かみに仕つかふる司つかさぞや

如何いかでか曲まがの襲おそひ得うべけむ」

ハール、窓まどの外そとより

吾われこそは胸むねもハールの司つかさぞや

汝なれに逢あはむと忍しのび来きにけり。

朝あさ夕ゆふに汝なれ救すくはむとあせれども

セールの司つかさの許ゆるしなれば

ブラワゝーダ姫ひめ 天あめが下したに男子をのこと生うまれ出いでし身みの

盗ぬす人びととなる人ひとぞをかしき。

みめかたち如何いかに清きよけく居ゐますとも

醜しこの司つかさに言ことの葉ははかけじ

ハール 表う面はには醜しこの司つかさと見みゆるらむ

心こころの花はなを君きみは見みざるや。

花も実もある武士ぞ吾は今
汝を救はむと忍び来にけり

ブラワゝーダ姫「偽りの多き世なれば汝が言葉

如何で誠と諾はるべき。

汝も亦盗人ならば烏羽玉の

夜は家に居ず外に出でませ。

益良夫がかよはき女の香に迷ひ

慕ひ来れるさまぞをかしき

ハールは暗がり佇立し独言、

「ハテナ、こいつは如何しても俺の言ふ事は聞かないと見えるわい。まてまて、

一つ工夫を凝らして、此女を諾と云はせなくては、男が一旦云ひ出した言葉を、後に引く訳には往かず、又男子の面目玉が全潰れになつて仕舞ふ。何と云ふても生殺与奪の権を握つて居る俺に、恋の弱身があればこそ、柔和しく出て居るもの、何うでも成らん事は無い。一つ脅かして往生さしてやらう』

と打肯き、態とに声を荒らげ、ハール『これや女、柔和しく出ればつけ上り、七尺の男子に恥を搔かすとは、不届き千万の曲者だ。生殺与奪の権を握つた此方、嫌なら嫌でよい。無理往生にでも、見ん事靡かして見せよう。覚悟を定めて色よい返事したらどうだ』

ブラウゝーダ『ホ、ホ、ホ、青二才の分際として、夫れや何を云ふのですか。些と恥をお知りなさいませ。妾のやうな繊弱き女を、獅子を放り込むやうな牢獄にぶち込み、弱身をつけ込んで恋の欲望を遂げようとは、見下げ果てたる貴方の心底、そんな卑怯未練な男には、佞令体が烏の餌食になるとても、アタ阿呆らしい靡く女がムいませうか。ちと胸に手をあて考へて御覧なさい。妾の愛する男は三五教の宣伝使伊太彦司より外にはムいませぬ哩』

ハールハール何なに、其方そのほうは伊太彦いたひこと云いふ奴やつの女房にようぼうになつて居をるのか。ても扨さても氣きの毒どくなものだのう。伊太彦いたひこと云いふ奴やつは此方このほうの計略けいりやくにかかり、陷穽おとしあなにおち込み昨日きのふの夕ゆふ暮寂滅ぐれじゃくめつ為樂ためらくとなつたぞよ。何程なにほど恋こひしい男をとこでも、幽霊いうれいと同棲どうせいする訳わけには往ゆくまい。暮寂滅ぐれじゃくめつ為樂ためらくとなつたぞよ。何程なにほど恋こひしい男をとこでも、幽霊いうれいと同棲どうせいする訳わけには往ゆくまい。人間にんげんは思おもひ切きりが肝要かんえうだ、お前まへも終身しゅうしん、独身どくしん生活せいくわつをする訳わけには行ゆくまい。何れ夫をつとを持もたねばなるまい。どうだ、魚心いさごころあれば水心みづこころだ。俺おれの顔かほも全まったく見捨みすてたものでもあるまい。是これでもハールナみやこの都みやこでは美男びなんと名なを取とつたハール少尉せうゐだ。思おもひ直なほして俺おれに靡なびく氣きは無ないか。ブラワブラワ「ダダ何なに、伊太彦いたひこさまは貴方あなたがたの毒手どくしゆにかかり、陷穽おとしあなに落おちて御亡おなくなり遊あそばしたと云いふのは、それや真実しんじつでムごまいますか。ハール「アハハハ、お前まへも不便ふびんなものだわい。伊太彦いたひこは、すつかり有金ありがねを掠奪ふんだくられ、法衣ころもを脱ぬがされ、真裸まっぱだかになつて、奈落ならくの底そこへ墜おち込んで死しんだのだ。お前まへも、もうよい加減かげんに締めめたらどうだ。ブラワブラワ「ダダホホ、そんな嘘うそを云いつても駄目だめですよ。伊太彦いたひこさまは決けつして法衣ころもは着きて居ありませぬ。お金かねは持もつて居をられませぬ、お師匠ししやうさま様が持もつて居をられるので、

ほんの小遣ばかり……それに夜光の玉を持つて居る以上、貴方方の計略にかかるやうな事はありません。ホ、ホ、ホ、でも扱ても腑甲斐ない柔弱男子だこと、余りの事で愛想がつき果て、開いた口もすばまりませぬわい。お生憎さま、私の体はただ伊太彦様のお間に合せなければなりませんから、平にお断り申します。どうか他のお方にお掛け合ひなさいませ。とやけ気味になつて、若い優しい女が業託を叩き出した。女が命を放げ出した時は、何とも云へぬ強い事を云ふものである。

デビス姫は息を潜めて、二人の問答を一言も聞き漏さじと、耳を聳てて居る。そこへふと目をさました親分のセールスは、ハールの姿が見えぬので不審を起し乍ら、便所に立つて行くと、二人の女を閉ぢ込めた牢屋の方面に何だか囁く声が聞えるので、未だ酔の残つて居る足許で、暗い隧道の中を探つて来乍ら、ドンと許りハールの肩に突き当つた。ハールは不意を打たれて引くりかへり、聊か岩角に頭蓋骨を打つけ、「ウン」と其場に倒れて仕舞つた。

セールス「タタ誰だい。俺の未来の妻と妾の前へ、甘い事せうと思つて、何奴か知

らぬが口説くどきに来て居をつたな。罰ばちは靦てきめん面めんウンと云いふて倒たふれよつたが、大方おほかたハールの野郎やらうだらう。あいつが居をるとどうも俺おれの恋こひの邪魔じやまになつて仕方しかたがない。青白あをじろい瓜うり実顔ざねがほをしやがつて、女をんなにチャホヤせられる奴やつだから、どうかして遣やらうと思おもつて居ゐた所ところだ。偶然ぐうぜんにも此方このほうに突つきあたられ、頭あたまを割わつて寂滅じやくめつ為らくとなりよつたが、今迄いままでは彼奴あいつも一寸ちよつと小才こさいの利きく奴やつだから、トランス団組織だんそしきには与あつつて力ちからがあつたが、もう斯かう基礎きその固かたまつた以上いじやうは、有あつて却かへつて邪魔じやまになる代物しろものだ。ても扨さても、好いい時には都合つがふのよい事こと許ばかり来くるものだなア」

ハールは頭あたまを打うつて氣きが遠とほくなり、「ウンウン」と唸うめいて居ゐたが、セールが大おほきな声こゑで笑わらふたのでフト氣きがつき、暗くらがりで「ウンウン」と唸うなりながら様子やうすを考かんがへて居をる。

セール「オイ、二人ふたりの女をんな、最前さいぜんから俺おれの独言ひとりごとを聞きいたであらうのう。そして、ハールの野郎やらうがお前達まへたちに何なにか云いつたであらう。夫それを一つ聞きかして呉くれ。お前達まへたち二人ふたりの生命いのちは、このセールが片手かたての中に握にぎつて居をるのだ。素直すなほに致いたさぬと為ためが悪いわるぞエーン。あゝ酔よふた酔よふた苦くるしいわい。どうやら百貨店ひやくくわてんを開店かいてんしさうだ。兎とに角かく今日けふ

は舌が纏れて充分の交渉も出来ないから、明日迄保留して置かう。ハールが斃つた以上は、もう俺のものだハ、ハ、ハ。かう見えても二人の女、血も有り涙も有るセール大尉だ。お前達は血も涙もない悪棘の人間だと思ふであらうが、義理人情もよく知つて居る、恋も味はつて居れば愛も解して居る。まづ今晚は楽しんで明日を待つがよからう」

と勝手の理窟を並べ乍ら吾居間へ歸つて往く。ハールは相変らず「ウンウン」と唸つて居る。デビス姫、ブラワ、ーダの二人は、同じ思ひの負ず劣らず、暗を幸ひ舌を出し腮をしゃくつて嘲笑して居た。

（大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 加藤明子録）

第四章 不聞銃（一六六〇）

虎熊山は昼夜の区別なく盛んに噴火してゐる。そして時々鳴動を始め、地の震

ふ事も日に三四回はあつた。セール、ハールの両人は旅人を、乾児に命じて甘く此岩窟に引ずり込ませ、赤裸にしては四肢五体を解き、此噴火口に放り込み焼いて了ふのを例としてゐた。セールは夜が明けてフト目をさました時は既に酔は醒めてゐた。併し乍ら昨夜ハールに突当り、ハールは九死一生の場合になつてゐた事を思ひ出し、もしや蘇生しよつたら大変だから、今の内に片付けて了はむと、自ら抜身を提げてうす暗い牢獄の前に行つてみると、ハールの姿は影も形もなくなつてゐた。其实ハールはセールの酒に酔うての独言を聞いて、「此奴ア大変だ。かやうな所に居つては何時自分の命が亡くなるか知れぬ」と、頭に繃帯をし杖をついて夜陰に紛れ、此岩窟を脱け出して了つたのである。

セールは二人の女の牢獄の前に只一人進みより、顔色を和らげて猫撫声をし乍ら、牢獄の扉を自ら開き、髯武者武者の顔にも似ず、

セール「ウン、お前は淑女のデビス姫さまであつたか、ホンに苦勞をしただらうな。何分ハールの奴、罪もないお前たちを拐かし、かやうな残酷な事を仕やがつて、俺も可哀相で、何うとがして助けてやりたいと朝夕心を砕いてをつたが、何

しる彼奴は柔道百段の強者だから、俺が大将となつてゐるものの、其実権はハールが握つて居るのだから仕方がなかつた。昨夜は計らずもお前の仇をうつてやつたのだから、云はばお前の命の親だ、どうだ嬉しいか。ブラワゝーダといふ女も可哀相だが、彼奴ア何だかハールの奴と甘つたるい事を云つてゐやがつたやうだから、ひよつとしたら情意投合でもやつたかも知れない。何分青白い瓜実顔だから……それで先づ彼奴は後廻しとして、最も愛するお前の方から助けてやらう。どうぞや嬉しいか。さぞ嬉しいだらうの」

デビス「御親切は有難うムいますが、余り嬉しいうは思ひませぬ。何だかあなたのお面が怖ろしうなつて来ましたもの」

セール「ソリヤお前取違ひといふものだ。ハールの様な、女か男か分らぬやうな優しい面してゐる奴に、人を殺したり、大泥棒のあるものだ。俺のやうな髯武者武者の黒い面してゐるものは却つて心が美しいものだよ。サア、そんな事を言はずに、お前の命の親だから、とつとと出たが可からうぞ」

デビス「妾はここを出るのは厭でムいます。万劫末代永久に岩窟姫神となつて、

とらくまやま 虎熊山の主になりすから、どうぞ、そんなせうもない事を云はないでおいで下
さいませ。それよりも一時も早く妾の命を奪つて貰へば満足でムいます。かやう
な所から引出され、あなたの弄物になるよりも、此儘死んだ方がいくらマシだか
知れませぬワ」

セール「これは又、悪い了見と申すもの、命あつての物種だ。そんな分らぬ事を
いはずに、俺の云ふ事を聞いたら何うだ。又面白い事や嬉しい事が、タツプリと
見られるかも知れないぞや」

となり 隣の間よりブラワ「一ダは細い声で、

ねえ 姉さま、デビス姫様、出ちや可けませぬよ。獅子の餌食になるよりも、自由自
在にここから天国へ行かうぢやありませんか」

デビス「あゝブラワ、一ダ様、あなたも其お考へですか、そんなら兩人共永久に
此岩窟に鎮まることに致しませう。私は岩窟姫になりますから、あなたはお年が
わか 若いから木花咲耶姫にお成り遊ばせ。そして私は世界人民の寿命を守り、あなた
は世界の平和を守る神とおなり遊ばせ。それが本望ですワ」

ブラ「さう致しませう。決して出ちや可くませぬよ」

セール「オオ、きつい事同盟したものだな。コリヤコリヤ兩人、二人一緒に出してやるから、兩人仲よく一ぺん面会する気はないか」

ブラ「私も一度姉さまの顔がみたいから、厭だけれ共、お前さまの願ひを許して、出てあげまほうかな」

セール「エーエ、仕方のない姫御前だなア」

と云ひ乍らガタリガタリと兩方の牢獄の戸を捻ぢ開けた。二人は飛立つ許り喜んで、牢獄を立出で、互に抱きついて嬉し涙にくれてゐる。

ブラ「姉さま逢ひたうムいました」

デビス「ブラワ、一ダさま、お顔が見たうムいましたよ」

と絡ついてゐる。

セールは之を見て、ワザと高笑ひ、

「アツハ、ハ、ハ、先づ先づ目出たい目出たい。天の岩戸が開けたやうだ。あな面白し、あなさやけ、おけ。アテーナの女神様が、セールの七五三繩によつて、再

び世にお出ましになつたのか、暗澹たる天地も茲に六合晴れ渡り、光明遍照十方世界の光景となつて来た。謂ば此セールは天の手力男の神さま同様だ。サアお二人の姫神様、私の居間へお出で下さりませ。之から賑しく、男女三人が御神楽を奏げませう」

兩人は目と目を見合はせ乍ら……此奴に酒を吞ませ、操つてやらうと思ひ、セールの居間に進んでゆく。セールは満面に得意の色をあらはし、セール「あゝどうも男一人に女二人は都合の悪い者だ。何とか一人の姫様に別室に控へて貰ふ訳には行くまいかな」

ブラ「姉さま、厭ですワネ、私とあなたとは神さまから結んで下さつたフラチーノですものね。之から二人が同盟して、セールさまを一つ包圍攻撃せうぢやありませんか、砲弾の用意は出来ましたかな」

デビス「新式の三千彦砲もムいますなり、極堅牢な肱鉄砲不聞銃も所持致して居りますわ、ホ、ホ、」

ブラ「妾だつて、最新式の伊太彦砲やエツパツパ銃に、セール親分の恋は何うし

ても不聞銃を沢山に用意して居りますから大丈夫ですよ。モシ泥棒の親分様、あなたの方にも戦備は整つて居りますかな」

セール「調つて居らいでかい。すべて此世の中は言向和すのが神の教だ。刀剣を鋤鋤に替へ、大砲を言霊に代へ、爆弾の音を音楽に変へて、世界万民を悦服させるバラモン教の元大尉だから、モウ泥棒の名称は、女將軍殿に返上する。おれは音楽の王たる三味線はフエム一口に挟んである、一寸弾じてみると、チンチンチンと味はひ良くなるのだ。随分可い音色がするぞ。何と云つても金で面を張つた一番上等の紫檀の棹だからなア」

デビス「ソリヤ違ひませう。あなたのはツンツンと浄瑠璃三味線のやうな音がするでせう。何と云つても、特製の太棹ですからね。ホ、ホ、」

セール「アハ、ホ、そんなら一つ太棹の音を聞いて貰はうかな」

ブラ「姉さま、太棹も細棹も聞きたくありませんね」

セール「そんなら太鼓のブチにせうか。それが嫌なら尺八は何うだ」

デビス「オホ、ホ、。すかぬたらしい。あのマア、デレた面ワイの、モシモシ親分

さま、涎よだれが流ながれますよ。アタみつともない。牛うしの様やうですワ」

セール」エー、時ときに、冗談じようたんはぬきにして、お前まへに直接ちよくせつ談判だんぱんがある。キツト聞きいてくれるだらうな」

デビス」ソリヤあなたのお言いですもの、聞ききますとも、其その為ために耳みみがあるのですもの」

セール」イヤ、其奴そいつア有難ありがたい。キツと聞きいてくれるな。間違まちがひはないなア」

デビス」キツと聞ききます」

ブラ」ソリヤあなたのお言いは、聞きかねばなりませんもの」

セールは面かほの紐ひもを解ほどき乍ながら、さも嬉うれしげに、

セール」ハツハ、、、イヤ、之これで何なにもかも万ばん事じ解かい決けつだ。矢張やつぱり女をんなは女をんなだ。ソレ

ぢや今いま露骨こつにいふが、デビス、お前まへは今日けふ只ただ今いまより拙者せつしゃが宿やどの妻つま、またブラワ」

ダは第だい二夫人にふじんとして採さい用ようするから、さう心得こころえたが可よからうぞ。イヒ、、、、」

デビス」アレまあ、何事なにごとかと思おもへば、好すかぬたらしい、誰たれがあなた方がたの妻つまになつ

たりしませうか。ねえブラワ」ーダさま」

ブラ「さうです共、貞女両夫に見えずといひますから、何程男前が好くつても、金持でも、吾夫より外に身を任すことア、出来ませぬワ、ましてこんな鬼のやうなしやつ面した盗賊の親分に身を任してたまりませうかねえ」

セールは、不機嫌な顔して、

セール「コリヤ女、俺を嘲弄致すのか、今、何でも聞くと云つたぢやないか」

デビス「お約束通り聞いたぢやありませんか。聞いたればこそ、応答してるのですよ。あなたのお言葉を採用する、せぬは、私たちが二人の自由ですもの、天女のような美人に対し、恋慕するとは、チツト分に過ぎとるぢやありませんか。あなたの御面相とチと御相談なさいませ。あのマア怖い面……。一石の米が百両するやうな面付だワ」

セール「エー、仕方のない奴だ。最早堪忍袋の緒が切れた。恋の叶はぬ意趣返し、再び牢獄へ打ち込んで黽り殺しにしてやらう……。ヤアヤア乾児共、此女兩人を引捉へ、牢獄へ打ち込め」

と怒り狂うて牢獄内がわれる程唝鳴立てた。声の下より七八人の乾児はバラバラ

と入り来り、矢庭に兩人の手を取り足を取り、エツサエツサとかき込んで、旧の牢獄へブチ込んで了つた。あとにセールは吐息をつき、

「あゝ恋許りは暴力でも、金力でも、脅迫でも、絶対権威でも可かぬものだなア。併し乍ら、一旦男が言出した事、此儘にしては、何だか吾れと吾心に恥かしい。

水責火責に会はしても、こちらの心に従はさねば、親分の権威にも関係する。大

勢の子分を使ふ身で居乍ら、かよわい女二人位を自由にする事が出来ないでは、最早おれも駄目だ。ヨーシ、一つ之は食責に会はずが一番だ。獅子でも虎でも狼

でも食物で責さへすれば、人間の云ふ事を聞く。コリヤ食責めに限る」

と独言を云つて居る。そこへ慌ただしく歸つて来たのは、乾児のタールであつた。

タール「モシモシ親方様、今よい鳥を見つけて参りました」

セール「何？ よい鳥を見つけて来たとは、一体、美人か、金持か、どちらだ」

タール「ハイ、ヤク、エールの兩人と腹を合せ、治道居士の一行を巧く引張込

で来ましたが、何う致しませうかな」

セール「治道居士とは、あの鬼春別將軍ではないか。あの男ならば、定めて金は

持つてゐるだらうな。中々智勇兼備の勇将だから油断はならぬ。何は兎もあれ、巧くだまし込んで、牢獄へ打込んでおけ」

タール「ハイ、承知致しました。併し乍ら一行五人、其中で四人は盜賊の改心した奴です。治道居士も、岩窟の親分セール大尉を始め、其外一同の奴を、誠の道とか、間男の法とかで、改心させてやると云つて、強い事を云つて居りますから、どうぞあなた一寸来て下さいませな」

セール「イヤ、おれは何程盜賊の親分でも、一旦主人と仰いだ將軍を、手づから放り込む事は出来ぬ。乾児が全部集まつて、五人の奴を皆ブチ込んで了へ。そして弗々と持物を引たくり、甘く片付けて了うのだ。可いか、キツとぬかるでないぞ」

タール「ハイ承知致しました。そんなら第一の牢獄へ、五人共放り込んで了ひませうか」

セール「ウーン、第一が可からう。水一杯与へちやならぬぞ。そしてヤク、エールの兩人はどこに居るのだ」

タール「ハイ、治道居士の両側について居ります」

セール「あゝさうか、ソリヤ可い事をした。始めての功名だ。誉てやらねばなるまい。併し汝と一緒に行ったエムは何うなつたか」

タール「あのエムですか、彼奴ア俄に善の道へ墮落しやがつて、麓の森林で治道居士に道義とか、真理とかを説き聞かされやがつて、涙を流し、尾を振り、首をすくめてどつかへ「エム」散霧消して了ひました。本当に腑甲斐のない奴ですな。

まだ彼奴ア盜賊学に達してゐないものですから、たうとうお蔭を落しました。どうも助けやうがないので見遁してやりました」

セール「ヤア、其奴ア大変だ。エムの奴、此団体を逃出し、そこら中へ廻つて喋らうものなら、何時捕手が出て来るか知れたものぢやない。なぜエムをつれて帰らなかつたか、馬鹿な事をしたものだのう」

タール「それでもあなた、此方は三人、向方には豪傑が五人、エムなんかに相手になつて居れば、肝腎の玉を台なしにして了ふと思つて、逐はなかつたのでムい
ます」

セール[□]仕方がない。既往は咎めぬから、今後は心得たがよからう。サア早く五人の奴を打ち込んでしまへ[□]

タールは逸早く此場を去つて、治道居士以下四人を、第一牢獄へ巧く打ち込んで了つた。治道居士は何か心に期するものの如く、さも愉快気に四人をつれて牢獄へ、何の抵抗もせずもぐり込んだ。ヤク、エールの兩人は最早今日では泥棒心を改め、治道居士の味方となつてゐた。されどセールを始めタール其他の盗人連には、一人も之を知るものがなかつた。夫故ヤク、エールは五人の牢番を命ぜらるる事となつたのは、治道居士にとつて非常な便宜であつた。

（大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 松村真澄録）

第五章

独許貧（一六六一）

伊太彦 吾師の君に相別れ
ハルセイ山をスタスタと

登りつめたる折もあれ
木花姫の御化身に

吾魂を試されて
ここに悔悟の花開き

身魂に芳香薫じつつ
蓮の花の匂ふ野を

あてどもなしに進み来る
山又山の谷間を

神の御稜威を杖となし
力となして漸くに

ハルセイ沼の辺まで
来りて見れば虎熊の

山雲表に聳え立ち
雲に被はれ居る中ゆ

音に名高き噴火口
天を焦せる凄じさ

吾師の君は今いづこ
ブラワゝーダ姫は嘸や嘸

行く手になやみ足痛め
苦しみ艱む事だらう

魔神の猛る月の国
もし悪者に捕らへられ

身も世もあられぬ苦みに
会ふてゐるのぢやあるまいか

心のせいか知らねども
何だか胸が騒がしく

不安ふあんの空くう氣きが襲おそふて来きた あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

皇すめ大神おほかみの御ご威ゐ徳とくに 織かよわ弱をんなき女ひとの一人ひとり旅たび

いと安やすらけく平たいけく 神かみのあれますエルサレム

貴うづの都みやこへ送おくりませ 吾われは男をとこの身みにしあれば

如何いかなる艱なやみ難なやみも枉まが神かみも 少すこしも恐おそれず進すすみ行ゆく

デビスの姫ひめやブラワゝーダ 二ふたり人の身み魂たまが氣きにかかり

進すすみかねたる膝ひざ栗くり毛げ 神かみの司つかさとなりし身みは

実げに断だん腸ちやうの思おもひをば 幾いく度たびとなく嘗なめて行ゆく

実げに味あぢ氣きなき人ひとの世よと 朝あさな夕ゆふなに愚ぐ痴ちこぼす

伊いた太た彦ひこ司つかさの過あやちを 直なほ日ひに見な直ほし聞き直なほし

詔のり直なほしつつ許ゆるませ 雲くも霧きり深ふかき虎とら熊くまの

麓ふもとを進すすむ森しん林りん地ち 猛まう獸じう毒どく蛇じやは云いふも更さら

心こころ汚けき盗ぬす人びとの 頻しきりに出しゆ没つぼすると聞きく

心こころもとなき吾わが旅たび路ぢ 守まもらせ給たまへ三あな五なの

神かみの柱はしらの瑞御靈みづみたま 神素盞鳴かむすさのをの大御神おほみかみ
 此世このよの元もとの大御祖おほみおや 国治立くにはるたちの大神おほかみの
 貴うづの御前みまへに願ねぎ奉まつる 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
 月つきは盈みつとも虧かくるとも 仮令たとへ大地だいちは沈しづむとも
 誠まことの力ちからは世よを救すくふ 誠まことの力ちからは世よを救すくふ
 誠まこと一つひとの宣伝使せんでんし 神かみの教をしへを蒙かづむりて
 進すすまむ道みちに枉まがかみかみの 妨害さやらむ筈はずはなけれども
 どうしたものか近頃ちかごろは 姫ひめの身みの上うへ気きにかかる
 あゝ惟かむながら神々々かむながら 御靈みたまの恩頼おんゆを給たまへかし
 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも広ひろき大直日おほなほひ
 直日なほひに見直なほし詔直のりなほし 勇気ゆうきを鼓こして虎熊とらくまの
 魔神まがみの猛たけぶ山坂やまさかを 吾われは淋さびしく進すすみ行ゆく
 〇

と歌うたひ乍ながら密林みつりんの中なかの小径こみちを、スタスタ登のぼつて来くるのは、伊太彦司いたひこつかさであつた。

道の傍に又もや二人の男が、ヒソビソ話に耽つて居る。

エム「オイ、タツ、お前もいい加減に、トランスを止めたらどうだ」

タツ「ヘン、そりや何を云ふのだ。貴様だつてトランスぢやないか。豆腐屋は豆

腐を造つて売り、酒屋は酒を造つて売り、泥棒は人の懐を狙つて自分の懐を肥や

すのが商売だ。此世の中は自分の商売に、勉強せなくちやならないよ。税金の要

らぬ資本の要らぬ、こんないい商売があるか」

エム「一寸聞くとボロい商売の様だが、一月に一度か二度、収入があつても、大

部分は親方に取りられ、食ふや食はずで戦々恟々と此広い世の中を狭く暮すと云ふ

詮らぬ事はないぢやないか。俺等は元はバラモンの軍人だから、泥棒も面白いと

思ひ又人を殺すのも何とも思はなかつたが、あの虎熊山のセールスの、元親分の鬼

春別の将軍様が比丘の姿となり、法螺を吹いておいで遊ばすのに出会ひ、結構な

話を聞いて改心した処だ。ところが俺の相棒のタールと云ふ奴、どこ迄も悪を立

通すと云ひやがるものだから、袂を別ちてここ迄来たのだ。すると此処迄来ると、

お前が居るので、俺は神様に救はれたのだから、お前も善人にしてやり度いと思

つて意見するのだから、些と身を入れて聞いてくれ。決して悪い事は云はぬのだからな」

タツ「ウン、さう聞けばさうだな。俺だつて泥棒が好きでやつてるのぢやない。

親譲りの財産が沢山あつたのだが、一つ新奇発明の商売をやつて、ガラリと失敗し、国所にも居れぬので乞食となつて、ここにやつて来た処が、セールの親分が拾ひ上げて呉れたので鼻の下丈け、どうなり、かうなり、濡らせる様に成つたのだ。三丁町、五丁町歩いて一文の金を貰ひ、乞食々とさげすまれ、人の軒に寝ては足蹴にされ、辻堂に一夜明かしては追ひ立てを喰つてゐた今迄の境遇に比ぶれば、余程気が利いてると思つて泥棒になつたのだ。然し何かいい商売があれば、こんな事ア為度くないのだが、之も因縁だらうかい」

エム「お前商売をしたと云ふが、どんな商売して失敗したのか」

タツ「ウン、マア一つ聞いて呉れ。俺は凡て若い時から発明好きで専売特許を十二三も取つて居るのだ。併し乍ら専売特許は農商務省で許して呉れたが、然し之を売出す段となると一つも動かぬのだから困つてゐるのだ。それがために親譲り

の財産を、スツカリ【すつて】了つたのだ」

エム「どんな物を発明したのだい」

タツ「エー、ワットが鉄瓶の湯気を見て蒸気を発明したり、ニュートンが林檎の落ちるのを見て地球の引力説を称へたやうに、俺も何かの動機がなくちゃ、発明が出来ぬが、或時ランプのホヤの掃除してみたのだ。あのホヤの黒くなつたのをホヤ掃除器で上下へ擦ると云ふと、全然埃が除れる。真黒の奴が元の透明体のホヤになるだらう」

エム「ウン成程、随分綺麗になるな。それからどうしたと云ふのだ」

タツ「それからお前、百日百夜、首をひねつて考へた結果、人身清潔器と云ふのを発明したのだ」

エム「成程、そりや面白からう。お前医学でも研究した事があるのか」

タツ「何、医学なんか駄目だよ。今時の医者に本当の病を直すものはない。病気は決して薬なんか呑んでも癒るものぢやない。癒る病気はホツといても癒るものだ。俺はそれよりも病気の起らぬやう人身清潔器を作つたのだ。即ちランプのホ

ヤ掃除するブラシと云ふ器械を八尺程迄延長し、向上虫の這つて居る様な格好に作り上げ、大地に並べて見た処、大蜈蚣が這ふてる様なものが出来上つた。それを人体掃除器として売出したのだ。兎角酒を呑み過ぎたり、飯を食ひすぎたりすると腹を悪うし塵芥がたまから、ランプの掃除する様に口から尻の穴へ通して、上下へギューギューと擦ると云ふと、スツカリ腹の中の垢目が出ると云ふ考案だ。さうした処が人間の口と尻とが余り細うて腹が太いので、口と尻とは掃除が出来るが肝腎の腹の掃除が駄目だ。それで誰も彼も使ひもせず、くさして買つて呉れぬのだ。売出す積りで一万本許り作つたが駄目だつたよ」

エム「ハ、ハ、ハ、そいつア話にならぬわい。それからどうしたのだ」

タツ「それからお前、今度は余り資本金の要らぬ天造物を売出す事を発明したのだ。それはそれは実に奇想天外の考案だつた」

エム「その奇想天外を一つ聞かしてくれないか」

タツ「是は大々の秘密だ。口外しないと云ふことを誓ふなら話して遣らう。実は華氏の二十七八度と云ふ寒さの時に採取するのだ。当世は床屋から商売屋百姓ま

で需要の多いガラスの代用品を發明したのだ。池の面に張つて居る厚さ一分乃至二分位の薄い氷を引割つて之を石油の空箱につめ込み鏡や障子用として売出すのだ。夏なぞは氷のガラスを障子にハメ込んで置くと、自然に氷に風が当つて夏の最中でも居間が涼しうなつて来る。何分原料が只だから斯んなボロい金儲けはな
いと思つて、セツセと寒いのに池の中へ小舟を浮べて切採り、家に歸つて秘蔵し、
新奇發明の「清涼ガラス夏知らず」と名を付けて、広告料を沢山に都鄙の大新聞
に払つて開業した所、世間の奴は馬鹿にして一人も注文して呉れない。何故だら
うかと庫を開けて調べて見たら倉の中はズクズクに水が溜つて居た。大方鼠が小
便でも垂れよつたのかと思ひ乍ら氷ガラスを納めた箱を調べて見ると、一枚も残
らず皆解けて居よつたのだ。そこで氷解防止法をまだ研究中なのだ。是さへ成功
すれば、馬鹿らしい泥棒なんか稼がなくても、立派な紳士として暮らされるのだ
からなア」

エム「オイ、お前そんな事を真面目に考へて居るのか。実に感珍の至りだ。古今
独歩だ。珍奇無類飛切りの考案だ。アハ、ハ、ハ、お前モウ夫れだけの發明でしま

ひか、君の事だから、まだ外に発明品があるだらうなア」
タツ「ウン、それからお前、今度はも一つ脳味噌を压榨して用心箱と云ふものを造つて売り出す事を考へ出したのだ。俺も元はハルナの生れた。ハルナの都は大變に風が烈しうて土埃が立つのだ。それで道行く人の二つの目へ埃が這入り、その為め目を病んで盲になるものが沢山出て来る。盲になりや大抵の奴が三味弾になつたり、三味線の師匠になるから猫の皮が必要だ。それでハルナの都の猫の種が殆ど絶えて了ふだらう。そしたら鼠が自分の天下だと云ふやうな顔して家々に持つてゐる着物や道具を噛るに違ひない。又箱類等も噛りさがすに違ひないから、今の中に箱を沢山作つて売出したら儲かると思つて今度は、乗るか反るかで、ある丈の財産を放り出し、沢山の箱を作つた処が、一つも売れず、到頭貧乏して了ひ、国所にも居れぬやうになつて乞食になつたのだよ。俺位不運のものは世の中にありやせぬわ。あれ丈の金があればハルナで僕の三人も使ひ、妾の一人も置いて紳士で暮されるのだが、困つた事をしたわい」
エム「ハ、ハ、ハ、其奴ア駄目だわい。お前も随分賢い割とは知恵がないわい。余

り気が利き過ぎると間がぬけるからな。そんな頓馬では、泥棒しても駄目だぞ。

矢張りもとの乞食が性に合ふとるわ。それだから、改心をして泥棒をやめ、何か

俺達と一所に、よい商売にありつかぬかと云ふのだ

タツ「兎も角、兄貴に任しておくわ。ヤア、何だか宣伝歌の声が聞えて来るぢや

ないか、何と恐ろしい声だのう

エム「ヤア、ありや三五教の宣伝歌だ。マア気を落付けて、ここに待つて居らう

ぢやないか。もう泥坊をやめた以上、別に人間も恐くないからな。それよりも貴

様、此間、岩窟の中へ引込まれた二人の美人は、素敵な者ぢやないか

タツ「本当に凄いやうな美人だったね。大方大将が「レコ」にするのだらうよ。

アツハ、ハ、ハ

かかる所へ近づいて来たのは伊太彦であつた。

伊太「一寸物を尋ねますが此山道を十六七の女は通らなかつたですか

エム「ハイ、二三日前に、それはそれは立派な女宣伝使が一人、又その翌日、今

貴方の仰有つた様な若い若い御婦人が一人、ここをお通りになつた処、此山で働

く大泥棒の親分に捕へられ、岩窟の中へ連れ込まれて了ひましたよ。本当に可憐さうでたまりませぬわ」

伊太「その女はデビス姫、ブラワゝーダと云ふ名ではなかつたか」

エム「ハイ、エブスだとか、ブラブラ婆アだとか云ふ事ですが、仲々どうしてどうして婆ア処ですか、水の垂るやうな別嬪でした。今はセール親方の居間の近く
の牢獄に打ち込んでムいます」

伊太「コリヤ、その方は泥棒だな」

エム「いえ、滅相もない。私は眞人間でムいます」

伊太「馬鹿申せ、眞人間が岩窟の中に姫が隠してある事が、どうして分らうか。」

大方貴様は乾児だらう」

エム「ハイ、今日迄は泥棒の乾児でムいましたが、実の所は鬼春別將軍様が比丘となつて、ここをお通り遊ばし、結構なお道を教へて下さつたので、漸く改心しました、仲間の目を忍び、ここ迄逃げて来ました処、ここに又一人の小泥棒が休んで居ましたので、早く改心したらどうだ、と今も今とて意見をして居つた所で

ムいます」

伊太「お前ももはや善心に立歸つたのか。それに間違はないのかな」

兩人慄ひ乍ら口を揃へて、

兩人「ハイ、間違はムいませぬ」

伊太「然らばその岩窟とやらへ案内してくれ。二人の姫を救ひ出さねばならぬか

ら」

エム「どうも沢山な泥棒が居りますので、貴方お一人では危なうムいますから、

お止めになつたらどうです。現に鬼春別様が親分を改心さすと云つて六人の子分

をつれて御出でになりました。やがて一件落着して無事にお歸りになるでせうか

らな」

伊太「何、あの比丘姿の將軍様がおいでになつたと云ふのか。それなれば尚の事

だ。之を聞いた以上は見逃す訳には行かぬ。サア案内をせい」

エム「ハイ、案内をせいと仰有れば、せぬ事はありませぬが、私は最早泥棒を改

心したので、彼奴等に見付けられたら命がムいませぬ。何卒之許りは御堪

弁を願ひ度うムいます」

伊太「ナニ、心配は要らぬ。私は此通り神変不思議のウバナダ竜王から頂いた夜光の玉がある。之があれば百万の敵も恐るるに及ばないのだ。サア案内せい」
此言葉に二人は不安の念にかられ乍ら、伊太彦が恐さに、屠所の羊の如くスゴスゴと先に立つて、岩窟目がけて進み行く。

(大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 北村隆光録)

第六章 噴火口(一六六二)

エムは伊太彦の先に立ち、慄ひ声を出し乍ら、道々謡ひ上り行く。

エム「バラモン教の軍人 伍長となつた此エムは

鬼春別の將軍が 猪倉山の砦にて

軍の解散した故に 是非なく茲に盗人と

なり下りたる身の因果 ウントコドツコイ ハアハアハア

御大將は比丘となり お金を沢山懐に

入れてどこかに逃げて行く 後に残った雑兵は

ウントコドツコイきつい阪 目腐れ金を頂いて

月の都に帰るにも 旅費にも足らぬあはれさに

やけをおこして酒を飲み 今は詮なき真裸体

セールの大將に従ふて 虎熊山の岩窟に

人のいやがる盗人の 乾児のはしに加へられ

僅に命を保ちつつ 風が吹いてもビツクビク

山が鳴つても胸躍り ドキドキと世の中を

恐れ戦き暮しつつ 今日が日迄も暮れて来た

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 折角人と生れ来て

人の懐あてにする 悪い泥棒となり下り

此世を忍ぶ苦しきよ

国にまします両親や

兄や妹が聞いたなら

嘸や驚く事だらう

胸に勲章をブラさげて

天晴手柄を現はしつ

帰つて来るかと朝夕に

家族が待つて居るだらうに

思へば思へば情ない

つまらぬ事になつて来た

それでも食はんが悲しさに

泥棒の仲間に加へられ

悪い事とは知り乍ら

長い太刀振りまはし

人を脅して金を取る

こんな商売をいつ迄も

続けて居つた事ならば

梵天帝釈自在天

大国彦の大神の

忽ち冥罰当るだらう

早く心を改めて

善と真との真道に

帰り度いとは思へども

何を云つても金が無きや

善をせうにも道が無い

止むを得ずして悪党の

仲間て今日迄暮れて来た

ツクツク此世が嫌になり

罪亡ぼしに虎熊の噴火口にと身を投げて

亡びて了ふと思ふたが何だか命が惜しくなり

臆病風にさそはれて死さへならぬ苦しきよ

タールの奴と二人連れ此山口に現はれて

往來の人を掠めむと話にふける折もあれ

四辺の木魂をひびかせて忽ち聞ゆるホラの声

魂ふるひ神は飛び身体忽ち戦慄し

密樹の蔭に身を潜め因果を定むる折もあれ

鬼春別の將軍は比丘の姿と現はれて

四人の弟子に打ち向ひ善悪正邪の理を

説かせたまふぞ有難きここにいよいよ村肝の

心の底より改めて悪をフツツリ思ひ切り

これから難行苦行して一つの仕事に喰ひつき

身を粉に砕き父母に安心させむものをぞと

茲迄こゝまでかへ歸り来て見れば

泥棒どろぼう仲間のタツ公こうが

路傍ろぼうの石いしに腰こしかけて

やすんで居をるのに出で会っし

鬼おに春別はるわけの将軍しやうぐんが

教をしへの言葉ことばの受売うけうりを

初はじめて居をつた所ところだつた

そこへ伊いた太彦たひこ宣伝使せんでんし

宣伝歌せんでんかをば謡うたひつつ

現あらはれまして両人りやうにんに

眼まなこをいからし詰問きつもんし

たしなめたまふ権幕けんまくに

恐おそろし奴やつの集あつまつた

泥棒どろぼうの岩窟いはやへ案内あんないと

出でかけて往ゆくのは情なさけない

これもやつぱり旧悪きうあくの

報むくいが来たきのか悲かなしさよ

梵天ぼんでん帝釈たいしやく自在じざい在天いてん

憐あはれみ賜たまひエム、タツの

二人ふたりの氏子うぢこが恙つつがなく

岩窟いはやを切きりぬけ本国ほんこくへ

立たちかへるべく守まもりませ

ウントコドツコイ

ドツコイシヨ

アイタタ タツタ躓つまづいた

肝心かんじん要かなめの親指おやゆびの

爪つめがおきたか血ちが滲にじむ

本ほん当たうに痛いたい苦くるしいわ

これこれもうし宣伝使せんでんし

伊太彦いたひこ 仰あふぎ見みれば虎熊山とらくまやまの頂いただきは

天てんに向むかつて炎吐ほのほきつつ。

火ひの神かみの朝あさな夕ゆふなに荒すさぶなる

此この高山たかやまぞ曲津まがつみ見みの宿やど。

盗人ぬすびとの頭かしらの巢すくふ岩窟いはやどに

二人ふたりの姫ひめは世よを歎かこつらむ。

夜光よるひかる玉たまの力ちからを現あらはして

曲まがの頭かしらを照てらさむとぞ思おもふ。

日ひは西にしに早傾はやかたむきて山高やまたかし

急いそぎて行ゆけよ二人ふたりの案内者あないしや 〇

エム 〇 心こころのみ千々ちぢに焦あせれど如何いかにせむ

足腰あしこし慄ふるひ儘ままならぬ身みは 〇

タツりうじん 竜神の玉たまをいだし君きみならば

恐れおそは非あらじ独ひとり登のぼりませ。

夜よる光ひかる玉たまを持もちます君きみならば

案内あないの人も如何いかで要いるべき

伊太彦いたひこ 汝等なんぢらは言葉ことばを構かまへ危あやふきを

のがれむとする卑怯者ひげふものぞや。

疾とく立たてよ心こころの持方もちかた一つにて

易やすく登のぼれむ此この阪道さかみちも

エム 是非ぜひもなし司つかさの言葉ことばに従したがひて

命いのち限かぎりに案内あないやせむ

タツ「のがるべき道にあらねば吾も亦

エムのしりへに従ひゆかむ」

かく謡ひながら、二人は屠所に引かるる羊の如く、ハアハアと息も苦しげに登りゆく。

(大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 加藤明子録)

第七章 反鱗〔一六六三〕

三人は急坂を上つて往くと、密林の中に、「ウンウン」と呻声が聞えて来た。伊太彦は驚いて草をわけ、林の中に入つて見れば、一人の男が繃帯をした儘、虫の息になつてフン伸びて居る。忽ち水筒の口を開いて水を飲ませ、天の数歌を謡ひ、労はつて介抱をしてやつた。倒れた男は漸く正気に復し、四辺をキヨロキヨ

口見廻し、伊太彦宣伝使の吾前わがまへにあるに驚き、早くも逃げむとすれど、未だ手足の力が回復くわいふくしないので、石亀のやうに地団駄ぢだんだを踏んで居る。

伊太「ヤア旅のお方がつきましたか、先づ先づ結構々々、お前は大変怪我をして居るやうだが、大方虎熊山の泥棒にでも「やられ」たのぢやないかな」

男「ハイ有難うムいます。私は此近くの者でムいますが、一寸俄の用で親戚へ参る途中、泥棒の親分、セールと云ふ悪人に出会ひ、有金をすつかり取られ、頭をかち割られ人事不省になつて居た所です。ようまあお助け下さいました。此御恩は決して忘れませぬ」

エムはツカツカと傍により、顔をつくづく眺めて、

エム「ヤア、お前は虎熊山の泥棒の副親分ぢやないか、そんな嘘を云つたつて駄目だよ。もし宣伝使様、此男はハールと申まして、それはそれは悪い奴でムいます。貴方のお尋ねになつた若い娘さまを、口に猿轡を箝めて、数多の乾児に岩窟の中に担ぎ込ました奴ですから、油断をなされませんよ」

ハール「オイ、エム、……いや、ど此奴が知らないが、さう見違をして貰つては

困るぢやないか。私は泥棒でも何でもなし、此近傍の百姓だ。滅多な事を云ふて貰ふまい」

エムはニタリと笑ひ、

エム「へへへ、よう仰有いますわい。そんな事を云つたつて、此処にお前様の乾児になつて居た二人の前の泥棒、今の真人間が控へて居ますよ。男らしく白状しなさい」

伊太「オイ、エム、タツの両人、此奴は泥棒に間違ひないなア」

エム「へへへ、チャキチャキの泥棒ですよ。此奴はバラモン軍のハール少尉と云つて、美男子の名を売つた士官ですが、鬼春別將軍様が軍隊を解散せられてから、仕方なしにセール大尉と泥棒を開業し、虎熊山の岩窟で羽振を利かし、百人頭になつて居る極悪人ですから、油断をなさつてはいけませんよ」

伊太「お前の云ふ事は本当だらう。お前の改心もそれで証明された。これから可愛がつてやるから安心せい」

エム「いやもう有難うムいます。どうぞ永々々々御鼻眞の程をお願い申します」

タツ「充分勉強をいたしまして、他店とはお安く致します。どうぞ末永う御贖に願ひます」

伊太「ハ、ハ、ハ。面白い男だな。ヤ大に気に入った。是から精出して御用を仰せつけてやるから、充分勉強するがいいぞ」

両人「フ、フ、フ」

伊太「オイ、お前は今此両人が証明して居るが、泥棒頭に相違あるまい。有体に白状せないと、お前のためにならないぞ」

ハール「いや、恐れ入りました、何卒重々の罪をお赦し下さいませ、二人の姫様を連れ帰り、牢獄に打ち込みましたのは私に相違ひませぬ。併し私を使ふ大親分がムいいますから、私許りの罪ではムいませぬ。どうぞ彼をお調べ下さいませ」

伊太「自分の罪を親分に塗り付けるとは不届き千万の奴だ。たとへ親分がやつた事でも何故私がやりましたと引受けるだけの赤心が無いか、泥棒仲間にも道德律が行はれて居るだらう」

ハール「ハイそれは確にムいますが、何と云つても親分が親分でムいます。たうとう親分奴、恋の競争から私を恨んで暗打に遇はさうと致しましたので、斯んな目に遇はされ、実は逃げ出して来た所でムいます。親分に反鱗あれば、私にも反鱗があります。さうだから阿呆らしくてどうしても犠牲的精神が起らぬぢやありませんか」

伊太「其二人の女は何うして居るか」

ハール「ハイ、きつと……セール大将が惚れて居ますから、さう手荒い事は致しません。まあお身柄だけは大丈夫ですから御安心なさいませ。そして私の罪をお許し下さい。私も今日限り泥棒は廃業致します」

伊太「それや感心だ。そんならこれから私について、も一度岩窟へ往つて呉れないか、何彼に便宜がいいからなア」

ハール「ハイ、エーお伴致し度いは山々でムいますが、此通り頭は痛み、俄に急性臆病災が突発致しましたので、遺憾ながら参る事が出来ませぬ。此度はお許し下さいませ」

伊太「本当に困った奴だなア、今私が鎮魂してやつたからもう痛は止まった筈だ。そんな「なまくら」を云はずに、お前を煮て食はうとも焼いて喰はうとも云はぬのだから帰順した証拠に案内をしたらどうだ」

ハール「左様ならば、止むを得ませぬ。お言葉に従ひ、姫様のお居間迄御案内を致しませう。さうしてあのお方は、貴方様のお身内の方ですか、但は御兄弟ですか」

伊太「年の経た方は俺の友達の女房だ。若い方は俺の女房だ。随分お世話になつたらうなア」

ハール「ヤそれを承はりますと、私は合はす顔がムいませぬから、どうぞ許して下さいな」

エム「若し宣伝使様、このハールは若い方の方に惚れましてな、口説て口説て口説ぬいた上句、肱鉄を喰され、肝癩玉を破裂させ、暗い暗い岩穴に放り込み、虐待をして居るのですよ。それだから合す顔がないと今白状したのです。そこらで一つ、ウンと云ふ目に遇はしてお遣りなさい。後日の為めですからな」

伊太「仕方が無い男だな。併しお前も改心したと云ふが、随分人が悪いぢやないか。今迄長上と仰いで居た人の悪口を俺に告げるとは、本当に義理人情をわきまへぬ奴だな」

エム「義理人情を知つて居つて泥棒仲間に入れますか、弱肉強食、優勝劣敗の極致ですもの、そんな余裕がありませんものか、そんな事構ふて居つたら、自分の身が亡んで仕舞ひますわ、有島武郎だつて、愛の極致とやら迄行つて、たうとう自滅したぢやありませんか。有島武郎はラブ イズ ベストを高調し、愛はどこ迄も継続すべきものでないと云つたでせう。さうして仮令夫婦でも夫以上の愛する者が出来たら、別れて愛の深い方へ靡くのが真理だと云つたでせう。それだから、この大将はも早見込がない、あなた様の方が余程立派だ、吾々を救つて下さる救ひ主だと思つたから、弊履の如く今迄の親分を捨てて仕舞つたのですよ。悪うムいますかな」

伊太「アハ、ハ、何と水臭いものだな。夫ではまだ改心と云ふ所へは往かぬわい。一つこれから膏を取つてやらねばなるまい」

ハール「どうぞもう見逃して下さい。セールの悪口申したのは、つまり恋の仇で
ムいますから、あんまり胸が悪いので、つい口から迸つたのでムいます。今後は
慎みます。そんなら仰せに従ひ、陣容を立て直し、堂々と先陣を仕りませう。さ
ア、エム、タツの兩人、宣伝使のお後から従いて来い」

伊太「ヤアお前達は三人とも先へ往くがよい。俺も後に目が無いからなア、
ハ、ハ、ハ」

エム「送り狼と同道して居るやうなものですからなア。先にお出になるのは険呑
です。躓いて倒けたら何時嚙ぶり付くかも知れませぬからなア」

ハール「これエム。いらぬ事を云ふな」
と叱りつけ乍ら、先頭に立つて、足早に登りゆく。

（大正一二・七・一五 旧六・二 於祥雲閣 加藤明子録）

第二篇 地異転変

第八章 異心泥信（一六六四）

治道居士はベル、バツト、カークス、ベースの四人と共に、うす暗い石の牢獄に投込まれ、セールの厳命に仍りて、飲食物を断たれて了つた。されど心の中に治道居士に帰順してゐる牢番のヤク、エールはいろいろと苦心して五人の為に飲食を供給し、あらゆる限りの便宜を与へた。親分のセールはヤク、エールを深く信任し、一度も牢獄を見舞に來なかつた。そして自分の大將軍と仰いでゐた治道居士には何だか恥しいやうな、恐ろしいやうな気がして、会ふ事を欲しなかつた。先づ治道居士の一隊は兩人に任しておき、他の子分を四方に派遣し、財物の収集に全力を注ぐ一方、自分は二人の美人を、何とかして自分の者にせうと、それのみに、現をぬかしてゐた。

ヤク、エールの兩人は、治道居士とブラワード、デビス姫の間の、郵便夫の様な役を密かに勤めてゐた。牢獄の中では、治道居士を真中に、四人の改心組が、いろいろと小声で話し合つてゐる。

ベル「オイ、俺達も何だかチツと許り不安な気分になつたぢやないか。身の自由を縛された籠の鳥も同然、生殺の権利を親分に握られてゐるのだから、何程治道居士様に法力が有ると云つても、此牢獄を経文の力に、打破つて下さらぬ以上は、陰呑な物だないか。治道居士様は平氣の平左で、心身の休養だとか云つて、温泉にでも入つた様な気分、前後不覚に眠つてゐるが、俺達や何うも、そんな氣になれないわ。お前等、何とか工夫をこらして、ここを飛出す考へはないか」

バツト「何心配するな。サアといへば、ヤク、エールが牢番してるから、何時でも開けてくれるよ。今彼奴が開けないのは深い思案があつての事だ。何しろこれ丈の人数が集まつて居るから、下手な事をやると虻蜂とらずになつて了ふ。治道居士様はそこを見込んで、平氣で寝てゐらつしやるのだ。何事も惟神に任して置くが一番安全だ」

ベル「それだと云つて、人の心は分らないよ。ヤク、エールの兩人が、若しも心機一転して親分の方へ肩を持たうものなら、それこそ俺達は、箒で押へられた蝶々のやうなものだ。モウ少し治道居士様に法力があると、俺達も安心だけれどなア」

バット「ナアニ、構ふものかい。マア安心せい。ここへ来てから、まだ一夜逗留した丈ぢやないか。仮令三日や四日位、ここへ入つた所で、一片のパンを食はなかつても辛抱は出来るよ。先づ楽隠居だと思つて、体を休養させ、愈となつたら岩窟退治をやるのだな。何奴も此奴も、軍人上りで、皆手が利いてるから、俺達が四人や五人で暴れたつて仕方が無いからな」

ベル「オイ、バット、汝、さう樂觀してゐるが、寸善尺魔と言つて、吾々は死の魔の手に捉へられてゐるのだから、些とは尻へ手をまはして置かねばなるまいぞ。ナア、カークス、ベース、お前は何う思ふか」

カークス「何事も俺たちは神様にお任せしてゐるのだ。それよりも御祈念をするが一等だなア」

ベース「そりやさうだ。カークスの云ふ通り、此天地間はすべて神様の御意志の

儘だから、何程俺たちが騒いだつて駄目だ。斯うして牢獄へ蟄居してゐるのもセー
ルがしたのでない。神様の深遠な御経綸に仍つて、修養させられてゐるのだ。余
りクヨクヨ思ふな」

ベル「俺もう何だか信仰の土台がグラついて来たやうだ。オイ、一層の事を

して、の御機嫌を取り、牢屋の苦を遁れて再 に逆転したら何うだ。

何程世の為だとか、死後の生活の為だとか云つても、忽ち現在がやりきれないぢ

やないか。末の百より今の五十だ。何程死後の世界があると云つたつて、雲を掴

むやうな話だからのう」

治道居士は、ベルが自分を殺害し、セールに裏返らうといふ意味を仄かしてゐ

るのを、黙をかいてゐる振して聞いてみた。

バット「オイ、ベル、左様な事を吐すと、俺ヤもう了見はせぬぞ。汝を して、

へ するが何うだ」

ベル「ヤ、コリヤー一つお前達の心を引いて見た丈だ。誰がそんな勿体ない事をす

るものかい。これでお前達の意志も分つて俺も安心したのだ」

と俄にはかに空そらトボケてみせる。カークス、ベースは治道居士ちだうこじを揺り起おこした。治道居士ちだうこじは寝ねむた相さうな顔かほをして起直おきなほり、拳こぶしを握にぎつて上うへの方ほうへグツと突つき出し、「あゝあ」と大欠伸おほあくびを無雑作むざぶさにし乍ながら、

治道ちだう「アハ、ハ、ハ、あ、夢ゆめだつたか。ベルの奴やつ、此治道居士このちだうこじをして嫌んをとり、元もとのへ逆転ぎやくてんしよつたと思おもへば、ヤツパリ夢ゆめだつたワイ。ア

ハ、ハ、ハ、ハ。どうも人間にんげんの心こころといふものは当あてにならないものだなア。一切いっさいの欲望よくぼうを捨すて、命迄いのちまですてた此治道居士このちだうこじでさへも、矢張やつぱりどつかに、命いのちが惜をしいと云いふ副守ふくしゆが残のこつてゐると見みえて、こんな怪けツ体たいな夢ゆめを見みたのだなア」

カークス「モシ治道様ちだうさま、ソリヤ夢ゆめぢやムいませぬ。現げんにベルの奴やつ、貴方あなたが熟睡遊じゆくすゐあそばしたのを奇貨きくわとし、あなたに對たいし、叛逆はんぎやくを企くはだてようとしたのですよ。用心ようじんなさいませ」

治道ちだう「ハ、ハ、ハ、猪口才ちよこさい千万せんばんな、蚯蚓みみづのやうな魂たましひで蛟竜かうりゆうの身辺しんぺんを窺うかがふとは、実じつに身の程ほど知らずだなア。ベルも亦また此こ処こへ這入はいつて来きてから、臆病神おくびやうがみに取とつ付つかれよつたとみえる。ても切きても憐あはれむべき代物しろものだな。オイ、ベル、何どうだ。私わしの命いのちが取り

たいか。とりたくば幾らでも取らしてやる。さあモウ一寝入りするから、其間に私の首でもかいて、セールの親分に身の潔白を示し、再泥棒の親分に使つて貰ふがよからう。遠慮はいらぬ。お前に首をかがれて天国行をするのも、一つは神様の御思召かも知れない」

ベル「メ、滅相もない。勿体ない。何うしてそんな事が出来ませうか。どうぞ私の赤心を諒解して下さいませ」

治道「赤心の【マ】は悪魔のマぢやないか、誠のマもあれば、間男のマもあり、閻魔のマもあり、悪魔のマもあり、マといふ者は何事にも附添ふものだから……、オイ三人の者、気を付けよ。虎狼と同居してゐるやうな物だからのう」

かかる所へヤク、エールは二三人の泥棒と共に、牢獄を検分がてらやつて来た。ヤク「コリヤコリヤ、静に致さぬか、今何を囁つてゐたか」

ベル「ハイ、治道居士始め三人の奴が、此ベルをせうと云ふのです。どうぞ私を別牢へ入れて下さいな。險呑で堪りませぬから……」

ヤク「ハツハ、お前達の命は旦夕に迫つてゐるのだ。親分に殺されるか、

治道居士に殺されるか、どつちみち殺される身分だ。マア安心して四人の連中から、力一杯苛められたがよからうぞ。オツホ、。汝は此中でも一番悪党だからのう」

ベル「モシ、ヤクさま、私は決してそんな悪人ぢやムいませぬ。実の所は治道居士に改心したと見せかけ、此奴等四人の秘密を探つて御大将に報告する為、今迄化けてゐたのですから、どうぞ親分にさう言つて下さい」

カークス「ハツハ、、本当に此奴ア悪い奴だ。猫の目程クレクレとかへる奴だから、治道居士様を暗殺しようとしよつた太い奴だ。こんな者が同じ牢獄の中に居ると、ゆつくり寝る事も出来ない。もし、ヤクさま、どうかベルを請求通、別室に置いて下さいな」

ヤク「ヨシヨシ、こんな奴を一所に置いておくと為になるまい。……又俺の都合も悪い……」

と小声に云ひ乍ら錠前を外し、ベルの手を引立てて、最も暗い深い岩壁で囲んだ牢獄へ打ち込んで了つた。ヤク、エールの兩人は、ベルの為に自分等の計画の暴

露せむ事を恐れたからである。

ヤクは三人の盗人と共にベルを引立てて此場を去つた。跡にエールは牢番として一人残つてゐた。

治道「オイ、エール、岩窟の様子は何うだ。セールは今何をしてゐるか」

エールは小声になつて、

エール「ハイ、二人の女に現をぬかし、涎をくつて居りますが、肝心の女が悪口計り言つて応じないものですから、泥坊商売はそつち退けにして、頭を悩めて居ります。それはそれは見られた態ぢやムいませぬワ」

治道「ハ、ハ、あの洒ツ面では女にはもてまい。困つた奴だなア。そして其女といふのは何処の者だ」

エール「何でも大きな声では言へませぬが、三五教の宣伝使だと云ふ事です」

治道「ハテナア、そして其名は何と云つたか」

エール「ハイ、何でもブラブラ婆アさまだとか、エベスだとか大黒だとか聞きました。随分美人ですよ」

治道「ハア、それではブラワゝーダにデビス姫の事だらう。ア、其奴ア可哀相だ。お前御苦労だが、治道居士が此処に居ると云ふ事を、何とかして知らして呉れまいか」

エール「ハイ、機会を考へて申上げませう」

治道「屹度頼むよ。私が今此処で手紙を書くから、之をソツと渡してくれ」

エール「承知致しました」

治道「何か……筆と墨と紙を貸して貰ひ度いものだな」

エール「畏まりました。暫時お待ち下さいませ」

と四辺を窺ひ乍ら、何処からか筆紙墨を用意して来た。治道居士はバツトに墨を

すらせ、何事かスラスラと書き認め終り、

治道「サア、エール、此二通の手紙を一通づつ兩人にソツと渡してくれ。どちら

でも構はぬ。同じ事が書いてあるのだから」

エール「ハイ承知致しました」

と手紙を懐に捻込み、いろいろ苦心して、二人の牢獄の前に窺ひ寄つた。見れば

暗がりくらりに一人ひとりの男をとこが立つてゐる。

男をとこ「誰たれだ。何なにしに來たきのだ。ここへは來る事ことはならぬと、あれ程ほど喧やかしう云いふてあ
るのぢやないか」

エール「ハイ、私はエールでムいますが、治道居士ちだうこじの牢番らうばんをして居をりました所ところ、
濟すまぬ事こと乍ながら、フラフラと居眠あねむりまして、方角はうかくを取違とりちがひ、斯か様な所ところへやつて來きま
して、誠まことに濟すみませぬ」

と態わざとに大おほきな声こゑして、治道居士ちだうこじの來きてゐる事ことを、二人ふたりの女をんなに聞きかさうとしてゐ
る。

男をとこ「コリヤ、エール、【チボ】や乞食こじきを何どうしたといふのだ」

とワザとにセールは二人ふたりに治道居士ちだうこじの事ことを聞きかそまいと、詞ことばを濁にごさうとする。エー
ルは態わざとに其意そのいを解かいせざるもの如ごとく、
エール「もし親方様おやかたさま、チボ乞食こじきぢやムいませぬ。三五教あななひけうの比ひ丘く治道居士ちだうこじの事ことでム
いますよ」

セール「馬鹿ばかツ、早はやく下さがれツ。そして自じ分ぶんの職しよく務むを忠実ちうじつに守まもるのだ。一時いつときも早はやく

行けッ。汝が居ると邪魔になる」

エールは「ハイ」と云ひ乍ら暗がりを幸ひ、牢獄の窓から手紙を一通づつ、ソツと放り込んで了つた。

ブラワゝーダ「あの治道居士さまも、此処に捕はれて居られますか。そりや本当に心地のよい事ですね。彼奴は随分私に無体な事を云つた奴だから、天罰が巡り来たのでせう、ホ、ホ、。モシ隣のデビス姫様、貴女と私をひどい目に会はしよつた、あの治道居士といふ比丘が捉へられて来ると云ふ事ですワ。本当に気分

が可いぢやありませんか。ホ、ホ、」

デビス「本当にねえ、私も溜飲が下りましたワ」

エールは不思議な事だと、首をひねり乍ら、暗い隧道を歸つて行く。

セール「アハ、ハ、ハ、オイ兩人、お前も何か治道居士に迫害を受けたのだなア。

ヨシ、俺がお前の仇討をしてやるから、安心したがよからう。其代りに俺の云ふ事も聞くだらうな」

ブラ「姉さま、どうしまほうか、本当に、一つここで恨を晴らさなくちゃ、女の

意地いぢが立たたぬぢやありませぬか□

デビス□「そらさうですワ、何とかして彼奴あいつを此処ここへ放り込んで頂き、二人よつて両方りやうほうから鬪殺なぶしろしにさして下くだされれば嬉しいですがな。さうすりや親分おやぶんさまの御註文位ごちゆうもんくらゐには喜よろこんで応おうじますけれどなア□

ブラ□「姉さまが其考そのかんがへなら、私わたしだつて賛成さんせいですワ。「あたゐ」の夫をつとを殺ころした奴やつですもの。憎にくうて憎にくうて堪たまらないワ、その仇あだを親方おやかたさまの同情心どうじやうしんに依よつて、討うたして下くださるやうな事ことなら、御恩報ごおんほうじにどんな事ことでも、親方おやかたの云いふ事ことを聞きかうと思おもひますワ□

セール□「ウツフ、。オイ女をんな、お前まへの願ねがひは聞届ききとどけた。其代そのかはりに私わしの言いふ事ことは何なんでも聞きくだらうなア□

兩人りやうにん一度いちどに、

「へーへー聞ききますとも、貴方あなたの仰有おつしやる事こと何なんうして聞きかずに居をれませうか……。
二つふたも立派りつぱな耳みみを持もつて居をるのだもの……
と小ちひさい声こゑで後あとを付つけた。セールは声迄こゑまで変かへて、

セール「ウンウンヨシヨシ、可愛いお前の願だから、何でも聞いてやる。思ふ存分さいなんだがよからうぞ」

「兩人一度に、

「有難うムいます。一時も早くお頼み申します」

セール「ヨシヨシ、之から牢番に申付けて治道をここへ引つ立てて来るから、お前の好きなやうにしたがよからう」と云ひ棄て、自分の居間へ歸つて行く。

セールは自分の居間に歸り、ニコニコし乍ら独言、

セール「ヤア、之で俺も願望成就だ。ウマイウマイ、矢張女といふ者は何か一つ刺戟を与へないと駄目だワイ。まだ懐を調べてゐないが、あの治道はを沢山持つて居るに違ひない。それに恨のある奴が来てるによつて、俺にも都合がよいといふものだ。何しろ月と花にもまがふ美人だからな。エへへへ。両手に花とは俺の事だ。二人の妻に手を引かれ、黄金の橋を渡るといふ言ひ置は、今実現しさうだワイ。ウツフへへへ」

と四辺あたりに人無ひときを幸さいはひ、独ひとり笑壺えつぼに入いつて居をる。

（大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 松村真澄録）

第九章 劇流げきりう（一六六五）

セールは吾居間わがゐまにゐて、愈願望成就いよいよわんまつじやうじゆの時とき至いたれりと、前祝まへいはひの心持こころもちにて、乾兒共こげんどもがそこら内うちより盗ぬすみ来きたれる葡萄酒ぶだうしゆを傾かたむけ、グタグタに酔よつて了しまひ、その夜よは前後ぜんごを忘わすれて眠ねむつて了しまつた。セールは今いまの間にうちセールを引括ひっくくり、牢獄らうごくへ打ぶち込こんでやらうと、窺うかがひ寄よつて見みれば、用心ようじん深いセールは、錠前ぢやうまへを固かたく下おろして、唯ただ一人眠ひとりねむつて居ゐるので、どうする事ことも出来できず、その夜よは治道居士ちだうこじの牢獄らうごくの前まへで明あかして了しまつた。これより先さきセールは、治道居士ちだうこじに向むかひ、小聲こゝろゑになつて、エールエール、もし、治道居士ちだうこじ様さま、貴方あなたのお手紙てがみを持もつて参まゐりました所ところ、牢獄らうごくの扉とびらの前まへに一人ひとりの大男おほをとこが立たつて居をりますので、此奴こいつア失しま敗まつたと、よくよく考かんがへて見みれば、

セールの親方おやかたでした。夜の目も碌ろくに寝ねず、女の前まへで何なんだか愚痴ぐちな事ことを云いつて、口く説といて居をつた所ところと見みえますわい。本ほん当たうに困こまつた奴やつですな□

治道ちだう「アハ、ハ、ハ、ハ、其奴そいつは面白おもしろい。そして手紙てがみはうまく先方むかひへ届とどいたかな□

エール「はい、確たしかに放ほり込こんでおきました。然しかし乍ながらあの二人ふたりの女をんなは妙めうな事ことを云いつてゐましたぜ。私わたしは親分おやぶんが一時いつときも早はやく、あちらへ行ゆけと云いふのでその場ばを立去たちさり、暗くらがりで様子やうすを聞きいてゐますと、ブラワ「ーダ、デビスの二人ふたりの姫ひめが貴方あなたを非ひ常じょうに恨うらんで居をりました□

治道ちだう「あ、さうだらう。さうだらう。俺おれもズイ分ぶんいぢめたからのう□

エール「エー、本ほん当たうですか。随分ずいぶん貴方あなたも悪党あくたうですな……今こんど度はセールの大将たいしやうに願ねがつて、二人ふたり寄よつてお前まへさまを鶯殺なぶりころしにさして呉くれと云いつて願ねがつて居ゐましたよ。二人ふたり別々べつべつに牢獄らうごくに入れてあるのを一いつしよ所しょに入れ、治道ちだうさまをそこへフン縛しばつて突つ込み、鶯殺なぶりころしにさしたら、セールの云いふ事ことを聞きくと云いつてゐましたが。一いつたい体たいどうしたら宜よろしうないませうか□

治道ちだう「ヤ、それは面白おもしろい。流石さすがはブラワ「ーダ姫ひめ、デビス姫ひめだ。いや満足まんぞく々々まんぞく、

アハ、愉快で堪らないわ」

エール「もし、治道さま、貴方どうかしてみますな」

治道「ウン、どうかしてゐるよ」

バット「もしもし治道様、妙な事を仰有るぢやありませんか。貴方が髑殺にあつ

て、吾々をどうして下さる積りですか」

かく話す所へヤクがコソコソとやつて来た。

ヤク「ヤ、エール、お前ここに居つたのか。あまり大きな声で云ふと、外の小盗

人が聞くと大変だぞ」

エール「どうも合点の行かぬ事を治道さまが仰有るので、不思議で堪らないのだ」

ヤク「アハ、アハ、智勇兼備の治道様だ。何かよい妙案があるのだらう。マア心

配するな。お前等はユツクリ計画するがよい。俺はそこらを廻つて来るから、そ

の間トツクリ相談しとくがいいわ」

と云ひすて、見廻りに出て行つた。

治道居士は声をひそめて、バット、カークス、ベース、及牢番のエールに向ひ、

治道「二人の姫様は、此治道居士を斃殺にし度いと云つてゐるのは深い訳があるのだ。今晚は遅いが、いづれ明日の晩の仕事だ。バットが俺の身代りとなり、カークス、ベースの兩人が、二人の女と化り、女の声色を使つて暗がりを幸ひ、牢獄に入つて一芝居やるのだな。そして此治道と二人の姫を外へ出すのだ。そして一言霊を以て、セールを初めその他の奴を一度に帰順させる計画だ。二人の姫はその計画をやらうとしてゐるのらしい。どうだ、バット、お前は俺の声色が使へるのかな」

バット「そりや使へぬ事はムいませぬが、私が斃殺にされちや堪りませぬな」

治道「そこが芝居だよ。キヤツキヤツと泣きさへすれば宜いのだ。本当に突いたり、斬つたりするものかい。そして二人の女はカークス、ベースがするのだが、女の声色は出来るかな。些とは使へるだらう」

カークス「そいつア面白い。私は若い時から芝居が好きでしたから、女の声色は婆アでも、娘でも、古嬢でも、何でもやりますわ」

治道「そんならお前はデビスになつて呉れ。デビスは二十二三だから、そのつも

りでゐてくれ。何せよ暗がりだから、声丈け出せばいいのだ」

カークス「（声色）「汝は恨み重なる治道居士であらうがな。よくもよくも妾に侮辱を加へよつたな。思ひしれやー……」と之ではどうですか」

治道「アハ、うまい、うまい、それなら秀逸だ。サア之でデビス姫は出来た。

オイ、ベース、お前はブラワゝーダになるのだ。まだ十六だ。娘の声が使へるか
な」

ベース「使へますとも。やつて見ませうか……（声色）「汝は治道居士ではないか。ようもようも妾をさいなみよつたな。天は飽迄も罪人をお許しなさらぬぞや。

サア妾両人が刃の錆となれ。恨はつもる、虎熊の山」へ、へ、へ。この位でどうですかな」

治道「アハ、上上等。先づ之でブラワゝーダ姫が出来た。オイ、バット、お前は俺の声色を使ふのだ。どうだ、一つここでやつて見ないか」

バット「（声色）「之は心得ぬ、デビス姫、ブラワゝーダ姫とやら、拙者はそなたに向つて侮辱を加へた事はムらぬ。世の中には同名異人が沢山ムるぞ。そなた

は暗がりの事とて間違つて思ひ「ひがめ」て居るのだらう。ても扨ても迷惑千万、如何に暗がりとは云へ、声の色でも分るであらう。誤解せられちや困りますよ…

「もし治道様この位で如何ですか」

治道「マア可なりだ。然し乍ら二人の姫が懐劍を以て、グツと、突くによつて、その時は痛さうな声を出さねばならぬぞ」

バツト「ハイ、私は勘平の腹切をやつた事がムいますから、痛さうな声を出すのは何でもありません。安心して下さいませ」

治道「オイ、勘平では落付がない。塩谷判官位の所でやつて見よ」

バツト「ハイ、やつて見ませう……。「力弥々々、由良之助はまだ来ぬか。……

ハハア未だ参上仕りませぬ……。エー、チエヘー、エ、是非もない……。「と覚悟を定め懐劍抜くより早く、左手の脇腹へグツとつき立て……。「アー、由良之助に

会はぬのが残念だわいい……。由良之助、只今、参上……。「ヤ待ち兼ねたぞや。近う

近う……。「ハツハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

治道「オイ、そこは、近う近うと云はずに治道治道と云ふのだよ。然し、芝居に

なつちや敵てきに悟さとられるから、ヤツパリ治道居士ちだうこじでなくちやいかぬぞ〆

バツト〆そんな事ことに抜目ぬけめがありますか。マア安心あんしんして下ください〆

エール〆ア、此奴こいつは面白おもしろいアツハ、々、々。私わたしが牢番らうばんを幸さいはひ、うまくすりかへて見みませう。明日あすの晩ばんが待まちち遠とほしいわい〆

ヤクは慌あわただしく入いり来きたり、

ヤク〆オイオイ、さう大おほきな声こゑを出だしちや、露見ろけんするぞ。今いまお前まへのやつてゐた芝しば

居ゐは一丁程いっぢやうほど向むかふへ聞きえたよ。幸さいはひ誰たれも外ほかに居ゐなかつたから宜よいが、もしも人ひとに聞き

えたら大たい変へんだ〆

治道ちだう 〆フン、お前まへはヤクか、ヤク目御苦勞めごくらう、大儀たいぎだ。充じゆつ分ぶん心しんを配くばつて俺達おれたちの世話せわ

を「ヤク」のだよ。その代かはりお「ヤク」が済すんだら、【ヤク】束通そくどほり、立派りっぱな宣せん

伝使でんしにしてやるからな〆

ヤク〆はい、有あり難がたう〆

かく話はなす所ところへ足音高あしおとたかく、一人ひとりの牢番らうばんがやつて来きた。治道居士ちだうこじは此場このばを誤魔化ごまくわさ

むとて経文きやうもんとも偈げともつかぬ事ことを喋しゃべり出だした。

治道 〇 弥勒真弥勒。水銀無仮。分身千百億。阿魏無真。長汀子来也。眼に三角を
生じ、頭に五嶽を峭す。好は未だ必ず好ならず。悪は未だ必ず悪ならず。布袋頭
開くや、隈々たいたいたり、骨々董々たり。軽きことは毫毛の如く、重きことは
丘山の如し。拈得して便ち擲ち、拏得して便ち用ふ。拏子を豎て、云く猶是れ兜
率陀天底。只弥勒未生以前の如きは如何か剖露せむ。床を撃つて云く、雨声を収
拾して旧樹に歸す。放教秋色の梧桐に到るを。五祖六祖の像に題して云はく、
「恨殺す此の頭陀。山は磨すとも恨磨せず。吾今檐頭重く、汝が為に、松を種う
る多し」西巖三十余年、仏鑑の処に所得する底、拈出して人に示す、涓滴の滲漏
なし。後の三十年、点眼の薬なり」
夜は深閑として更渡り、時々かすかな風が、雨戸をゴトゴトと揺する声のみ、
ちぎれちぎれに聞えてゐる。

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 北村隆光録)

第一〇章 赤酒の声（一六六六）

その夜はカラリと明けた。薄暗がりの牢獄の中で、ブラワ、ーダは治道居士の手紙を読んで見た。その文面には、

一、拙者は貴女の御存じの治道居士でムいます。虎熊山の岩窟に、以前の吾部下、セール、ハールの兩人、数多の部下を従へ山賊を働き居ると聞き、天地の神に責任を負ひ、故意と囚人となつて、第一牢獄に投げ込まれて居ります。承はりますれば貴女方お二人も亦、此山砦に捕はれ、日夜セールの無体の恋慕にお苦しみ遊ばす事を聞きました。就いては私にも種々と考へがありますれば、茲一両日、言を左右に托して時を待ち、あく迄も貞操をお守り下さいませ。屹度救ひ出して上げませうから、万事に抜目のない貴女様、よもやとは思ひますが、もしや短気を起して下さつては、折角の治道居士の心遣ひが無になりますから、ここ一両日、臨機応変の態度を採つて下さい。

治道ちだうより

御両人様へごりやうにんさま

と記しるしてあつた。両人りやうにんは各おの同おのじ手紙てがみを見てニツコと笑わらひ、早救はやすくはれる時ときの来きた事ことを喜よろこんだ。そして自じ分ぶんの昨ゆう晚べい云いつた此この狂言きやうげんを、何なんとかして早はやく実現じつげんさし度たいものは明あけて了しまつたのである。ブラワゝーダは細ほそい声こゑで、

ブラワゝ 常久とこしへの暗夜やみよもやがて晴はれぬらむ

救すくひの神かみの影かげ見みえければ

デビス姫ひめ 今いまは早心はやこころにかかると雲くもも無なし

暁告あかつきつぐる鶏にはとりの声こゑに。

姉妹が心を協せて枉津見を

言向和す時は来にけり

かかる所へ、足音高くやつて来たのはセールであつた。デビスは中から声をかけ、

デビス「もしもし、貴方はセールの親分ぢやムいませぬか。嫌だワ。夜前は妾に、あれ丈け固く約束し乍ら、何故聞いて下さらないの。早く治道居士をフン縛つて、此処へ入れて下さいな。そして思ふ存分恨を晴らさして下さいな。ね、親分さま」

セール「イヤ、済まなかつた。何時でも呼んでやる。実は昨夜、あまりお前の返事が気が利いて居たので、前祝に葡萄酒をグイグイとやつた所酔つて了ひ、誠に済まぬ事した。これからヤク、エールの牢番に云ひつけ、ここへ引張つて来てやらう」

デビス「それが定つた上は、別に慌てるには及びませぬ。妾が何程さかしい女だとして、昼は顔が見えますから今晚にして下さいな、暗がりで鬪殺にしたうムいま

すからね。なア旦那さま」

セール「ウン、よし、気に入った。俺に旦那様と云ひよつたな、それに間違ひはない。それにきまつた上は何事によらず、お前の望みを聞いてやらう。今牢獄を出せなら出さぬ事もない。何分自分の奥さまを、こんな所へ入れて虐待するものも、済まぬからな」

デビス「出して頂くのは有難うムいますが、首尾よう敵を討つ迄、此処に斯うして置いて下さい。そして晩に此処にブラワ、一ダさまを入れて貰ひ、そこへ治道居士を呼んで両方から斬り苛めさして下さい。夜通しかかつて、耳を切り、鼻を切り、指を斬つて、バルチザンの様な事をせねば、虫が得心しませぬワ」

セール「成程そりや面白からう。そんなら、今夜は首尾よく目的を達し、明日は結婚の式を挙げる事にしよう。それでは、懐剣は一本づつお前に、上げて置かう」

デビス「ハイ、有難う。然し旦那様、一つ約束をして置きたうムいます」

セール「ウン、よしよし。何でも約束をしてやる」

デビス「そんなら旦那様。妾を本妻にして下さい。そしてブラワ、一ダ姫は第二

夫人ふじんですから、それを今いまの中うちに誓ちかつて頂いたきたうございますワ」

セール」「ナーンだ。そんな事ことか。それなら俺おれの思惑おもわくどほり通だ。お前まへもお頭かしらの奥おくさまとなれば余あまり悪わるくはあるまいぞ。……果報くわほうは寝ねて待まてとはよく云いつたものだな」

デビス」「そんなら旦那様だんなさま、恥はづかしうございますから、今晚こんばんは外ほかの小盗人こぬすとが寄よりつかぬやうにして下くださいませや」

セール」「よしよし、お前まへの云いふ事ことなら何なんでも聞きいてやる。明日あすは結婚けつこんするのだから、その用意よういに御馳走ごちそうを集あつめて置おかねばならぬ。乾兒こぶんの奴等やつらを四方八方しほうはつぱうに御馳走ごちそうの準備じゆんびに差遣さしつかはさう。今晚こんばんを楽たのしみに待まつてゐよ。ヤア俺わしも之これから髯ひげでも剃そつて、

チツと「めか」さうかい。花嫁はなよめさまに對たいしても、あまり無躰ぶしつけだからな」

と元氣げんきよく吾居間わがあまに歸かへり、子分こぶんを残のこらず呼よび寄よせ、各自用めいめいようを吟いひつけ、山やまを下くだつて馳走ちそうの用意よういをなすべく四方八方しほうはつぱうへ派遣はけんして了しまつた。後あとにセールは、又またもヤクを相手あひてに、お祝いはひとして葡萄酒ぶたうしゆを呻あふつてゐる。

ヤク」「もし親方おやかた、明日あすはお目出度めでたうございます。何卒どうぞ御成功ごせいこうを祈いのりますよ」

セール」「ウン、云いふにヤ及およばぬ。既すでに成功せいこうしたも同然どうぜんだ。イツヒ、お前まへも

羨りいだらうが、マア暫らく辛抱してくれ。俺の手で治道居士を片づける事は、何程泥棒だつて今迄の恩義上、手を下す訳には行かず、又沢山の子分があつても、九分九厘迄治道居士の部下だつたのだから、真逆の時躊躇をし、自分の長上を殺すやうな手本を出すと皆が赤化しよつて、俺等迄、気に入らぬと何時首を掻くかも知れぬので、実は思想上の大問題と心配してゐたのだ。然るに何の幸ぞ、治道居士に恨を抱いた二人のナイスが、敵を討たして呉れと云ふのだから、俺にとつても之以上の好都合はない。居乍らにして敵を平げ、邪魔物を無くし、惚れた女と合衾の式を挙げるとは実に愉快な事だ。アハ、ハ、ハ、オイ、ヤク、お前も一杯やれ、何も遠慮は入らぬ、もとは只で盗つた酒だから、何程飲んでも懐の【えぐれる氣遣ひもなし気楽なものだ】

ヤク「ハイ、頂戴致します。親分様の空前絶後の御目出度さですから、私も拵舞雀躍して居ります」

と無性矢鱈に酒をすすめて、酔ひ潰さうとかかつてゐる。

セールは上機嫌でソロソロ謡ひ出した。

セール^{セール} 飲^のめよ騒^{さわ}げよ一寸^{いっすん}先^{さき}や暗^{やみ}夜^よ 暗^{やみ}に包^{つつ}んだ獄^{ひと}牢^{とや}の中^{うち}に

月^{つき}雪^{ゆきはな}花^{はな}にも譬^{たと}ふべき 二人^{ふたり}のナイスが待^まつてゐる

誰^{たれ}を待^まつかと尋^{たづ}ねて見^みたら バラモン教^{けう}にて名^なも高^{たか}き

陸^{りく}軍^{ぐん}大^{たい}尉^{いぬ}のセールさま 色^{いろ}が黒^{くろ}うて背^せが高^{たか}うて

目^め玉^{だま}が丸^{まる}うて天^{てん}狗^く鼻^{ばな} 古^こ今^{こん}無^む双^{さう}の男^{をとこ}らしい男^{をとこ}

今^{いま}は泥^{どろ}棒^{ぼう}の親^{おや}分^{ぶん}となつて 数^{あまた}多^たの乾^こ児^{ぶん}を使^し役^{えき}する

ヤツパリ身^み魂^{たま}は争^{あらそ}はれない 一^{いっ}中^{ちゆう}隊^{たい}の兵^{へい}卒^{そつ}を

指^し揮^きした身^み魂^{たま}はどこ迄^{まで}も 一^{いっ}中^{ちゆう}隊^{たい}の盗^{ぬす}人^{びと}を

相^{あひ}も変^{かは}らず支^し配^{はい}して 虎^{とら}熊^{くま}山^{やま}の山^{さん}砦^{さい}に

羽^は振^ぶりを利^きかす甲^{かひ}斐^{しやう}性^{せう}もの 恋^{こひ}の仇^{あだ}なるハールの少^{せう}尉^{いぬ}

今^{いま}は何^{いづ}処^この山^{やま}の果^はて 野^の辺^べに逍^{さま}遥^{よひ}メソメソと

吾^{わが}身^みの不^ふ運^{うん}をかこちつつ 此^{この}世^よを果^は敢^かなみあるだらう

二人^{ふたり}のナイスを此^{この}セールが 両^{りやう}手^てに花^{はな}の結^{けつ}婚^{こん}を

やつたと聞^きいたら嘸^{さそ}や嘸^{さそ} 地^ぢ団^{だん}太^た踏^ふんで口^く惜^{ちやく}しがり

舌したでも噛かんで死ぬしぬだらう　その有あり様がアリアリと
吾わが目の前まへにちらついて　ほんに愉快ゆくわいな事ことだわい
思おもへば思おもへば俺おれの様やうな　幸福しあはせ者が世よにあらうか
数万すまんの金かねを懐ふところに　抱いだいた比丘びくはうまうまと
吾わが手に知しらずに飛とび込こんで　福ふくを授さづけに來きて呉くれた
木この花はな姫ひめか弁財べんざい天てん　出いづも雲の姫ひめも真ま裸はだ足し
逃にげ出だす様やうなナイスをば　左さ右うに侍はべらしうま酒さけに
舌したの鼓つづみを撃うち乍ながら　小こ股またにはさんだ三味しやみ線せんを
ピンピンツンツン引き立たてて　糸いとがきれる程ほど抱だきしめて
思おもふ存ぞん分ぶん痴ち話わ喧けん嘩くわ　罰ばちが当あたつても構かまやせぬ
ほんに愉快ゆくわいな事ことだわい　之これと云いふのもバラモンの
大黒おほくろ主ぬしの御おん恵めぐみ　これだによつて平生へいぜから
神かみ信しん心じんはせにやならぬ　と云いふて泥棒どろぼうの親分おやぶんが
神かみの御前みまへに手てを合あはし　お経きやうを云いふのも何なんとやら

薄気味悪い心地する さはさり乍らそんな事

気にかけてゐたら恋の道 欲の目的達しない

よくない奴は悪といふ よくがありやこそ世の中に

善と云はれて暮すのだ 善は急げだ今晚の

二人の仇討ち済んだなら 時を移さず合衆の

式をば挙げて偕老の 契を結ぶ下準備

お前も充分気をつけて 落度のないやうにやつてくれ

あゝ面白い面白い 面白うなつて来たわいな。

アハ、酒は浩然の気を養ふと云つて、今迄クシヤクシヤして居た俺の気分も

カラリと晴れ、世界晴れのやうだ。どうして又、こんな好運兎に生れて来たもの

だらうな。エ、エ、エ、

と一人管を巻いて居る。ヤクは一生懸命に、酔はさうとかかつてゐる。漸くにし

て、その日は暮れて了つた。肝腎のセールはグタグタになつてゐる。ヤクはソツ

と此場このばを立出たちいで治道ちだう居士こじの牢獄らうごくの前まへへと急いそいだ。

ヤク「オイ、エール、之これからが正念場しやうねんばだぞ。俺等おれたち兩人りやうにんが今夜こんやこそ捨身しやしんの大活動だいくわつどうをやつて大将たいしやうを往生わうじやうさせるのだ。抜ぬからないやうにせよ」

エール「心配しんぱいするな。策戦計画さくせんけいかくはスツカリ整ととのふてゐるのだ」

治道「ヤ、兩人御苦勞りやうにんごくらうだつた。サア之これから愈本芝居いよいよほんしばゐにかからう。万事ばんじ抜目ぬけめなく頼たのむよ」

ヤク「ハイ、承知致しやうちいたしました。然しかし小頭こがしらが四五人しごにん、ウロウロしてゐますから、暗くらがりに余程よほどうまくやらないと、芝居しばゐの打ち損うちそこなひをやつたら大變たいへんですから、氣きをつけて下ください」

治道「何事なにごとも皇大神すめおほかみの御心みこころの

ままになれよと祈いのるのみなる」

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 北村隆光録)

第一章 大笑裡（一六六七）

ヤク、エールの兩人は、バット、カークス、ベース三人を、デビス姫を幽閉してある牢獄に打ち込み、治道居士、デビス姫、ブラワ、一ダ姫をそつと牢獄の外に引き出し、暗夜を幸ひ人目にかからぬ堅牢な一室に、茶やパンを与へて休ませ置き、セールの居間に進み入り、

ヤク「もし親分様、御命令通り、ブラワ、一ダと治道居士を、デビスの牢獄へ放り込んで置きました。さうして治道居士は身動きが出来ない所迄、【がんじ】掬に縛つて置きましたから、もはや安心でムいます」

セール「ヤア、ヤク、エールの兩人御苦勞だつた。そんなら是から、俺も見に往かうかなア」

ヤク「アノ旦那様、二人の美人が仰有るのには、旦那様と其他四五人の上役許り立ち会つて貰ひたいとの事です。そして顔が見えると嫌ですから、燈火をつけないで、見聞いや、聴聞して欲しいとの事です」

エール「サア旦那様、早くお越を願ひます」

セール「ヨシヨシ、そんなら小頭許り列席さしたらよからう。牢獄の外で様子を聞く事にせう」

と五人の小頭を従へ、エール、ヤクも共に牢獄の外に八人「づらつ」と並んで、中の様子を考へて居る。カークスは、デビス姫の声色をつかつて、

カークス「ヤア其方は、恨み重なる、憎さも憎き治道居士であらうがな。天命逃れず此牢獄に連れ込まれ、繊弱き女に仇を打たれるとは、さてもさても不便な奴だ。これも前世の因縁と諦めたがよからうぞや」

バットは治道居士の声色を使つて、

バット「アハ、ハ、ハ。猪口才千萬な身の程知らず奴が、俺を何と心得て居る。何程高手小手に縛たればとて、これ程のひよるひよる縄、打ち切るに何の手間暇がかからうぞ。下らぬ事を致して、後悔するな。吾こそはバラモン軍に於て、英雄豪傑の仇名を取つた鬼春別の中將だ。三千人の軍隊を三寸の舌端を以て指揮し来たつた某、今は三五教の比丘となり、一蓑一笠の修験者となりたればとて、昔取つ

たる杵柄きねづかの、未だいまに残る腕うでの冴さえ、見事みごと指一本ゆびいっぽんでも触るなら、サア、触て見よさわ」
カークス「ホ、、、。此期このごに及んで、何の繰言くりごと、もはや叶かなはぬ……日頃ひごろのデビ
スが恨みうら、サア一刀浴びて見よ。これブラワ、ダさま、お前まへも夫をとの仇あだぢやない
か。サア妾わたしと両方りやうほうから両方りやうほうの耳みみを、滅多切めつたぎりに斬り落おとしませう」

ベースはブラワ、ダの仮声こわいろを使つかひ、

ベース「姉上あねうへさま様の仰おほせ迄までもなく、此恨このうらみを晴はらさで置おきませうか。磐石ばんじやくをもつて卵たまご
をわるが如ごとき此場合このばあひ、これも全まくセール親分おやぶんさまの御同情ごどうじやうの致いたす所ところ、サア鬼春別おにはるわけ
の治道居士ちだうこじ、たとへ汝なんぢは三軍さんぐんを指揮しきした勇将ゆうじやうたりとも、も早はやかうなつては身動みうごき
もなるまい。纖弱かよわき女の腕うでに満身まんしんの恨うらみを込こめたこの刃やいば、覚悟かくごをせよ。サア姉上あねうへさま
一、二、三ひいでやりませう。貴女あなたは左ひだりの耳みみ、私わたしは右みぎの耳みみを………ホ、、、まあ心地こごちよ
き事ことだなア、一、二、三ひい」
バット「エ、、痛いたいわい。耳みみがチ、千切ちぎれるぢやないか。血ちが出るぢやないか。
ウン、ア、【い】痛いたいとは申まをさぬ。俺おれも男をとこだ、ウ、、、ウン」
カークス「痛いたいであらう。痛いたいやうに斬きつたのだ。血ちが出るのはあたりまへぢや。

ても切ても氣持のよい事だなア」

ベース「これや鬼春別、此ブラワ、一ダが恨の刃、些とは痛からう。思ひ知つたであらうのう」

バット「いや早誠にもつて痛くムらぬ事はないわい。エへ、へ、へ、」

カークス「はて頑固い、此でもか。いやこれでもか。（男の声）こーれでもかー」と思はず知らず地声を出して了つた。外に聞いて居たセールは驚いて、

セール「オイ、デビス姫、何と云ふ太い声を出すのだ。まるで男でないか」

カークス「何だか知りませぬが、あんな声が出たのですよ。私はいつも神懸を致しますから、大方大天狗が憑つて手伝ふてくれたのでムいませう…（男声）デビ

ス姫は虎熊山の大神狗が憑つて守護致して居るぞよ。セール決して疑ふ事はならぬぞよ」

セール「ハイ、決して疑ひませぬ」

ベース「これや治道居士とやら、夫の仇サア胸をついてやらう。些とは痛うても辛棒せよ。明日の朝迄翽殺し…：…てもさても愉快の事だわい。オホ、へ、へ。あま

りをかして、シシ芝居が出来ぬワイのう」

バット「オイ、ベース。ではないブラワ」ダ姫、左様な事を申すと治道居士も何だか張り合が無いわい。サア早く思ふ存分にしたがよからう」

ベース「汝の言葉を待つ迄もなく腹をえぐつてやらう」

バット「アイタ、ター、暫く暫くシシ暫くお待ち下さりませう」

カークス「此期に及んで何の躊躇、血迷ふたか、ヤ、おくれたか……バット……

いやいや、治道居士……」

バット「アイヤ、血迷ひもせぬ、後れもせぬ。某事はビクトリ山の麓に於て、治

国別が部下の者共に駆難まされ、此恨を報いむと、テルモン山の麓に来る折、是

なるデビス姫、ブラワ「ダ姫の兩人に出会ひ、仇の端とつけ覗ふ中、ブラワ「

ダの夫伊太彦なるもの、横合より槍の「キツ」先を扱きながら攻め来る、シヤ

猪口才なと渡り戦ふ。上段下段某が力に敵しかね、伊太彦は其場に斃り、手下の

もの共ちりぢりバット花を嵐のさそひし如く、逃げ行く可笑しさ、ハ、ハ、ハ。も

うかうなる上は破れかぶれ、どうなりと勝手に致せ、たとへ此場に死するとも、

魂魄こんぱく此土このとに留まりとど、汝なんぢの素首そつくび引抜かむ。ヒウドロドロドロ

カークス「(男おとこの声こゑ) オイ、そんないやらしい事こと云いふて呉くれない、芝居しばゐが出来できぬ

ぢやないか。(女をんなの声こゑ) モシモシセル様さま、妾わたしには大天狗だいてんぐがうつつて居をりますか

ら、時々ときどき拍子びやうしの抜ぬけた声こゑを出だします。何卒どうぞ了見れうけんして(雷らい声せい) 下くださいませ

と雷らいの如ごとくに後あとの一語いちごを出だす。セルは二人ふたりの女をんなを信しんじ切きつて居あるので、黙言だまつ

て二人ふたりの言葉ことばを聞きいて居ある。五人ごにんの小頭こがしらは合点がってんが往いかず、腑ふに落おちぬと思おもひなが

ら、頭かしらが黙言だまつて居あるので、不審ふしんの雲くもに包つつまれながら、息いきをこらして聞きいて居あた。

ベール「姉ねえさま、もう是位これくらいで一思ひとおもひにやつてやりませうか」

カークス「さう致いたませう。これや治道ちだう居士こじ、良とどめを刺さしてやらう。喉のどはどこだ

と云いひながら、暗くらがりで喉のどのあたりを探さぐつた。バットはこそばゆくなつて思おもはず

知らずフ、フ、と吹ふき出だした。

カークス「おのれ頑固しぶとい……デビス姫ひめの腕うでの冴さえ、食くつて見みよー」

「キヤアツ」と云いつた切りバタバタバタと音おとをさせ、一言いちごんも発はつしなくなつた。

カークス「ホ、ホ、ホ、日頃ひごろの恨うらみ、妹いもうとが夫おとの仇あだ、思おもひ知しつたか南無頓生なむとんじやう菩提ぼだい治ち

道居士ちだうこじ」

ベースをうと夫の仇あだ、思おもひ知しつたであらうなア。南無なむバラモン帝たい釈しやく自在じざいてん天てん、有ありがた難たく御お神か徳げを感謝かんしゃ致いたします」

バツトをうら「ヤア恨うらめしやなア。此この治道居士ちだうこじは思おもはぬ不覚ふかくを取とり、小盗人こぬすとに高たか手て小こ手てに縛いましめられ、身動みうごきなならぬやうにせられ、三人さんにんの女をんなに酷さいなまれ、今いまは世よになき亡骸なきがらの、恨うらみは募つる虎熊とらくまの山やま、汝許なんぢばかりならず、此この岩窟いはやの大盗人おほぬすびと、セールを初はじめ其他そのたの奴原やつばら、生首なまくび引きぬき、仇あだを討うたいでおかうか、残念ざんねんやな、ク、口惜くちをしやな」

セールは首筋元くびすぢもとからゾクゾクと寒気さむけがしだし、真蒼まっさをの顔かほをし、暗くらがりに慄ふるひながら、

セールなん「コ、コラ治道居士ちだうこじとやら、締あやめたがよからうぞ。何なんと云いつても、もうかうなつては此世このよに縁えんがないのだから覚悟かくごをして神妙しんめうに成じやうぶつ仏ぶつせい。南無なむ頓とん生しやう菩ぼ提だい治道居士ちだうこじ……」

カークスさま「もしセール様さま、おかげをもつて本望ほんまうを遂とげました。どうぞ昼ひるよりも明あかく灯あかりをつけて下くださいませ」

セールは慄ふるひながら、

セール「ア、結構けっこう々々。オイ皆みなの者灯ものあかりの用意よういだ」

「ハイ」と答こたへてヤク、エールの両人りやうにんは蠟燭らふそくを点てんじて来た。セール外五人ほかごにんの小頭こがしらはびつくり腰ごしを抜ぬかし地ちべたに平太へたつて慄ふるうて居ゐる。蠟燭らふそくの火ひは幾いくつともなく点てんぜられた。よくよく見みれば、治道居士ちだうこじ、デビス姫ひめ、ブラワゝーダはニコニコしながらセールの前まへに立たつて居ゐる。牢獄らうごくの中なかから、カークスは相変あひかはらず、デビス姫ひめの声色こわいろにて、

カークス「どうぞ旦那様だんなさま、開あけて下くださいませ。本望ほんまうを遂とげましてムムいます」
ベース「もし旦那様だんなさま、早はやく此この戸とをあけて下ください。幽霊いうれいが恐おそろしうムムいます」

外そとのデビス姫ひめは初はじめて口くちを開ひらき、

デビス「もしセール様さま、私わたしは本当ほんたうのデビス姫ひめでムムいますよ。牢獄らうごくに居ゐるのは私わたしの替玉かへだま、秘密ひみつをカークスと云いふ男をとこでムムいます」

セール「ナ、何なんと、お前まへは又またどうして出でたのか」

デビス「ホ、貴方あなたもいゝ頓馬とんまですなえ」

ブラワゝーダ「もしセールさま、私はブラワゝーダでムいます。永らく御厄介に預かりましたネエ」

セール「何、お前はいつの間に出たのだ」

ブラワゝーダ「ハイ、斯うなつたら何も彼も申上げますが、ヤク、エール様のお取計らひによつて、私は無事に安全地帯にのがれ、ベースさまを替玉に使つたのでムいますわ。ホ、ホ、ホ、」

治道「拙者は鬼春別將軍治道居士でム。牢獄の中にて殺されたりと見しは汝が乾児たりしバツトであるぞよ。オイ、バツト、もうよい。ヤア、エール、戸口を明けてやれ」

ハイと答へてエールは忽ち戸口をパツと開いた。三人はニコニコしながら入口の窓を潜つて出て来た。セールを初め五人の小頭は早腰を抜かし、口をポカンと明けて、真蒼な顔をしてゐる。かかる所へ暗を通して聞え来る宣伝歌の声、

「神が表に現はれて

善と悪とを立分ける

此世を作りし神直日
心も広き大直日

唯何事も人の世は
直日に見直せ聞直せ

曲の過ち宣り直せ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧るとも
仮令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ
三五教の宣伝使

神の教の伊太彦が
此岩窟に囚はれし

デビスの姫やブラワ
二人の珍の御使を

救はむためにハールをば
先頭に立ててスタスタと

登りて茲に現はれぬ
鬼春別の治道居士

定めて無事におはすらむ
これの岩窟の頭分

セールは今や何処に居る
一時も早く出迎へて

吾言靈の神力に
心を直し靈清め

誠の道に帰れかし
吾に夜光の御玉あり

神は吾等を守りつつ
虎熊山の征伐に

早くも向はせたまひけり
あゝ惟神々々

御靈幸倍まませよ

と謡ひ乍ら此場にやつて来る。三度吃驚のセールは、地上に頭をくつつけ涙をたらして慄ひ居る。是よりセールを初め、其他の盗人共は何れも悪事の恐るべきを悟り、心の底より悔改め、三五教に帰順し、向後は決して悪事をなさざる事を誓ひ、打ち揃ひ三五の大神の御名を唱へ、改悛の意を表はした。茲に治道居士及び伊太彦は又もやブラワゝーダ、デビス姫と袂を分ち、思ひ思ひにエルサレムを指して進む事とした。セールは虎熊山の岩窟に火を放ち、数多の乾児と共に悔い改めて此場を立ち出で、各自に自が郷里に帰る事となつた。ハールは伊太彦に許されて、エルサレム迄従ひ往く事となつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 加藤明子録)

第一二章 天恵（一六六八）

治道居士は、バット、カークス、ベース、ヤク、エールの五人を従へ、法螺貝を吹き乍ら、西へ西へとエルサレムを指して進み行く。ヤクは道々歌ふ。

ヤク 神が表に現はれて

善神邪神を立別ける

尊き御世となりにけり

吾等も元はバラモンの

軍の君に能く仕へ

大黒主の御心に

叶はむ為と朝夕に

馬の手入や其外の

雑役などにいそしみて

嶮しき山川打渡り

浮木の森まで来て見れば

思ひ掛なき大軍の

旗色悪き吾軍

ライオン河を打渡り

ビクトル山や猪倉の山をば又もや追ひ出され

茲に愈解散の憂き目に遇うて当惑し

吾故郷へのめのめと 帰らむ顔もなきままに

セールの大尉に従ひて 虎熊山の山砦に

泥棒のつとめを相果たし 彼方此方と駆めぐり

旅人を掠め居たりしが 軍の君の治道居士

元の鬼春別様が 比丘の姿となりまして

ハルセー沼の畔迄 来らせたまふ其砌

天地の道理を諭されて 誠の道に立帰り

すまぬ事とは知り乍ら 親分なりしセールをば

甘くだまして牢番と 化け込み今日の大芝居

打ち了ふせたる愉快さよ さはさり乍ら此前途は

何うして月日を送るやら 住むには家なく食ふには

糧なき貧しき吾れこそは 善にならうと焦つても

どうやら悪になり相だ 心の弱き人の身は

絶対無限の神力の 備はりませる神様に

お任せするより仕様が
ない カークス、バット、
エール、ベース

お前は何かと思ふてるか
俺は此の先き案じられ

胸をこがしてゐるわいの
何程神力受けたとて

元より無学な吾々は
比丘にもなれず如何にして

尊き神の御使が
つとまり相な事はない

此奴は何か工夫して
身の振方を考へにや

口のひあがる虞あり
倉廩みちて礼節を

知るとは古人の金言だ
何程誠の教をば

滝の如くに浴びせられ
雷の如くに聞かされて

いかに心が開くとも
お腹が空いては玉の緒の

命をつなぐ術もない
どしたら此の苦が遁れようか

コレコレもうし比丘様よ
吾等五人の行先の

身の振方を詳細に
何卒教へて下さんせ

善と悪との分水嶺
刹那心の舵次第

船ふねを覆かへしちやなりませぬ あゝ惟かむながらかむながら神々々

御みめくみ恵深みふかき治道居士ちだうこじ 吾わが師しの前まへに慎つしみて

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

治道居士ちだうこじは之これに答こたへて歌うたふ。

治道居士ちだうこじ 天津御空あまつみそらを翔たつ鳥とりも 山野さんやに棲すまへる獸けだものも

神かみの恵めぐみに包つつまれて 今日けふの貯たくはへなくとも

立派りつぱに命いのちをつなぎ居をる 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

天てんは不食ふじきの民草たみぐさを いかでか造つくり給たまふべき

誠まことの道みちに叶かなひなば 慈愛じあいの神かみは吾々われわれの

身魂みたまを安やすきに守まもりつつ 永遠とこほの榮さかえと喜よろこびと

命いのちの糧かてを賜たまふべし 抑そもそも人ひとはパンのみで

此世このよに生いくべきものならず 靈みたまの餌えさを沢山たくさんに

吸収したる其上は

肉体守る食物を

求むるならば皇神は

必要と認めし物ならば

必ず授け給ふべし

神の誠の大道に

尽し乍らも食物に

貧しく暮し苦むは

未だ全く皇神の

心に叶はぬしるしぞや

霊主体従の真心に

立帰りたる人々は

必ず衣食住業に

普く幸はひ賜ふべし

先づ第一に魂を

研いて心を相清め

神の大道を歩むべし

神は汝と共にあり

いかでか見すて給はむや

鳥獣も大神は

豊に養ひ給ひます

況んや人の身を以て

飢て死すべき理あらむや

只惟神々々

神の教に身を任せ

心を碎き身を碎き

力限りに吾業に

朝な夕何仕ふべし

之これが処しよせい世だいの第一いの 万ばん古こ狂くるはぬ要えう訣けつぞ

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 神かみの教をしへに従したがひて

汝なれが迷まよへる魂たましひの ひびきに答こたへまつるなり

進すすめよ進すすめ神かみの道みち 励はげめよ励はげめ人ひとの業わざ

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや 神かみは汝なんぢと俱ともに在あり

と歌うたひ乍ながら、治道ちだう居士こじは先さきに立たつて進すすみ行ゆく。或ある小ちひさき山やまの麓ふもとに着ついた。見みれば

かんばしき苺いちじが大地だいちを紅くれなゐに染そめて、人ひと待まち顔がほに稔みのつてゐる。

治道ちだう「さア皆みなさま、ここで一いつ服ぶくせう。之これ見みよ。お前まへ達たちはいろいろと心しん配ぱいしてゐ

るが、神かみに従したがつて行ゆく道みちには斯かふいふ天てん恵けいがあるのだ。畑はたけに作つくつた苺いちじでなし、誰たれ

憚はばからぬ原野げんやの中なかに苺いちじが熟じゆくして俺おれ達たちを待まつてゐるぢやないか。どれ丈だけ餓が虎この勢いきほひで

食くつたとて、これ丈だけあれば、百ひやく人や二に百ひやく人の食料しよくれうは大だい丈ぢやう夫ぶだ。又また先せん繰ぐり先せん繰ぐり新あたら

しい実みが、斯かうして根元ねもとの方ほうについてゐる。サア一ひとつ感かん謝しゃ祈き願わんを凝こらして、天てん恵けい

の美味びみを頂いたかうぢやないか」

一同は、

「ハイ、有難うムいます」

と此処に腰を据え、神に感謝し、小口から水の垂るやうな苺を、手に取つては食ひ喰ひ漸く腹を拵へた。

治道居士「有難や皇大神の御恵は

野にも山にもみち足らひけり。

餓ゑ渴き進みかねたる人の子に

授け給ひぬ命の味を。

虎熊の山を立出で今ここに

神の恵を味はふ嬉しさ」

ヤク「思ひきやあたりも暗き草の野に

赤あかきいちご莓いちごの稔みのりあるとは『

エール『蛇へびいちご莓いちごならむと近ちかよ寄り手てに取とれば
いとど美お味いしく食くエール莓いちご』

バツト『うす暗ぐらき此この山やま路みちも紅くれなゐの
莓いちごにバツトあかくなりける』

カークス『皇すめ神かみは深ふかき恵めぐみをカークスの
誠まことのひと人に与あたへ給たまひぬ』

ベースのど 喉のどかわきベースをかきし吾々われわれも

今は御神いまみかみの恵めぐみにうるほふ」

ヤク」 治道ちだうさま様、世よの中なかは心配しんぱいせなくても可いいものですな。私達わたしたちは昨日きのふから一食いつしよくも碌ろくにせず、山坂やまさかを下くだり、スタスタ此処ここ迄までやつて参まゐりましたが、最早もはや腹はらはすき、喉のどはかわき一滴いつてきの水みづもなし、進退しんたい維谷これきはまるといふ所ところで△ございました。九分九厘くぶくりんで既すでに息いきつかうとした時ときに、かやうな尊たふとい苺いちごを下くださるとは、何なんとも、例たとへ方がたない有難ありがたさで△ございます。之これを思おもへば決けつして神様かみさまは吾々われわれを見殺みころしにはなさりませぬな」

治道ちだう「さうだ。人間にんげんは神様かみさまの与あたへて下くださるものを頂いただいて居をりさへすれば安全あんぜんだ。今いまの人間にんげんは食くつた上うへにも食くひ、飲のんだ上うへにも飲のみ、贅ぜいたく沢ざん三昧まいをして、之これは甘うまいの、不味まずいのと小言こごと許ばかり云いふてゐるから、生活せいくわつ難なんの声こゑが起おこるのだ。それで物価ぶつがは益々ますます騰とう貴きして人民じんみんは愈いよいよ苦くるむのだ。万人ばんにんが万人ばんにん乍なら神かみの恩恵おんけいを有難ありがたく感じかんじ、与あたへられたものを頂いただくといふ事ことになれば、世よの中なかは貧乏びんぱふもなく、病やまひもなく、又また争あらそひも起おこらぬ。だから吾々われわれはどこ迄までも、惟神かむながらの道みちを歩あゆまねばならないのだ。これで神様かみさまの有難ありがたい

事が分つただらうな……。オイ、バット、お前はバラモン軍を離れてから、泥棒とまで成下つて居つたが、其間に何か愉快だと思つた事があるか、あるなら其時の感想を私に聞かして欲しいものだ」

バット「ハイ、私が貴師の部下となつて、軍人生活をやつて居りました時には、随分辛うムいましたよ。上官からは頭を抑へられる。又少しく上官のお氣に入らうとして忠実に働けば、同僚に憎まれる。不真面目な阿諛主義の奴は抜擢されて、すぐに自分の上役となり、頭を抑へる。どうも不平で不平で、一日だつて心の安んじた事はありませぬ。そして何時強敵が襲ふて来るかも知れず、さすれば生命を的に戦はねばならず、日夜戦々惴々として月日を送りました」

治道「成程お前の言ふ事は事実だ。私だつて三千の部下を引率をるもの、上には大黒主の神様があり、又同僚もあり、部下もあり、一方に強敵を控へ征途に上る時の苦しさ。口では立派に雄健びをしてゐるものの、心の中では、随分煩悶苦悩の種をまいたよ。そして一戦に味方は無残な最後を遂げる。又仮令敵だと言つても、無残な最後を遂げてゐるのを見れば胸は痛む。イヤ全く地獄修羅畜生の巷

に彷徨う様であつた。治国別様に助けられ、比丘となつた時の心の嬉しさ、始めて広い天地に生れた様な思ひがしたよ

バツト「將軍様は今迄結構なお役だと、私は羨んでみました、ヤツパリ貴師でもさうでムいましたかなア。さうすると世の中に、安心して暮す者は一人もありませんなア」

治道「古人も云つたぢやないか……憂き事の種類こそ変れ世の中に、心やすくてすむ人はなし……此歌は本当に人生の苦しき境遇を歌つたものだ。そして以前泥棒になつて居た時、何か愉快に感じた事はないか」

バツト「ハイ、どうも軍人生活の時よりも一層苦しうムいました。苦しいと云つても軍人ならば毎月きまつてお手当が頂けませんが、泥棒といふ奴ア、資本のいらぬボロイ商売の様ですが、朝から晩まで戦々恟々として、心を苦しめ胸を痛め、

そして中々容易に収入は得られませぬ。仮令少しの金を手に入れようとするにも、戦ひと同様命がけでムいます。それに又何時捕手が出て来るかも知れぬといふ虞があり、飯も酒も満足に喉を通つた事はムいませぬ。只泥棒になつて愉快に感じ

たのは、貴師様にお目にかかり、森林に於て神様のお話を承はつた時と、貴師のお身代りになつて牢獄の中で芝居をした時位、愉快に感じた事はありませぬ。併し乍らそれにもまして愉快な事は、誠の道に猛進し、貴師と共に聖地エルサレムに参拝する途中の嬉しさ 腹も空き喉は渴き、九死一生になつた時、天与の苜を頂いた今の喜びは、生れてから此方、まだ味はつた事がムいませぬ。あゝ惟神靈幸倍坐せ」

治道 「人は何うしても、誠の道に苦勞せなくては、神様の恵も分らず、又飲食物の尊い事も分らぬものだ。サア皆の者、今のバツトの言つた様にお前達も今の恵を愉快に感じただらうのう」

四人は一度に「ハイ」と云つたきり、感謝の涙にくれて居る。忽ち轟然たる響が後方に聞えた。よくよく見れば虎熊山は大爆発を初め、山半分以上は黒煙に包まれ、大火災を起して居る。一同は此の光景を眺め、神の無限の仁慈を涙と共に感謝した。

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 松村真澄録)

第三篇 虎熊惨状とらくまさんじやう

第一三章 隔世談かくせいだん（一六六九）

伊太彦いたひこ 神かみの教をしへの伊太彦いたひこは

初稚姫はつわかひめの訓戒いましめに

恋こひしき妻つまに生いき別わかれ

一人ひとりトボトボ山道やまみちを

いとど烈はげしき炎熱えんねつと

戦たたかひ乍ながら汗あせ水みづに

なりて山野さんやを涉わたり行ゆく

心こころ淋さびしき一人旅ひとりたび

神かみの恵めぐみを力ちからとし

夜光やくわうの玉たまを杖つゑとして

吾師わがしの君きみや妻つまの身みを

案あんじ煩わづらひハルセイの

沼ぬまの畔ほとりに來きて見みれば

人ひとを掠かすむる盗人ぬすびとの

二人ふたりの男をとこに巡めぐり合あひ

神かみの教をしへを説とき諭さとし

おほどろばつ
大泥棒の立籠もる

とらくまやま
虎熊山の岩窟に

つまみこと
妻の命やデビス姫

ふたり
二人の身をば助けむと

のほゆ
登り行く折傍の

はやし
林の中の呻き声

なにもの
何者なるか知らねども

みす
見捨てかねたる義侠心

ちかづみ
近付き見れば暴虐の

かぎ
限りを尽す大泥棒

かしら
ハールが頭に繙帯し

むし
虫の息にて呻きゐる

いたひこたちま
伊太彦忽ち三五の

かみ
神の御名をば奉称し

あま
天の数歌声高く

うた
歌へば不思議や忽ちに

いづ
殿の神徳現はれて

ハールはムツクと起き上り

きうめい
救命謝恩の宣言に

よろこ
喜び勇む折もあれ

エムとタツとの両人は

いたひこつかさ
伊太彦司に打向ひ

ハールの罪悪一々に

の
宣り伝ふれば伊太彦は

まこと
誠の道を説き諭し

ハールを岩窟の案内とし

いき
息もせきせき登り行く

さしも堅固な岩窟の

その入口いりぐちに来て見れば
番人一人居らばこそ

藻抜もぬけの殻からの不思議ふしぎさに
ドンドンと隧道トンネルを

ハール、エム、タツに案内あないさせ
牢獄ひとやの前に来て見れば

豈計あにはからむや治道居士
デビスの姫ひめやブラワゝーダ

改心組かいしんぐみの一同いちどうが
セールの親分真中おやぶんまんなかに

四五しごの小頭取こがしらとり困かこみ
教をしへを垂たるる最中さいちゆうと

悟さとりし時の嬉うれしさよ
案あんじ過すごした吾妻わがつまの

無事ぶじなる顔かほを一目ひとめ見て
抱だきつき度たくは思おもへども

初稚はつわかひめ姫の御教おんをしへ
あたりの人ひとの手前てまへをば

恥はぢらひ苦しくるさ相忍あひしのび
ハールを連つれて只ただ二人ふたり

虎熊山とらくまやまを後あとにして
セルの山辺やまへに来て見れば

神かみの恵めぐみの百ももの花はな
処狭ところせき迄まで咲さき匂におひ

蓮はぢすの花はなは殊ことさら更に
白青黄色しろあをきいんむらさか紫むらさの

艶えんを競きそひてザワザワと
涼すずしき風かぜに翻ひるがへり

笑えみを湛たたへて迎むかへある
あゝ惟かむながら神かむながら々々

吾われは尊たふとき大神おほかみの
御み稜いづ威うを受けて大野原おほのほら

虎とら伏ふす山やま辺へも恙つつがなく
神都みやこをさして進すすみ来くる

心こころの中うちぞ楽たのしけれ
朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも
月つき落おち星ほしは消きゆるとも

印いんど度の海うみはあするとともに
虎熊山とらくまやまは破は裂れして

熔岩ようがん四方よもに降ふらすとも
いかにか恐おそれむ惟神かむながら

神かみに任まかせし吾々われわれは
至いたる所ところに青山せいざんの

媚こびを呈ていして待まてるあり
思おもへば思おもへば有あり難がたし

天國てんごく浄土じやうどの光景くわうけいを
今目いままの辺あたり眺ながめつつ

尊たふとき聖きよき三五あななひの
教をしへの道みちに進すすみ行ゆく

あゝ惟かむながら神かむながら々々
御みたま霊たまのふゆを願ねぎ奉まつる

二抱ふたかかへもあらうといふパインが、
一方いつぱうは山やま、一方いつぱうは野辺のべの細道ほそみちの傍かたはらに、
月つきの傘かさ

をひろ拵ひらげたやうに只ただ一本いっほん聳そびえ立たつてゐる。その松まつの木こ蔭かげに、四し五ご人の男をとこが首くびを鳩あつめて何事なにことか、ヒソビソ話はなしに耽ふけつてゐた。

甲か「オイ、そこら中ちゆうの民家みんかを漁あさつて、葡萄酒ぶだうしゆやいろいろの肴さかなを掠奪りやくだつして来たが、然しかし早はやく帰かへらないと、今夜こんやの結婚けつこんの間に合あはないかも知しれぬぞ。さうすりや又また親おや分ぶんから叱言こごとを頂戴ちやうだいせなならぬからのう」

乙おつ「どれ程ほど急いそいだ所で、之丈これだけの道程みちのりだ。到底たうてい今夜こんやの間に合あひさうな事ことはないわ。

一層いっそうの事こと、酒さけも肴さかなもここにあるから、此松このまつの木きの下したで、一杯いっぱいやらうではないか」

甲か「そんな事ことしたら、それこそ大變たいへんだ。俺等おれたちは直破門すぐはもんされて了しまふぞ。破門はもんだけならいいが、他よそへ出でて喋しゃべると云いつて手足てあしをフン縛しばられ、噴火口ふんくわこうに投なげ入いれられて

見みよ。あつたら命いのちが台だいなしだ。貴様きさまは酒さけを喰くらふとワヤな事ことを云いふから駄目だめだ」

乙おつ「何なに、構かまふものかい。かうして五人ごにん居をれば、一つひとつの村むらでも団体だんたいでも作つくれるから、

あんな高たかい山やまに行ゆかずに、一つひとつ新団体しんだんたいでも拵こしらへて自由行動じゆうかうどうでも採とつたらどうだ」

丙へい、丁てい、戊ぼの三人さんにんは手てを拍うつて、

三人さんにん「イヤ、賛成さんせい、乙おつの言いふ通とほりだ。別べつにセールの大将たいしやうを、さう恐こはがるに及およばぬ

ぢやないか。あんな大将を頭に仰いでると、何時どんな目に会はされるか分りはせぬぞ。あの副親分を見い、あれ文骨を折つて基礎を固めたが、遂に暗打にあつて頭を割つて了つたぢやないか。俺やハールの親分が気の毒で堪らぬわ。その時から岩窟を飛び出さう飛び出さうと思つて居つたのだが、今度大親分が婚禮の材料を集めて来いと出して呉れた時、再び岩窟に帰るまいと覚悟をきめた位だから、マア一杯ここでやつて相談をきめようぢやないか」

甲 「トランスの相談をきめると云つても、別に立派な案も出まいぢやないか」

乙 「喧しう云ふな。俺の云ふ通りにせい。俺はこう見えても餓鬼会社の社長をや

つて居つたものだ。田舎の村ではあるけれど、それでも、ザツと五十軒ばかりの戸主から選まれて村会議員、否村会代議士に一度は当選した男だぞ。何と云つて

も尋常大学の出身者だからな」

丙 「アハ、ハ、ハ、尋常大学が聞いて呆れるわい。村会代議士なんてまだ聞き初め

だ。戸別巡礼をやつて、ヤツとの事で村会議員になつたのだらう」

丁 「何、此奴村会議員どころか、此奴の奉公して居つた主人が村会議員になつて

居つたのだ。その事を云つてるのだよ」

丙「アハ、大方、そんな事だらうと思つて居つた」

乙「馬鹿云ふない。主人がならうと、俺がならうと、同じ一軒の宅に住居してる以上は同じ事ぢやないか。エー、奥さまは村会代議士夫人と崇められてゐる以上は、俺だつて村会代議士家僕だ、主人の心は僕の心、僕の心は主人の心と云ふ事を知らぬかい。訳の分らぬ奴だな」

丙「どちらが訳が分らぬか、本当に分らぬわい。困つた唐変木だな。オイ村会代議士、そんなら一つ案を出して呉れ。その上で賛否の決を与へねばならぬからな」

乙「ヨシ、かう云ふ事があらうと思つて、前から腹案を拵へて待つてゐたのだ。」

まア、こんなものだよ。どうだ賛成だらうな。アハ、

丙「いや、大方賛成だ。然し、宣伝使、比丘に対する条目だけは削除して欲しい

ものだな」

乙 「そら又何故だ。怪しい事を云ふぢやないか」

丙 「宣伝使や比丘は神仏に仕へるものだ。あんな者に向へば、忽ち罰が当り、身体が動けぬやうになるからな」

乙 「アハ、ハ、ハ、気の弱いものだ。宣伝使が何が恐い。身に寸鉄を帯びるでなし、まるで箒で蜻蛉を押へるやうなものだ」

甲 「そんな事云はずに早く帰らうぢやないか」

乙 「矢釜しう云ふない。帰り度い奴はトツトと帰れ。そして親分が二人のナイスをおいて脂下つてゐる所を、ケナリさうな顔して指を喰へて見せて貰へ。それが貴様の性に合うてるわい。ウツフ、ハ、ハ、ハ。これ丈沢山の酒や肴を盗つて来乍ら、又人に取りられるのも残念だ。此松の下で鱈腹喰つて、新団体を組織して活躍するのだ。どうだ丙、丁、戊、賛成だらう」

丙 丁 戊 「賛成々々」

乙 「これ丈け四人まで大多数の賛成があるのに、只一人異議を唱へるのは、俺等の計画を裏切るものだ。エー面倒臭い。一つバラしてやらうかい。之も泥棒の練

習しゆになり肝玉きもたまが据すはつていいぞ〆

甲かふ「オイ、コラコラそんな無茶むちやな事ことを云いふない。俺おれが一口異見ひとくちいけんを唱となへたと云いつて、バラすの何なんのつて、余あんまりぢやないか〆

乙おつ「あんまりも糞くそもあつたものかい。貴様きさまは常平生つねへいせいから大将たいしやうのお髯ひげの塵許ちりばかり払はらひやがつて、俺等おれたちの悪口許わるくちばかり告つげた奴やつだ。サア三人さんにんの兄弟きやうだい、此奴こいつをヤツつけて了しまへ〆

ここに四人よにんは甲一人かふいちにんを取りとりまいて、四辺あたりの棒千切ぼうちぎれを拾ひろひ打ちうちかかつた。甲かふは矢やに庭はに木片きぎれを拾ひろひ、力限ちからかぎりに防禦ぼうぎよに力つとめてゐる。

かかる所ところへ四辺あたりの木精こだまを響ひびかして聞きこえて来たきたのは宣伝歌せんでんかの声こゑであつた。五人ごにんは各自傷めいめいきずだらけになつたまま、その場ばに平太へたつて了しまつた。

ハールは伊太彦いたひこに従したがひ、ここ迄までやつて来て五人ごにんの男をとこが倒たふれてゐるのに不審ふしんを起おこし、わざわざ松まつの木きの根元ねもとに寄より道みちして調しらべて見みると、今迄いままで使つかつて居ゐた五人ごにんの部ぶ

下かであつた。ハールは大喝だいかつ一声いつせい、目めを剥むき乍ながら、ハール「こらツ、者共ものども、何なにを致いたして居をるか〆

甲かふ「ハイ、親方おやかた、よう来て下くださいました。今四人いまよにんの奴やつめ、貴方あなたや大親分おほおやぶんに對たいし、

謀反の相談致しましたので、私が意見しました所、大變に腹を立て、殺してやらうと云つて斯んな目に会はせました。私も力一杯戦ひ、血みどろになつて居ります所へ、恐ろしい宣伝歌が聞えましたので、誰も尻餅をついて身動きが出来ぬやうになつたのです。何卒副親分様、私を助けて下さいませ」

ハール「ア、お前はオスだつたな。そして其処に倒れてゐる奴は、メスにキス、バツタにイナゴだな。こりやこりやメス、キス、バツタにイナゴ、その顔は何だ。ヤツパリ貴様は相変らず泥棒をやらうとするのか。もういい加減に改心したらどうだ。オス貴様も泥棒なんか、悪い事致すでないぞ」

オス「ヘイ、泥棒はもう出来ませぬか」

ハール「ウン、何も彼も新規蒔き直した。虎熊山の岩窟は最早亡びて了ふたのだ。それ故俺も館を焼かれ、居る所が無いので俄に改心して宣伝使のお伴をして、誠の道の旅をしてゐるのだ。貴様もいい加減に泥棒商売は止めたがよからうぞ」

メス「もしもし副親分さま、そりや本当ですか。私は今、貴方には済まないが、あまり親分が横暴な事をやるので、実は愛憎をつかし新団体を組織し、今ここで

定款まで拵へ、発会式を終つた所でムいます。そした所、オスの奴、反対を称へるものだから、此様な時勢に合はぬ骨董品は片付けた方がよいと思ひ、打ち「のめ」さうとした所でムいます。何卒、貴方、私等の団長となつて一旗挙げて下さいますまいかな」

ハール「馬鹿云ふな。泥棒はスツカリ廃業したのだ。ここにムる宣伝使は神力無双の生神様だ。懐に夜光の玉を持つてムるから、貴様等の心の底は手にとる如く御存じだぞ」

メス「ハイ、貴方が本当に廃業なさつたのなら仕方がありません。私等が勝手に小団体を作つて商売繁昌のため大活動を致しますから」

ハール「オイ、やめたらどうだ。そんな事云ふと虎熊山が破裂したらどうする。破裂の前兆として、あの通り噴煙濛々と立上つてるぢやないか。あの鳴動を聞け。俺等仲間が靈山を汚したによつて、山の神様が立腹してムるのだ。貴様もここで改心せなくちや虎熊山の熔岩に押潰されて了ふぞ」

メス「今更泥棒をやめた所で、之と云ふ商売も無し、仕方がありません。人間

は意志の自由を有してゐますから、何卒私の意志迄は束縛して下さいますな。のう、キス、バツタ、イナゴ、さうぢやないか」

三人一度に、

「ウン、さうださうだ、泥棒三日したら味が忘れられぬと云ふから、今更やめいと云つても止められるものかい。俺等も初めから泥棒したくはなかつたが、セー、ハールの親方がすすめたから初めたのだ。折角乍らハール親分の提案には賛成する事が出来ませぬわい」

ハール「左様の事を申してゐると今に虎熊山が破裂し、貴様等は滅亡せなくてはならぬぞ」

メス「ハ、ハ、ハ、ハ、虎熊山は昔古来から噴火してゐますよ。唸るのも鳴動するものも今日に初まつた事ぢやありませんわい。大きにお世話さまです。貴方のやうに泥棒心の俄に無くなるやうな腰抜けには、用はありませんわい」

と身体が丈夫になつたのでソロソロ口強くなり、又もや泥棒至上主義を盛んに述べ立てる。丙、丁、戊三人も川水の流るる如く泥棒の有益なる事をまくし立て、ハ一

ルを手古摺らしてゐる。雲にかすんだ虎熊山の鳴動は俄に猛烈となり、大地はビリビリと震ひ出して来た。流石の四人も真青になつて草に嚙ぶり付いてゐる。轟然たる一発の響と共に、虎熊山は大爆発を来たし、黒煙天に漲り、熔岩は雨の如く、四方に散乱し数里を隔てた此地点迄降つて来た。一同は恐れ戦いて俄に心を翻し、改心の祈願をなし初めた。神の御恵か、雨の如く降り来つた巨大なる熔岩は一人も傷つけずにをさまつて了つた。これより一同は改心の尊き事を悟り、伊太彦の宣伝使に従ひお礼詣りと称して聖地エルサレムへ向ふ事となつた。

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 北村隆光録)

第一四章 山川動乱(一六七〇)

デビス姫 〻 三五教の神司

蔽の教の三千彦が

妻つまとなりたるデビス姫ひめは スダルマ湖うみの岸きし辺へにて
 初はつ稚わか姫ひめの誠いましめを 蒙かうむり茲ここに三み千ち彦ひこと
 互たがひに袂たもとを別わかちつつ 山やま川かは渡わたり野の路ぢを越こえ
 深ふか霧ぎり包つつむ谷たに道みちを 潜くぐりて漸やうやく虎とら熊くまの
 山やまの麓ふもとの密みつ林りんに かかると折をりしも岩がん窟くつに
 巢すを構かまへたる泥どろ棒ぼうの 手て下したの奴やつに囚とらへられ
 縛いましめられて岩がん窟くつの 牢いとや獄なの中なかに投なげ込こまれ
 セールの曲まがの横よこ恋こ慕ぼ 朝あさな夕ゆふなにつまき纏まとふ
 其そのうるささを科し戸な辺への 風かぜ吹ふき払はらふことごとの如ごと
 巖いづ言こと霊たまの限かぎりをば 尽つくして曲まがを逐おひ除のけつ
 清きよき操みさをを保たもちけり かかると所ところへブラワゝーダ
 姫ひめの命みことも隣りん室しつに 悪あく魔まの擒とりことなり果はてて
 苦くるしみ居あるを悟さとりしゆ 以い心しん伝でん心しん歌うたをもて
 互たがひに心こころを通かよはせつ 救すくひの神かみの出いでますを

神に祈りて待つ内に
又もや入り来る治道居士

牢獄の中にありますと
聞くより心勇み立ち

心も清きヤク、エール
二人を密に使とし

作戦計画打ち合せ
三人の身代りこしらへて

漸く牢獄を逃れ出て
時を計らひセールをば

改心させむと思ふ折
岩窟の中をとどろかし

響き来れる宣伝歌
夜光の玉を携へし

珍の司の伊太彦が
救援隊と知るよりも

蚊竜忽ち時を得て
天に上りし其如く

互に力を協せあひ
セール其他を言向けて

醜の岩窟に火を放ち
又もや此処に治道居士

伊太彦司ブラワ、ーダ
をしき別れを告げながら

神の教を相守り
いとも淋しき山路を

妾は女のただ一人
神を力に進み来る

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神は吾等かみ われらと共にありとも

天地はすべて皇神すめかみの 守まもらせたまふ懐ふところぞ

まことの道みちに叶かなひなば 仮令たとへひやくせんまんおく百千万億の

虎狼とらおほかみや曲津神まがつかみ 醜しこの大蛇をろちの現あらはれて

行手ゆくてにさやる事ことあるも 何かなには恐れおそむ敷島しきしまの

大和御霊やまとみたまの神かみの御子みこ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月は盈みつとも虧かくるとも 仮令たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まことの力は世よを救すくふ 誠まことは此世このよの御宝おんたから

夜光やくわうの玉たまや如意宝珠にょいぼしゆ 黄金こがねの玉たまの其光そのひかり

如何いかに奇くすしくあるとても 直日なほひの靈たまの御光みひかりに

比くらぶる宝たからあらざらめ 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも広ひろき大直日おほなほひ 直日なほひの御霊みたまを經たてとなし

巖いづの御霊みたまを緯ぬきとして 瑞みづの御霊みたまの大神おほかみの

珍うづつの教をしへを伝つたへ行く 吾等われらは清きよき宣せん伝でん使し

三千彦司の妻なれば
如何でか道に迷ふべき
正義に刃向ふ刃なし
仁慈の太刀を抜きかざし
信仰の楯を身に帯て
生言霊を打ち出し
寄せ来る曲を言向けつ
国治立の大神の
いや永久に鎮まれる
貴の都に進むべし
あゝ惟神々々
守らせ玉へ一人旅
恵ませ給へ吾が魂
偏に願ひ奉る

斯く謡ひ、とある山の裾を進む折しも、轟然たる大音響と共に、背後にあたる
虎熊山は俄に爆発し、熔岩を降らし、山野の樹木、禽獣を傷つけた。デビス姫は
此爆音に思はず知らず立ち止まり、後ふり返り眺むれば、満天墨を流したる如く、
空翔つ鳥はバタリバタリと地上に落ちて来た。デビス姫は一生懸命に神言を奏上
し、一時も早く熔岩の雨の止まらむ事を祈願し始めた。そこへ何者かの悲しげな
声が聞えて来た。よく見れば傍の叢に、尾の半分許り白い野狐が、熔岩の断片に

臀部を打たれて、もだえ苦しんで居る。デビス姫は見るより野狐の前に走り寄り、両眼に涙を浮かべながら、天津祝詞を奏上し、且つ親切に四辺の土を掘起し、唾をつけ、臀部の岩片をえぐり出し、傷痕を埋て、労はつた。野狐は頻りに頭をさげ、尾を幽かにふつて感謝の意を表はしてゐる。暫くすると野狐はむつくと起き上り、足をチガチガさせ乍ら、後ふりかへり、ふりかへり、身の丈にも余る茅草の中に隠れて行く。

デビス姫 虎熊の山は俄に破裂して

艱ましにけり野狐の身までも。

草も木も鳥も獣も虎熊の

猛き唸りに恐れ戦く。

獅子よりも虎熊よりも恐ろしき

彼の爆音に天地ふるひぬ。

皇神の教へ給ひし現世の

あらたまり行くしるしなるらむ。

野の山も熔けたる岩や火山灰

被りてふるふ今日ぞ淋しき。

人は皆皇大神の生宮と

ほこれど今は顔色もなし。

虎熊の山の荒びにあらし野の

虎熊獅子もふるひ戦く。

三千彦の珍の司を禍に

合はせたまひそ是の艱みに。

玉国別教司の身の上を

俣びけるかな此爆発に。

ブラワゝーダ姫の命は幼ければ

ひやしたまはむ小さき胸を。

治道居士この爆音を聞きまさは

勇^{いさ}みたまはむ法^ほ螺^らを吹^ふきつつ。

法^ほ螺^らの音^ねはいとも大^{おほ}きく聞^きゆとも

虎^{とら}熊^{くま}山^{やま}に及^{およ}ばざるらむ。

初^{はつ}稚^{わか}姫^{ひめ}伴^{とも}ひたまふスマートの

吠^{ほえ}猛^{たけ}る声^{こゑ}俣^{しの}ばるるかな。

虎^{とら}熊^{くま}の此^{この}爆^{ばく}音^{おん}を耳^{みみ}にして

勇^{いさ}みたまはむスマートの君^{きみ}。

野^のも山^{やま}も怪^{あや}しき霧^{きり}に包^{つつ}まれぬ

虎^{とら}熊^{くま}山^{やま}の伊^い吹^{ぶき}なるらむ。

古^{いにしへ}のエトナの山^{やま}の噴^{ふん}火^{くわ}より

いと恐^{おそ}ろしき虎^{とら}熊^{くま}の山^{やま}。

言^{こと}霊^{たま}別^{わけ}神^{かみ}の命^{みこと}のあひましし

百^{もも}の艱^{なや}みを俣^{しの}ばるるかな。

エトナ山^{さん}震^{ふる}ひ出^{いだ}して地^ちの上^{うへ}は

大水おほみづあふれ風かぜ吹ふきまくる。

救すくひをば叫さけび悲かなしむ民たみの声こゑも

この爆音ばくおんに聞きえずなりぬ。

東ひむがしの山やまの御空みそらを眺ながむれば

日は落おち月つきは後あとに輝かがやく。

盗人ぬすびとのたて籠こもりたる高山たかやまを

破やぶらせにけむ神かみは怒いかりて。

虎熊とらくまの生血いきちを絞しぼる岩窟がんくつも

火ひの洗礼せんれいを受うけて清きよまる。

噴火ふんくわのみか山やまの尾上をのへに山潮やましほの

みなぎりおつる様さまぞ恐おそろし。

熔岩ようがんを数多あまた噴ふき出いで四方よも八方やもの

人ひとの命いのちをやぶらむとしぬ。

爆発ばくはつの後あとの山地やまつちひきならし

太ふとしく立たてむ神かみの宮居みやゐを。
日ひも月つきも皆みなみあらかに納をさまりて
常夜とこよの暗やみを照てらしたまはむ』

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 加藤明子録)

第一五章 饅頭塚まんぢゅうづか (一六七—)

ブラワゝーダひめ姫わが 吾背せの君きみに従したがひて 父ちちと母ははとに生別いきわかれ
スーラヤ湖こすい水を打うち渡わたり エルの港みなとに安着あんちやくし
初稚はつわかひめ姫しんじんの神人いましに 誠まことめられて唯ただ一人ひとり
恋こひしき夫をつとに生別いきわかれ 歩あゆみもなれぬ旅たびの空そら

草鞋わらぢに足あしを喰くはれつつ
夜よを日ひについで山やまを越こえ

幾多いくたの谷たにをうち渡わたり
ハルセイ湖うみの畔ほとりまで

来きかかる折をりしも盗人ぬすびとの
群むれになんなく捉とらへられ

名なもおそろしき虎熊とらくまの
曲まがの岩窟いはやに連つれ往ゆかれ

昼尚ひるなほ暗くらき岩窟がんくつの
牢獄ひとやの中に囚とらはれて

吾身わがみの不運ふうんをかこつ折をり
隣となりの牢獄ひとやにデビス姫ひめ

囚とらはれ居あますと悟さとりしゆ
気きの毒どくなりと思おもへども

何なんとはなしに気きも勇いさみ
地獄ぢごくで仏ほとけにあひしごと

心こころは俄にはかに輝かがやきぬ
かかる所ところへ治道居士ちだうこじ

夢寐むびにも忘れぬ伊太彦いたひこの
吾背わがせの君きみが現あらはれて

醜しこの身魂みたまをことごとく
生言靈いくことたまにまつるはし

妾二人わらはふたりの命いのちをば
救すくひたまひて一言ひとことの

情なさけの言葉ことばもかけずして
再びふたたび神かみの大道おほみちに

進すすませたまひし雄々ををしさよ
又またもや妾わらはは唯一ただひとり人

神の教を白雲の 国のあなたに伝へむと
炎熱はげしき大野原 虻には刺され土蜂に
脅かされて漸うに セルの山辺に来て見れば
俄に四辺暗澹と 不快の空気に包まれぬ
唯事ならじと神の御名 ただ一心に唱へつつ
千花の香る山路を 進み来れる折柄に
大地は俄に震動し 後に聞ゆる爆音は
獅子狼か虎熊か 但しは大蛇の襲来か
百千万の雷の 一度に落ちし如くなる
其音響に振りかへり 空を仰いで眺むれば
豈計らむや昨日まで 醜の曲津に捉はれて
苦しみ居たる思出の 印象深き雲の山
虎熊岳の爆発と 悟りし時の恐ろしさ
身の毛はよだち足はなへ 進み兼ねたる女気の

何と詮方泣く涙

止めかねたる許りなり

漸く心も安らぎて

胸の動悸も鎮静し

足も漸くすこやかに

なりし吾身の嬉しさよ

此世に神の居まさずば

此恐ろしき爆音に

妾は清き玉の緒の

命も消えて失せましを

尊き神の御恵

仰ぐも畏き次第なり

あゝ惟神々々

御霊幸倍ましませよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

仮令夫に離るとも

真と神の御教は

幾千代迄も離れまじ

さはさりながら皇神よ

吾背の君の行末を

やすく守らせたまひつつ

ハルナの都の空高く

月の顔花の色

夫婦の再会恙なく

許させたまへ大御神

一重に願ひ奉る

あゝ惟神々々

神かみの教をしへぞ尊たふとけれ

神かみの恵めぐみぞ有ありがた難がたき〆

斯かかる所ところへ足あしをチガチガさせた一匹いっぴきの野狐のぎつね現あらはれ来きたり、ブラワゝーダの裾すそを喰くはへて無理無むりむたい体に草野くさのの中なかに引張ひっぱらうとする。ブラワゝーダは驚おどろいて逃にげむとすれど、野狐のぎつねは執念しふねん深く裾すそを喰くへ如何いかに藻搔もがいても放はなさないのので、ブラワゝーダは止やむを得えず、野狐のぎつねに引ひかるるまま、身みの丈たけを没ぼつする草野くさのの中なかへ従ついて往ゆく。野狐のぎつねは原野げんやの中なかに饅頭形まんぢゆうがたになつて居ゐる丘をかの傍かたはらの、可かなり大おほきな穴あなに引張ひっぱり込こんで了しまつた。暫しばりくすると山岳さんかくも崩くづる許ばかりの大音響だいおんきやうが聞きえた。これは、虎熊山とらくまやまの爆発ばくはつによつて、山やまの神かみとして古ふるくより身みを潜ひそめて、世界せかいに邪氣じやきを送おくりつつあつた八大竜王はちだいりうわうの一ひつつ、マナスインナーガラシヤーであつた。此竜王このりうわうは身みの長ながさ五百万ごひやくまんぢやう丈ちやうに余あまり、其太そのふとさもそれに適てきたう当たうし、三百万さんびやくまんぢやう丈ちやうの恐おそろしき竜神りうじんである。身体しんたい長大ちやうだいにして、九天きうてんの上うへに昇のぼり、或あるひは須弥仙しゆみせんを廻まはること七廻ななまはりと称しょうせられ、よく大海だいかいの水みづを止とめて、海かいちう中に山やまを湧出ゆうしゆつさせ、或あるひは島しまを沈没ちんぼつさせると云いふ恐おそろしき悪竜あくりうである。今いまや竜神りうじんは、ブラワゝーダが隠かくれて居をる野狐のぎつねの穴あなの上うへを、身体しんたいの一いちぶ部ぶが通とほつて居をるのであ

る。俄にはかに穴あなの中なかがパツと暗くらくなつたと思おもへば、何なんとも云いへぬ腥臭なまくさい息いきが鼻はなを襲おそふて来たき。野狐のぎつねは穴あなの口くちにうづくまつて姫ひめの安全あんぜんを守まもつて居ゐた。俄にはかに再びふたたび穴あなの中なかが明あかくなつたと思おもへば、野狐のぎつねは忽たちまち又またブラワゝーダの裾すそを喰くはへて外そとへ引ひき出ださうとした。ブラワゝーダは引ひかるるままに外そとに出でて見みれば、四辺あたりの草木さうもくは皆倒みなたふれ目めも届とどかぬ許ばかりの広ひろい草くさの溝みぞが穿うがたれたやうになつて居ゐる。ブラワゝーダは野狐のぎつねに向むかひ感謝かんしゃの意いを表へうして、

ブラワゝー 『吾命わがいのちたす助たすけたまひし汝なが命みこと

其御恵そのみめぐみをいつか忘わすれむ。

汝なんぢなくば吾われはあへなく身失みしうせなむ

命いのちの親おやの野狐のぎつねの生神いきがみ』

と歌うたふや、野狐のぎつねは尾をを振りふり、首くびを振りふり、喜よろこびの色いろを現あらはし、再びふたたび元もとの山道やまみちへと送おくつて来たき。

ブラワゝーダ姫ひめ「いざさらば恋こひしき君きみに別わかれなむ

やすくましませ千代ちよに八千代やちよに」

野のぎつね狐ねは再ふたたびび草原くさはらに姿すがたを隠かくした。ブラワゝーダは後あと振ふりかへり、天てんに冲ちうする虎熊とらくま山の噴煙ふんえんを眺ながめて、

ブラワゝ「仰あふぎ見みれば虎熊山とらくまやまの空高そらたかく

おほひけるかな醜しこの黒雲くろくも。

天津日あまつひもかくれて見みえぬ世よの中なかに

醜しこのまがみの独ひとり荒すさべる。

世よの人の生血いきちを絞しぼる曲まがこそは

虎熊山とらくまやまに住すみしなるらむ。

皇神すめかみの怒いかりに触ふれて高山たかやまは

爆発ばくはつしけむさても恐おそろし。

ひとびと 恨を 集めて 噴火口

吐き出す煙は空を覆へる。

西東南も北も黒雲に

包まれてけり今日の大空。

いづみたま瑞の御霊のなかりせば

此黒雲を如何に払はむ。

荒鉄の地に洪水氾濫し

空に黒雲立ちふさぎける。

黒雲を伊吹払ひて紅の

光をみする巖の大神。

濁流をながし清めて神国の

昔にかへす瑞の大神。

火と水の恵によりて地の上も

いと安らけく開けゆくらむ。

日はかくれ月は山辺に戦きて

星さへ見えぬ御世ぞうたてき。

大空も谷の底ひもおしなべて

雲霧ふさぐ今の世の中。

巖御霊瑞の御霊のなかりせば

砕けたる世を如何に固めむ。

ブラワゝーダ吾はかよわき身なれども

瑞の御霊に従ひゆかむ。

高山に生ふる諸木は荒風に

揉まれて柱になるものはなし。

足曳の深山の奥の谷底に

生ふる大木ぞ世の柱なる。

皇神の作りたまひし世の中は

神より外に頼るべきなし。

よしやよし人は高きに登るとも

いつかはおちむ猿の木登り。

千丈の滝よりおつる水音は

ただ轟々と底にとどろく。

飛ぶ鳥も虎熊山の震ひてゆ

征矢の如くに地におちにけり

かく歌ひてブラワゝ一ダ姫は又もや小声に宣伝歌を謡ひ乍ら、杖を力に、トボと雑草茂る小径をわけて、西へ西へと進み行く。

霞の奥雲のあなたに皇神の
黄金の宮の見ゆる嬉しさ。

(大正一二・七・一六 旧六・三 於祥雲閣 加藤明子録)

第一六章 泥足坊(一六七二)

神かみの教をしへの三千彦みちひこが スダルマ湖こすい水の西岸せいがんに

無事ぶじ安着あんちやくの折をりもあれ 初稚はつわかひめ姫ひめのあれまして

三五教あななひけつの宣伝せんでんは 同行どうかうならぬと手て厳きびしく

いましめられて是ぜ非ひもなく 伴ともなひ来きたりしデビス姫ひめ

涙なみだとともに袂たもとをば 別わかちて一人ひとりスタスタと

姫ひめの身みの上案うへあんじつつ ハルセイ山ざんの峙たつげをば

半登なかばのぼりし折柄をりからに 道みちのかたへに悲かなしげに

倒たふれて泣なける女をんなあり 何人なにびとならむと立寄たちよつて

つらつら見れば此は如何に
年は二八の花盛り
伊太彦司が最愛の
ブラウ「ダ姫と覚りしゆ
労はり助け介抱し
厚き情にほだされて
胸に焰の炎々と
立上りたる苦しさに
心は同じ恋の暗
月下に抱き泣きみたる
時しもあれやデビス姫
ここに突然現はれて
心の迷ひを説き明かす
二人は恋の夢さめて
汚れし心を悔悟なし
詫ぶればデビスに非ずして
木花姫の御化身
尊き神の御試しに
会ひし二人の胸の裡
可憐の乙女を振棄てて
人跡稀な山径を
只スタスタと登り行く
ハルセイ山の峰を吹く
嵐に裾をば煽られて
足もトボトボ頂上に
上りて見れば三人の
見知らぬ男が朧夜の
木蔭にひそみ何事か

声高々と話し居る
三千彦心に思ふやう

これぞ全く山賊の
往来の人を待ち構へ

宝を奪ふその為
よからぬ事の相談を

なし居るならむと傍の
木蔭に腰を打卸し

様子如何にと聞き居たる。

甲「オイ、随分恐ろしかったぢやないか。今通つた奴は、一体ありや何だらうな。

何程勇気を出して呼びとめようと思つても、あまり先方が大きな男だものだから、

怖気がついて、自然に身体が慄ひ、どうする事も出来なかつたのだ。あんな奴に

出会ふと泥さまもサツパリ駄目だのう」

乙「うん、彼奴ア何でもデーダラボツチに違ひないぞ。大きな法螺貝の様な声を

出しゃがつて、四辺の山や谷を響かして通りやがつた時の怖さと云つたら、体が

縮まる様だつた。鞆丸は、何処かへ転宅する。心臓院の庵主さまは荷物を引担げ

て遁走する。肺臓院の半鐘は急を訴へる。五臓郡六腑村の百姓は鍬を担げて逃げ

出す。本当に小宇宙の君子国は、地異天変の乱痴気騒ぎだつたよ。その結果、俺の顔まで真青になつて了つたよ」

丙「ハ、ハ、ハ、ハ、弱い奴だな。あんな小さいデーダラボッチがあるかい。デーダラボッチと云へば大道坊とも泥足坊とも別称して、スメール山を足で蹴り倒し、印度の海を埋めようとするやうな大道者だ。俺達の大道路坊とはチツとは選を異にしてゐるが、然し乍ら今通つた奴は屹度比丘に違ひないぞ。貴様の目はあんまり、びつくりして目の黒玉が転宅して、白目許りになり、視神経の作用で、さう大きく見えたのだらう。大きいと云つても八尺位のものだ。キツト彼れは軍人上りの比丘に違ひないわ。疑心暗鬼を生ずと云つて、恐い恐いと思つてるから、そんな幻映を生じたのだ。チツとしつかりせぬと此商売は駄目だぞ」

乙「成程比丘かも知れぬ。体中が比丘々々しよつた。ハルセイ峠の二度ビツクリと云つて、如何に聖人君子の泥棒さまでも、此峠丈けは一度や二度はビツクリする事はあると、昔から定評があるのだ。三五教の宣伝使が「胸を据ゑ、腹帯を締め居らぬと、ビツクリ箱が開くぞよ、今にビツクリして目まひが来るぞよ。フ

ン延びる人民沢山出来るぞよ」と謡ひもつて通りよつた。チとビツクリに慣れて置かぬと、吾々の商売は真逆の時に、十二分の活動が出来ぬからのう。何と云つても貴様等二人は新米だから仕方ないわ」

甲「オイ、何は兎もあれ、今晚はテンと仕事がないぢやないか。折角香ばしさうな奴が来たと思へば、吾は伊太彦宣伝使なんて、肝玉の飛び出る様な声で通つて了ひやがる。今度は四五人の足音がしたので一働きやらうと思ひ、捻鉢巻で木蔭に潜んで居れば、デーダラボツチのやうな比丘が通りやがる。本当に怪体が悪いぢやないか。俺達のやうな新米は到底あんな奴にかかったら駄目だ。年の若い、足の弱い、女でも通りよると、都合が宜いだけだなア」

乙「さうだ。俺達は人間相手の商売だ。人間は男許りぢやない。爺も婆もある。時には若い女もあるだらう。小口から無理に手を出すと失敗るから、マアよい鳥が来る迄、ここで待つのだな」

甲「待つ身につらき沖の舟」

ほんに遣る瀬がないわいな

チ、ツ、シヤン シヤン シヤン

アツハ、、、、

丙 馬鹿、何を惚けてゐるのだ。千騎一騎ぢやないか

甲 何、歌でも謡つて肝玉を錬つて大きくしてるのだ。英雄閑日月あり、綽々と

して余裕を存する事大空の如しだ

乙 へん、よう仰有りますわい。鮫鯨の様な口から阿呆らしい、そんな歌がよく

謡へたものだ。貴様の口つたら丸で河獺の様だぞ。貴様が飯を喰ふ時は、狐のや

うに口を尖らし、鼻が曲り、顔一面が丸で馬のやうに躍動するんだからな。そし

て頭許り無茶苦茶に動かしやがつて、額口から上が縦に振動くと云ふ怪体な御面

相だから、泥棒の嚇し文句もサツパリ駄目だ。驚く処か向ふの方から笑つてかか

るのだもの、飯食ふ時ばかりか、一言喋つても顔中が縦横十文字に躍動すると云

ふ、珍な代物だからサツパリ駄目だ。一層の事、貴様は泥棒を廃して、ハルナ

の都みやこの裏町うらまち辺へんで小屋者こやものとなり、顔芸かほげいでもしたら、人気にんきを呼よぶかも知しれないぞ。

八はち、八はち、八はち、八はち」

甲かぶ「コリヤ、こんな山やまの上うへで人ひとの顔かほの棚卸たなおろしばかりしやがつて、あまり馬鹿ばかにするな。之これでも泥棒どろぼうさまとして、相手あひてによつては睨にらみが利きくのだ。マア俺おれの過去くわこは咎とがめず、将来しやうらいの活動くわつどうを見てをれ。「あんな者ものがこんな者ものであつたか」と申まをして、貴様等きさまたちがビツクリするやうな大事業だいじげふをして見みせるわ」

乙おつ「ヘン、御手並おてなみ拝見はいけんした上うへで、その業託ごふたくは聞きかして貰もらはうかい」

三千彦みちひこは三人さんにんの話はなしを、木蔭こかげに潜ひそんで面白おもしろがつて聞きいてゐた。

三千彦みちひこ（独言ひとりごと）「然しかし乍ながらブラワ、一いちダ姫ひめは後あとからここを上のぼつて来くるに違ちがひない。屹度きつと此奴等こいつら三人さんにんの為ために裸体はだかにしられ、凌辱りやうじやくを受けうるかも知しれないから、ブラワ、一いちダさまが無事ぶじ、ここを通過つうくわする迄まで、此木蔭このこかげに潜ひそんで待まつて居をらう。もし事急こときふなりと見みれば、デーダラボツチだと云いつて嚇おどかして散ちらしてやれば宜よいのだ。うん、さうださうだ」

と一人ひとり頷うなづき乍ながら息いきをこらして控ひかへてゐる。

折をりから細ほそいやさしい女をんなの宣伝歌せんでんかが聞きえて来きた。泥棒連どろぼうれんは耳みみを澄すまして無言むじごんの儘まま、
様やうす子を窺うかがつてゐる。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 北村隆光録)

第一七章 山嵐やまおろし〔一六七三〕

ブラワゝーダ姫ひめ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立別たてわける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも広ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

詔直のりなほし行ゆく神かみの道みち スダルマ湖うみを打渡うちわたり

山野やまのを越こえて漸やうやくに ハルセイ山さんの峠たうげをば

半なかば登のぼれる折をりもあれ 行き疲つかれたる足弱あしよわの

忽ち大地に打倒れ
進退ここに谷まりて

息たえだえになりし時
仁慈無限の大神の

道の司の三千彦が
現はれまして危難をば

救はせ給ひし嬉しさよ
その真心にほだされて

忽ち眼相晦み
燃ゆる情火の消し難く

已に危く貞操の
破れむとするその時に

天教山にあれませる
木花姫の御化身

デビスの姫と現はれて
深き教を宣り給ひ

ここに二人は夢覚めて
惜しき袂を分ちつつ

男の足のいと早く
三千彦司は出でましぬ

妾は後に只一人
踏みも習はぬ旅の空

険しき阪をやうやうに
攀登り行く苦しきよ

三五教の大御神
繊弱き妾を憐れみて

一日も早く吾夫の
御顔を拝ませ賜へかし

御空は高く限りなし

大地は広く極みなし

これの天地の人草の

数限りなく住むとても

妾が身魂を生かしまし

慰め給ふ生神は

たつた一人の伊太彦ぞ

あゝ惟神々々

守らせ給へ今日の旅

ハルセイ山の阪道は

昼と夜との区別なく

醜の盗人出没し

旅人を掠めなやますと

聞いたる時の驚きは

小さき女の腸に

驚異の波を打たせけり

さは去り乍ら吾々は

天地を造り給ひたる

絶対無限の神様の

大道を進み行くものぞ

誠心を立貫いて

正しき道を進むなら

如何なる仇も枉神も

いかで一指を染め得むや

あゝ惟神々々

御霊の恩頼を願ぎ奉る

頂いただきの彼方かなた此方こなたに、薄うすい霧きりの上うへから浮ういて現あらはれてゐる光景くわうけいを眺ながめ、
ブラワゝーダは峠たつげの頂いただきに漸やうやく登のぼりつめ、朧おぼろ月つき夜よながら眼がん下かに並へい立りつ連れん峯ぼうの

ブラワゝーダ姫ひめハルセイの峠たうげに立たちて眺ながむれば

四よ方もの山やま々やま真ま下したに見みえける。

霧きりの海うみに浮うかべる山やまの頂いただきは

神かみの造つくりし家いえかと思おもふ。

三千彦みちひこの神かみの司つかさに助たすけられ

漸やうやく頂そら上らに着つきにけるかな。

大空おほそらに月つきはませども村肝むらきもの

心こころにかかると雲くもにかくれつ。

伊太彦いたひこの吾背わがせの君きみは如何いかにして

これの山路やまぢを越こえましにけむ。

治道ちだう居士こじ吹ふき立たて給たまふ法螺ほらの音ねも

聞えずなりぬ遠く行きけむ。

淋しさは吾身に迫り来るなり

人影もなき山の尾の上は。

天地の神の恵に包まれし

吾身なれども心淋しき。

いざさらば暫し芝生にやすらひて

駒立て直し下り進まむ

と疲れた足を休むべく芝生の上に腰打掛け、天の数を歌ひ合掌して居る。

四辺の木蔭からバラバラバラと現はれし三四の泥棒、ブラワゝーダの前に立塞

がり、甲は顔中を縦横十文字に振り動かせ乍ら、

甲（卑怯な声）「コ、コ、コレ、女の夕、旅人、ド、どこへ行くのだ」

ブラワゝゝハイ妾は神様の御用でエルサレムへ参拝を致し、月の国の都へ進む女

でムいます」

甲「ナ、何だ。月の国へ行く？　へん、小女ツちよの態をして、只一人、そんな処へ無事行けると思ふか。コレヤ、おれをド、どなたと心得てる。天下晴れてのデーダラボツチ……ウントドツコイ、大道路妨様だぞ」
折から中秋の月は雲を押し分け下界を照らし給ふと共に、珍妙な甲の顔はパツと姫の前に展開した。

ブラワ「ダは可笑しさに堪へきれず、」プツフ、と吹き出した。

甲「オイ、小女ツちよ、何が可笑しいのだい」

ブラワ「ダは到頭悪胴を据ゑて了つた。」

ブラワ「ホ、あ、あ、あ、あのまア、馬とも猿とも化物とも分らぬやうな顔わいのう。ハルナの都へでも捕獲して持つて行つて、動物園にでも売つたら金儲けが出る来るだらう。あ、良いものが見付かった。コラ妖怪、妾が今に生捕つてやるから神妙に手をまはしたが宜からうぞや」

甲「オイ、キヨキヨキヨ兄弟、此奴ア仲々度胸の太い女だぞ。バ、バ、化物ではあるまいかな」

乙「コリヤ、ヤイ、女の分際として、七尺の男子に向つて暴言を吐くとは何事だ。此方は泥棒様の親分だ。綺麗サツパリと持物一切を投出し真裸となれ。四五と申して六でもない事を七べるに於ては此方の鉄腕によつて八々と張り倒し、九々首引抜いて、生命を十々取つて了ふぞ。さア最早百年目だ。千万言を費して、弁解しても聞く耳もたぬ此方、素直に往生致すが宜からう。さすれば貴様の親讓りのサツク文は助けてやらう」

ブラワ「ホ、ホ、ホ、ホ、アタ甲斐性のない。荒男が繊弱き女の一人を捉まへて、嚇しの文句を並べるとは、話にならぬ腰抜けだな。お前も定めて両親があるだらう。こんな厄雑ものを生んだ親の顔が見たいものだわ。あのまア、情ない顔わいのう。空威張りばつかりして体中が慄ふてるぢやないか」

甲「ナ、ナ、何分商売に慣れぬ新米だから、チ、チ、些とは慄ふのも当然だ。お前だつて初めて男に接した時は慄ふだらう。何と云つても今が初陣だから、さう見さげたものぢやないわい」

丙「コリヤ兩人、何と云ふ……貴様は腰抜けだ。さア之から俺が一つ取ツ詰めて

やらう。俺の遣り口を貴様見てゐるのだぞ」

と云ふより早く鉄拳を固めて、女の横面をポカツと殴りつけようとした。ブラ

ワゝーダは手早く身を竦めた途端に足をさらつた。何条以て堪るべき、二つ三つ

筋斗打つて、急勾配の坂道へ四五間斗り転げ込み、額をしたたか打つて、ウンと

云つたきり、平太つて了つた。ブラワゝーダは此態を見て勇氣頓に加はり、

ブラワゝーホ、、、、、泥棒の親分か知らぬが、随分弱いものだな。オイ、そこ

な小童ども、お前達も一つ抓んで放つてやらうか」

甲「ナ、、、、、何を吐すのだい。こんな所で猫かなんぞの様に、抓んで放られて堪

るかい。オイ、手をつないでくれ。さうすりや、何程強い女でも、滅多に投げる

氣遣ひはないから」

乙「ソ、、、、、それよりも逃げるが勝だ」

甲「ニ、、、、、逃げるると云つたつて、交通機関が命令を聞かぬぢやないか」

と体をガタガタ、足をワナワナ、唇を紫色に染て戦いてゐる。
ブラワゝーホ、、、、、泥棒と云ふものは、もう些と氣の利いたものかと思つたら、

弱いものだな。それもさうだらう。なすべき事業が沢山あるのに、何一つようせぬ無器用な、甲斐性のない代物だから、働かずに人の物を掠めて露命を繋がうと云ふ奴だもの、気骨のあるものは、有り相な道理がない。扱も扱も可憐さうなものだな。こりや二人の泥棒、お前も一つ改心せい……。と云つても出来まいが、せめて泥棒だけは止めたがよからうぞ。こんな事を致して居ると、終ひには生命もなくなつて了ふぞや」

乙「ハイ、もうこれ限りで泥棒はやめます。何卒御機嫌よう、ここをお通り下さいませ」

ブラワ、一ダ姫「初めての旅路に出でて初めての

小盗人等に初めて遭ひぬ。

いざさらば小盗人達別れなむ

心改め善にかへれよ」

甲乙一度に、

「盗みする心はもとより無けれども

命惜さに迷ひぬるかな。

今よりは仮令死すとも盗人は

孫の代まで致しますまい」

傍の密樹の蔭より四辺に響く男の声、

「ブラワゝーダ姫の命よ逸早く

下り行きませ阪三千彦を」

ブラワゝーダ姫「音に聞く険しき峠の坂三千を

彦々として下り行かましひこひこくだゆ

と答へ乍ら又もや宣伝歌を謡ひつつ次第々々に遠ざかり行く。三人の泥棒は転け
つ輓びつ、林の中に姿を隠した。

三千「アハ、ハ、ハ、ハ、悪と云ふものは、正義の前には弱いものだな」
(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 北村隆光録)

第四篇 神仙魔境しんせんまきやう

第一八章 白骨堂はくこつだう (一六七四)

三千彦は、山野を涉り谷を越え、漸くにして仙聖山の阪道に取りかかった。これは仏者の云ふ所謂十宝山の一つである。さすがアルピニストの三千彦も、長途の旅に疲れ果て、仙聖山の頂を眺めて吐息をついて居る。

三千「あゝ漸く此処迄山野を渡り、やつて来たものの、何処かで道を取り違へ、仙聖山の方へ来て仕舞つたやうだ。どこにも家は無し、声するものは鳥の声と獣の声ばかりだ。実に淋しい事だわい。三千彦は健脚家だと、玉国別様に褒められたが、かう酷い山阪を当途もなしに跋涉しては、もはや弱音を吹かねばならなくなつて来た。二つのコンパスは何だか硬化しさうだ。どこか此処辺でよい雨宿りがあれば息を休め運を天に任して、月の国の名山を跋涉し山頂から見下ろし、エルサレムの方向を定めて往く事にせう。それについてもデビス姫、ブラワ、一ダ姫は織弱き女の足、定めし困難して居るだらう、併し乍らブラワ、一ダ姫はハルセイ山で泥棒に出逢つた時の度胸、実に見上げたものだった。あれだけの勇気があれば、屹度無事に往くであらう。夫れよりも今は自分の体を大切に、往く所迄往かねばなるまい。どこかよい木蔭があれば休む事にして、まだ日の暮に間

もあれば一つ登つて見よう

と独りごちつつ、形ばかりの細い道を、右に左に折れ曲りつつ登りゆく。

日は漸く高山の頂にさしかかり、大きな影が襲ふて来る。道の傍に一つの白骨

堂が立つて居る。三千彦はつと立ち留まり、

三千「ハテ不思議だ。こんな所に白骨堂が立つて居る以上は、此の山の上に人の

家が立つて居るだらう。先づこの堂のひさしを借りて、今宵一夜を過ごさうかな

ア

と言ひつつ俄に勇気を鼓して、細い天然石の階段を登り白骨堂に近づいた。見れ

ば一人の女が細い声を出して何事か祈つて居る。三千彦は訝かりながら足音を忍

ばせ、白骨堂の密樹の蔭に身を潜ませ、女の祈りを聞いて居た。

「
憐れ憐れ吾命白く荒廃せり

愁へる異端者の胸に

虐しひたげの力ちからを悲かなしく受うけて泣なく
忍にんじゆう従じゆうと犠ぎせい牲せいの痛いたましさ。

蒼あをしろ白しろき中なかに吾われも彼かれも朽くちて行ゆく
其その幻げんめつ滅めつの果は敢かなさよ

恋こひもなく友とももなし

悲かなしくあえぎて恋こひも忘わすれ友ともも忘わすれむ

一ひとり人行ゆく生いのち命のちの原はらに

唯ただ横よこたはる黒くろき暗くら闇やみ

父ちちよ母ははよ オーそして兄はら弟からよ

身み失うせたまひし吾わが背せの為ために

世よの中なかのすべて滅ほろ行ひくもの為ために

大おほ空そら包つつむ天てんの空そらに健すこかなれ

白き生淋し

果敢なく淋し

あはれあはれ亡き人あはれ

斯く悲しげに謡ひ終り、徐に懷中より懷劍を取り出し、淋しげにニヤリと笑ひ、顔の写るやうな刃口をつくづく打ち眺めながら、

「オー、願はくは吾等を作りたまひし皇神よ。百の罪汚れを許し給ひて、吾身魂をスカイワナ（安養浄土）へ導きたまへ」

と云ふより早く、今や一刀を吾喉に突立てむとする。三千彦は吾を忘れて飛び出し、矢庭に腕を叩いて短刀を打ち落した。女は驚いて三千彦の顔をつくづく眺め、唇をびりびり慄はせて居る。

三千「これこれお女中、短気を出しちやいけませぬ。何の爲めに此結構な世の中を見捨てようとなさるのか、まづまづ気を落着けなさい。吾は三五教の宣伝使三

千彦と申すもの、神の御命令を受けてエルサレムに参る途中道踏み迷ひ、此処迄出て来た所幽かに白骨堂が見えるので、一夜の宿をからむものと来て見れば貴女の今の有様、これが何うして黙言で見居られようかとお止め申た次第でいます。何程辛いと云ふても死ぬには及びますまい。先づ先づお静まりなさいませ。女「ハイ、有難うムいます。妾は此山奥に住まひして居ります、小さき村の女でスマナーと申します。親兄弟夫には死に別れ、頼る所もなく、又村人の若い男等が種々様々の事を云つて、若後家の貞操を破らせうと致しますから、一層の事親兄弟、夫の後を追ふて安楽世界へ参らうと存じ、祖先の遺骨の納めてあるこの白骨堂の前で、自刃せむと致した所でいます。もはや此世に在つても何の楽しみもなき妾、悪魔の誘惑にかかつて罪を作らうより、夫の後を慕ふて極楽参りをせうと覚悟を定めました。どうぞお止め下さいませな」

三千彦は涙を払ひ声を曇らせて、

三千「貴女のお言葉も一応尤もながら、貴女が一人残されたのも神界の御都合でせう。貴女が自殺すると云ふ事は罪悪中の罪悪ですよ。止むを得ずして命が終つ

たなら天国てんごくに往ゆけませうが、吾身わがみ勝かつて命いのちを捨すてたものは天国てんごくへは往ゆけませぬ。

屹度きつと地獄ぢごくに往ゆきますから、お考かんがへ直なほしを願ねがひます」

スマナー「自殺じさつを致いたしましたら、どうしても天国てんごくへは行ゆけませぬか、はて困こまつた事ことでムごまいますなア」

三千みち「貴女あなたは今承いまうけたまはれば、親兄弟おやきやうだい、夫をととに先立さきだたれたと仰有おつしやいましたが、それや又また

どうして左様さやうな事ことになられたのですか。貴女あなたが今自害いまじがいして果はてたなら、親兄弟おやきやうだい、

夫をととの菩提ぼだいを弔とむらふものは誰たれもムごまいますまい。さすれば却かへつて親おやに對たいし不孝ふかうとなり、夫をととに對たいして不貞ふていとなるでせう」

スマナー「ハイ、御親切ごしんせつによく言いつて下くださいました。貴方あなたの御教訓ごけうくんによつて妾わたしの

迷まよひも醒さめました。何分宜なにぶんよろしく願ねがひ申まをします。妾わたしの家いえは此小村このこむらではムごまいますが、夫をととはバーダラと申まをし、村むらの「たばね」をして居をりましたもので、家屋敷いえやしきも可かなり

に広ひろく、財産ざいさんも相応さうおうにムごまいますが、半月程はんつきほど以前いぜんに、虎熊山とらくまやまに山砦さんさいを作つくつて居ある大

泥棒どろぼうの乾児こぶんタールと云いう奴やつが、十数人じふすうにんの手て下したを引ひきつれ夜中やちうに忍しのび込こみ、家内中かないちうを塵殺みなころしに致いたし、宝たからを奪うばつて歸かへりました。其時妾そのときわたしは、押入おし入れの中なかに布団ふとんを被かぶつて都合つがふ

よく匿かくれましたので、生き残のこつたのでごムいます。其後そのごは村人むらびとの世話せわになつて親兄おやきやう弟だいの死骸しがいを茶毘たびに附ふし、此堂このだうに白骨はくこつを納をさめて、相当さうたうのとひ弔とむらひを致いたしましたが、何なんとなく其後そのごちは心淋こころさびしくなり、又またいろいろの若い男わかをとこが煩うるさくて、死ぬし氣きになつたのでごムいますご」

三千彦みちひこは涙なみだを流ながし乍ながら、スマナーの背せなを三みつ四よつ撫なでさすり声こゑも柔やさしく、三千みち「スマナー様さま、承うけたまはれば承うけたまはる程ほどどうじやう同情どうじやうに堪たへませぬ。併しかし乍ながら斯かうなつた上うへは最早もはや悔くやんでも歸かへらぬ事こと、これから一ひとつ氣きを取り直なほし、神様かみさまにお仕つかへになつたらどうですかご」

スマナー「ハイ有難ありがたうごムいます。併しかし乍ながら妾わたしの村むらは五ご六ろく十じゅう軒けんの小在こざい所しよでごムいますが、先祖せんぞ代々だいだいからウラル教けうを信しんじて居をりますので、俄にはかに貴方あなたのお道みちに入いる事ことは到底ていで出来きますまい。折角せつかくのお言葉ことばでごムいますが、何程なにほど妾わたしが信しんじましても、三百人さんびやくにんの村人むらびとが承知しやうちせなければ駄目だめでごムいますからなアご」
三千みち「決して決けつして決けつして左様さやうな事ことに御心配ごしんぱいは要いりませぬ。何れいづの教をしへも誠まことに二ふたつはありませぬ。又また神様かみさまは元もとは一柱ひとはしらですから、ウラル教けうでも宜よろしい。貴女あなたが今いま死ぬしる命いのちを

永らへて比丘尼となり、祖先を弔ひ、又村人を慰め、この山間に小天国をお造りになればよろしいではムいませぬか」

スマナー「左様ならば、何事も貴方にお任せ致します。どうぞ一度妾の淋しき破屋にお越し下さいませまいか」

三千「それは願うてもない仕合せでムいます。知らぬ山道に往き暮れて、宿るべき家もなし、体は疲れ、困つて居つた所でムいますから、厚面しうはムいますが、今晚は宿めて頂きませう」

スマナー「早速の御承知有難うムいます。左様ならば妾が御案内を致しませう」と白骨堂の階段を下り、再び阪道を四五町下り、右に折れ、樹木茂れる山道を辿つて、奥へ奥へと進み入る。

夏とは云へど樹木覆へる谷川の畔の道を行く事とて、身も慄ふ許り寒さを感じた。

（大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 加藤明子録）

第十九章 谿の途（一六七五）

神の教の三千彦は

行き疲れたる折柄に

白骨堂の大前に

見知らぬ女に廻り遇ひ

悲しき女の境遇に

同情し乍らスタスタと

センセイ山の谷間を

冷たき風に吹かれつつ

右に左に飛び越えて

漸く広き田圃道

チャムバカ（黄色花）
バータラ（重生花）
パールシカ（夏生花）

ナワマリカー（雑蔓花）
ヤスマナー（悦意花）の

所狭きまで匂ひたる
野道をスタスタ進み往く。

三千彦「何と此辺は珍らしい花が咲き、馨しい香を放つて居るぢやありませんか。
まるで第一天国の原野を旅行して居るやうでムいますなア」

スマナー「ハイ、此処は仙聖山の麓の仙聖郷と申しまして、此世の楽土と称へられた秘密郷でムいますが、今は薩張人間の心が悪化して了ひ、油断も隙もならない修羅道となつて仕舞ひました。此の道にいろいろの香ばしき花は艶を競ふて咲いて居りますが、村人の心の花はいつの間にか薊の花となり、刺だらけでうっかり手出しも出来ないのでムいます。村の名は仙聖郷でも、人の心は修羅道ですから、其積りで居て下さい。油断も隙もならない所でムいますからなア」

三千「物質万能主義の空気が、斯様な仙郷迄襲ふて来たと見えますな。世の中も是では終りでムいますわい。大神様のお言葉には「神のつくつた結構な神国が指一本入れる所も、片足踏み込む所もない」と大国治立の神様のお歎きですが、いかにもすみずみ迄もよく汚れたものでムいますなア」

スマナー「あまり村人の同情心が無いので、妾もこの仙郷が嫌になつたので、お恥かし乍ら夫の後を追ふて、冥途往きをせうと思ふたのでムいます。私の従弟に、テラと云ふ、それはそれは意地の悪い男がムいました、両親、夫の無くなつたのを幸ひ、朝から晩迄吾家に平太り込み、酒をつげ、肩をうて、足をもめ、

を と無体の事を申ますので、夫れが嫌さに家を飛び出し、死を決したの
で△います。何れ吾家へ帰ればテーラが主人顔をして頑張つて居りませうから、
其お積りで来て下さいませや」

三千「ハイ承知致しました。これから宣伝使の武器と頼む、言霊の宣伝歌を謡ひ
乍ら参りませう」

スマナー「どうかお願い申ます。歌と云ふものは何となく心の勇むもので△いま
すからなア」

三千彦は声を張り上げて謡ひ出した。

三千彦「天地万有悉く 靈力体の三元を

もつて創造なし給ひ 蒼生や山川の

御霊を守りたまはむと 千々に心を砕きまし

海月の如く漂へる 陸地を造り固めつつ

神人和楽の天国を 地上に建設なしたまひ

教をしへを開ひらきたまふ折をり

天あだるのひこ足彦や胞え場ば姫ひめの

醜しこの身み魂たまになり出いでし

八や岐また大を蛇ろちや醜しこ神がみの

曲まがの猛たけびに世よの中なかは

日ひに夜よに月つきに曇くもり果はて

常とこよ世よの暗やみとなりにけり

荒すさぶる神かみの訪おもなひは

五さ月ば蠅えの如ごとくわきみちて

山やまの尾を上のへや河かはの瀬せに

うらみ歎なげきの声こゑ許ばかり

醜しこ神がみ達たちは時ときを得えて

いとも尊たふとき皇すめ神かみを

世よの良うじとびに逐おひ下くだし

吾わがもの物がほ顔がほに世よの中なかを

乱みだし行ゆくこそ憎にくらしし

音おとに名な高たかき仙せん郷きやうも

醜しこの曲まが霊ひの醜しこ魂たまに

かき紊みだされて修しゆ羅ら道だうの

現げん出しゆつしたるか浅あさましや

斎い苑その館やかたを立たち出いでて

曲まがの征せい討たうにたむかち向むかふ

三み千ち彦ひ司こつ此こ処こにあり

いかなる曲まがの猛たけびをも

生いく言こと霊たまの神しん力りきに

言こと向むけ和やはし仙せん郷きやうの

御み空そらを包つつむ雲くも霧きりを

伊い吹ぶき払はらひに払はらひのけ

神代乍らの仙郷に
ねぢ直さむは案の中

確に胸にしるしあり
喜びたまへスマナー姫

三千彦現はれ来る上は
仮令テーラの三五人

万人一度に攻め来とも
如何で恐れむ敷島の

神国魂打ち出して
郷の空気を一洗し

小鳥は謡ひ花匂ふ
昔の儘にかへすべし

あゝ惟神々々
神は吾等と共にあり

人は神の子神の宮
大御心に叶ひなば

地獄畜生修羅道も
天国浄土の心地にて

やすやす浮世を渡り得む
喜びたまへスマナー姫

と謡ひ乍ら、稍広き原野を、家の棟の見ゆる所迄進んで来た。スマナーは後振り

返り、

スマナー「もし宣伝使様、あの山の麓にバラバラと家棟が見えるでムいませう。

そして一番高い所の山の【ほでら】に可なり大きな家が見えるで△いませう。あれが妾の住家で△います□

三千『成程黄昏の事とてハツキリは分りませぬが、余程大家と見えませぬな』

スマナー『イエイエお恥かしい、破屋で△います。サアもう一息で△いますが、貴方も随分お疲れのやうで△いますから、此処で一休みして帰る事に致しませうか。何れ心の悪いテーラが頑張つて居りませうから、日が暮れてからの方が様子を考へるに都合がよいかも知れませぬからなア』

三千『成程なア、夫がいいでせう。都合によつては一つ面白い芝居が出来るかも知れませぬからなア』

茲に二人は半時許り雑談に耽り、黄昏の暗を幸ひ、村中で一番高い屋敷に建つた、スマナーの館をさし帰り往く。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 加藤明子録)

第二〇章 熊鷹（一六七六）

三千彦、スマナー姫の二人は、黄昏の暗を幸ひ、ソツト家路に帰り、裏口から考へてゐた。テーラは二三十人の若い男を集めて、テーラ「オイ、お前達、青年隊に宣告をしておくが、此通り一家断絶の厄に会ひ、スマナーが只一人残つて居つたが、それも亦何うしたものか、行衛が不明となつて了つた。斯うなるといふと、ここの遺産は法律上親戚の者が継がねばならぬ。ハテ困つた事が出来たものだ。俺は元より寡欲恬淡だから、親類の財産を欲しいとは夢にも思はぬが、これも天から降つて湧いた出来事だから、辛抱して遺産相続する事にするから、青年隊の御連中何卒俺に同情してくれ玉へ。ホんに困つた事がイヒ、ゝ、到来したものだよ。今日お前達に来て貰うたのは、一杯祝……才ツトドツコイ、祝所か家内中全滅したのだから、亡き人の魂を慰める為に夕ラ腹飲んで貰ひたいのだ。俺の拵へた財産ぢやなし、酒位は充分飲ましてやるから、ドシドシ飲んでくれよ」

と得意面をさらしてゐる。青年の中より一人の男、テーラの前に進み寄り、

「オイ、テーラ、一家全滅とはそら何を云ふのだ。ここにはスマナーといふ未亡人が残つてるぢやないか、未亡人のある以上は、汝の自由にはなるまいぞ。何程汝が自由にするといふても、青年隊が承知せぬのだ。何ぞ又スマナーさまから財産管理の依頼状でも受けてるのか、ヨモヤ汝のやうな極道には、如何にスマナーさまが血迷ふたと云つても、依頼する筈があるまいぞ」

テーラ「オイ、ターク、そら何を云ふのだ。已に已にスマナーは遺書をおいて家を飛出し、自殺をすると書いて居るぞ。今頃にはどつかの谷川へでも身を投げて死んでゐるに違ないワ。さうすりや無論俺の財産だ。今日からこの主人は俺だ。何程村中の奴がゴテゴテ云つても、切つても切れぬ親戚の端だから、仕方がないワ」

ターク「そんなら其遺書を見せて貰はふかい。サア皆の前で読んでくれ」

テーラは懐中から遺書を一寸出し、大勢の前にふり廻し乍ら、

テーラ「ソレ、此通りだ」

と、はしくれを一寸まくり、

テトラ「オイ、皆の連中、此筆跡はスマナーに間違あるまいがな。どうだ違ふと思ふ者は違ふと云つてくれ」

ターク「成程、実に麗しい水茎の跡だ。此村にこれ文書く者は、スマナーさまより外にはない筈だ」

テトラ「そらみたか。これで疑が晴れただろ、エへへへ。果報は寝て待てだ。

一家の家宝も、山林田畑も今日から皆、此テトラさまの所有品だ。あゝあ、俄に長者になると何だか肩が重たいやうだワ。イヤ体が大きくなつたやうな気がし出した。テモ扱も煩さい事だワイ。イヒへへへ」

ターク「オイ、其遺書を皆の前で一遍読んで貰ひたいのだ。何が書いてあるか、分らぬからのう」

テトラ「一寸お前読んでくれぬか。俺は些と許り目が悪いのだから、日の暮と云ひ余り細かいので見えにくいワ」

ターク「ヘーン、巧い事言ふ哩。明盲の癖に、汝何時やら、人の前で新聞を逆様

に読んで居つたでないか。……さうすると傍から、テーラさま、そら新聞が逆様ぢやないかと云はれた時、汝負惜みを出しやがつて……ナア二お前に見せてるのだと言ひやがつた位だから、こんな美しい字が汝に読める道理がない。サア玉手箱を一つあけてやる。此文句に仍つて、汝が財産を相続するか、村の共有物になるか、スマナーさまの遺言通だ」

「テーラは稍狼狽の色を浮べ、タークの耳のはたに口を寄せ、
「オイ、ターク、俺に都合の悪い所があつたら、そこは巧く利益のやうに読んでくれよ。其代り成功したら汝に財産の十分の一位はやるからなア。さうすりや汝も何時迄も難儀をしてをらいでもよかる。其金を持つて洋行をして博士になつて来うとママだよ」

と小声になつて囁く。タークは何の頓着もなく、巻紙をくり拡げ、
ターク「サア、青年隊の御連中、今此遺書を朗読致します。テーラの運不運の之
できまる所だ」

大勢は一同に手を拍つて「ヒヤ ヒヤ」と迎へる。

ターク「一、妾事如何なる前生の罪の廻り来りしや、親兄弟夫迄、無残な最期を
遂げ、後に淋しく一人空閨を守り、亡き両親に孝養を尽し、夫に貞節を守り居り
し所、人の悪事を剔抉し官に訴ふるを専業とするテラの厭な男、朝から晩まで、
晩から夜明迄、厭らしく無体な恋慕をなし、未亡人と悔り、酒を爛せよ、肩を打
て、足を揉め……は未だ愚か、身分にも似合はぬ不埒な事を強請致し、立つても
ゐても居られなく相成りし故、妾は覚悟をきはめ、白骨堂の前にて自刃致し、夫
の後を逐ふ積に候。就ては村の人々並に青年隊の皆々様、テラの悪党を糾弾遊
ばした上、所払になし下され度偏に願上参らせ候。又夫の遺産は残らず金に代へ、
白骨堂を立派に御建て下され、山林田畑は白骨堂の維持費として村人に於て、保
管下さる様偏に念じ上げ参らせ候。誠に誠に厭らしきテラの為に、此世を去る
心持に相成候者なれば、彼れテラは妾の為には不倶戴天の仇敵にて御座候。仮
にも村長の妻たる妾に向つて、卑しき番太の身を以て恋慕するなどは実に言語
道断の振舞にて、悔しく腹立たしく存じ候。此村の古来よりの掟にてらし、斯の
如き不倫常の人物は、一時も早く叩き払になし下さらむことを、懇願致します。

仙聖郷の御一同様及青年隊の御一同様へ

スマナーより

謹言

テーラは眉を逆立て、面をふくらせ、ヤケクソになつて、尻ひきまくり、あくらをかいて、悪胴をすゑて了つた。

ターク「ハ、ハ、ハ、オイ、テーラ、汝は怪しからぬ奴だ。今此遺書の文句を聞いただけだらう。馬鹿な奴だなア、サアとつとと此処を立つて行け」

テーラ「ヘン、何と云つても親族の端だ。ゴテゴテ吐すと、裁判してでも取つてみせうぞ。お前達はバータラ家の財産を占領せうと思つて企んでゐるのだらう。

何と云つても相続権は俺にあるのだから、村中と喧嘩をしても美事取つて見せう。俺は汝の知つてる通り、上の役人に接近し偵羅をやつてるのだから、俺の言ふ事は何でもお取上になるのだ。汝の云ふ事はお取上にならぬのだ。嘘でも何でも偵

羅といふ肩書にたい採用して下さるのだ。俺の御機嫌を損じてみよ。汝等がバー

タラ家の財産の横領を企てたと訴へてみよ。汝等は横領罪とか騒擾罪とかで、万

古末代此世の明りの見えぬ所へやつて了ふがそれでもよいか。第一タークの奴、此奴が張本人だ。首魁は死刑に処すといふ刑法を知ってるか。お恐れ乍らと、此テーラさまの三寸の舌が動くが最後、汝の命は無いんだから……何うだ。それでも俺の意志に反対する積りか、エ、ーン」

ターク「どうなつと勝手にせい。善はしまひにや分るから。悪は始めは巧く行きよるが、九分九厘で化が現はれるからのう」

テラ「アハツハ、それだから汝お目出度いといふのだ。今日の制度を知ってるか、今日の世の中は紳士紳商官吏の天下だぞ。俺達もヤツパリ官吏の下を働いてる者だ。人民のクセに何を云ふのだ。時勢を知らぬと云つても余りぢやないか。何程善な事でものする事は打潰して了ふのが今日の行き方だ。何程悪い事でもがすれば善となつて通るのだ。些と改心して天下の趨勢を考へてみたら何うだい」

タークは青年会の会長をしてゐる事とて、一寸気骨のある男、中々テラのおどしには容易には乗らない。

ターク「ヘン、バンタのザマして偉相に云ふない、冷飯奴が。グツグツ吐すと、村内一同に同盟軍を作り、汝に冷飯を供給しない事にするぞ。何程官吏の下役だと威張つて居つても、糧道を絶たれちや駄目だらう……。オイ、皆の連中、心配するにや及ばぬから、此テラをスマナーさまの遺書の通り、追つ払うて村に置かないやうにせうぢやないか」

青年の中より少し背の高い、インタ―はつかつかと前に進み来り、インタ「ヤア、会長、君の説には賛成だ。一百姓、二宣伝使、三商売、四職人、五毘丘、六巫子、七乞食、八バンタ、九汚家、十隠亡、と云つて、社会の階級は自然に定まつて居るのだ。第一に位するお百姓さまを掴まへて、番太が何を云ふのだ。野良犬奴が。そんな脅し文句が怖うて、此悪の世の中に、一日だつて生活がつづけられるかい。馬鹿だなア」

テラ「喧しい哩、番太が何、それ程卑しいのだい。今日は衡平運動さへ起つてるぢやないか。衡平団の勢力を知らぬか。時勢遅れの頓馬野郎だな。今おれがヒューと一つ笛を吹かうものなら、夫れこそ捕手が裏山にかくしてあるのだ。何百

人といふ程やつて来て、村の奴ア一人も残らず、牢へ打ち込んで了ふのだから、それでも可いか。仙聖郷の長者の財産は、百人や千人の家族が一生遊んで暮しても尽きない程あるのだから、俺達の上官に一寸申上げ、財産没収の準備がしてあるのだ。マゴマゴしてると汝たちの身辺が危ないぞ。サア笛を吹かうか、笛を吹いたが最後、汝たちの命は風前の燈火だ。テモさても憐な者だ哩。アツハツハターク、オイ青年隊、此奴ア、うっかりして居れぬぞ。皆の中から四五人手分けて、村中の中老組を招んで来てくれ。そして各自に得物を携へて来いと言つてくれ。そして後に残つた青年は各自に鋏なり、手斧なり、鎌なり、鶴嘴なり、百姓道具を取つて用心せい。此奴の事だから、どんな事してるか分らぬから、準備をしておかなならぬからのう」

と大声に怒鳴り出した。気の利いた青年は跣足で裏口から飛出し、村中の中老組を呼集めにいつた。テーラは懐中から呼子の笛を取り出し、切りにヒヨロヒヨロヒヨロと吹立てる。忽ち数百人の足音、体を固めた黒装束の捕手は、十手、又、又、又、鎌、槍など手ん手に携へ、バラバラと飛込んで来た。

テーラ「これはこれはお役人様、能う来て下さいました。ここに居る奴等は当家の財産を横領せうと致し、今斯の通り、数十名を以て押寄せて来たのです。つまり騒擾罪ですから、一番にターク、インターの首魁をフン縛つて下さいませ。親戚の私が何うしても遺産を相続すべき権利がムいますから、巧く手に入れば、お役人御一同へ分配致しますからなア、決してお約束は違へませぬから、御安心の上何卒此奴等をおくり下さいませ」

捕手の頭キングレスは威丈高になり、

「オイ、当家は一人も残らず不慮の炎難にかかつて滅亡し、憂愁の空気が漂うてるにも係はらず、其方は不都合千万にも当家の財産を横領せむと押寄せて来たのか、返答次第に依つては容赦は致さぬが何うだ。当家は一人も残らず滅亡したのだから、親類関係のテーラが遺産相続するのは法律の許す所だ。不都合千万な、マゴマゴしてると皆捕縛するぞ」

ターク「モシ、キングレスさまとやら、万々一、未亡人のスマナーさまが生残つて居つたら何うなりますか。それでも遺産をテーラが相続せねばならぬのですか。」

左様な法律は未だ聞いた事は無いませぬが……」

キング「きまつた事だ。もし未亡人が居るとすれば、却てテーラが財産横領を企てた事になり、大罪人となる所だ。併し乍ら今軒下に隠れて聞いて居れば、夫の後を逐うて自殺をすると申し、書置まで残しておいたぢやないか」

ターク「成程、夫れには間違ひいませぬが、もしも死なずに居つたら、矢張、テールの物にはなりますまいな」

キング「無論の事だ」

テーラ「アハ、何と云つても運が向いて来たのだから……オイ、ターク、インター、駄目だよ。神妙に捕縛されるか。但しは茲であやまるなら、俺も村のよしみで許して貰うてやる。何うだ。返答を早く致せ」

此間に五六人の青年は中老をかり集めると云つて出たのは、其実白骨堂のあたりにまだスマナーが生きてうるついで居りはせぬか、それさへ居ればテーラの鼻をあかしてやるのに好都合だと、目ひき袖ひき搜索に出たのであつた。かかる所へ幽かな女の歌ふ声が聞えて来た。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 松村真澄録)

第二章 仙聖郷(一六七七)

スマナー 花は紅葉は緑 錦の山の尾めぐらせる

中国一のパラダイス 仙聖郷は永久に

天国浄土の楽みを 味はひみたる郷なれど

天足彦や胞場姫の 醜の魔神の血筋らが

いつとはなしに窺ひて 人の心は日に月に

荒び行くこそうたてけれ 虎熊山の山砦に

巢を構へたる盗人の 手下の奴等が襲来し

吾たらちねの父母を いとも無残に斬殺し

あが背せの君きみや兄弟おとどいの命いのちを奪うばひ有あり金を

掠かすめて歸かへりし悲かなしさに妾わらはは跡あとに只ただ独ひとりり

親おやと夫をつとと兄弟きやうだいの菩提ぼだいを弔とむらひひたりしに

人の悪あく事を剔てつ抉つし誣ふこく告こくを以もつて業わざとする

テーラの曲まがが現あらはれて朝あさな夕ゆふなに口く説どき立たて

耳みみの汚けがるる世よ迷まひ言こと聞きくに堪たへかねスマナーは

此この世よの中なかが厭いやになり亡なき父ちち母ははや吾わが夫つまの

後あとを慕したひて天てん国こくに上のぼらむものと胸むね定さだめ

遺ゐしよ書を認したため吾わが家いへを二ふつ日か以い前ぜんに立たち出いでて

白骨はくこつ堂だうに勤ごん経きやうしいよいよ茲ここに昇しやう天てんの

覚かく悟こを定さだむる折をりもあれ三五あななひけう教せんでんの宣せん伝でん使し

神力しんりき無む双そつの三み千ち彦ひこが現あらはれましてスマナーが

迷まよふ心こころの無む分ぶん別べつうまらに委つばら曲さくに諭さとしまし

神かみの教をしへを宣のらせしゆ俄にはかに胸むねも晴はれ渡わたり

真如しんによの日月輝じつげつかがやきて

今は全いまき神まつたの子かみと

生うまれ変かはりし嬉うれしさよ

三千彦みちひこつかさ司したに従したがひて

吾わが家やに來きたり眺ながむれば

いとど騒さわがし人ひとの聲こゑ

様やう子すあらむと裏うらくち口くちゆ

一ひと間まにい入いりて窺うかがへば

悪あく逆ぎやく無む道だうのテてーてラらさま

妾わらはが家いへの財ざい産さんを

占せん領りやうせむと狂くるひ立たち

タたーク、インいんターたー其その外ほかの

青せい年ねん隊たいの人ひと々と

争あらそひあるるこそ歎うたてけれ

最も早はや妾わらはは健まめ在やかに

命いのちをたも保たもちて歸かへりなば

テてーてラらさまの御ご心しん配ばい

必かならず無む用ように遊あそばせよ

捕とり手ての役やく人にんキきンんグぐレれス

其その他ほか百ももの人ひと達たちに

はるはるる來きたり玉たまひたる

好かう意いを感かん謝しゃし奉たてまつ

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて分わける

此この世よを造つくりし神かみ直な日ほひ

心こころもひろ広ひろき大おほ直な日ほひ

只ただ何なに事ごとも人ひとの世よは

直なほ日ほひにみ見み直なほしき聞き直なほし

世の過ちは宣り直す

神の教を聞きしより

妾はテラの計画を

決して決して憎まない

早く此場を立帰り

身の潔白を示されよ

青年会長其外の

清き身魂の人達は

少時後に残りませ

妾が為に御心を

配らせ玉ひし慰安の

御酒御饌仕へ奉り

妾が寸志を現はさむ

暫く待たせ玉へかし

三千彦司と諸共に

帰り来れる上からは

いかに捕手の数多く

吾家に迫り来る共

テラが如何に騒ぐ共

物の数にはあざらめ

あゝ有難し有難し

天地に誠の神まして

吾家を守り吾身をば

厚く恵ませ玉ひけり

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

仮令大地は沈む共

誠一つは世を救ふ

誠の道に外れたる

テーラの如き行ひは

いかでか神の許すべき

省み玉へテーラさま

スマナー姫が赤心を

こめて忠告仕る

あゝ惟神々々

御霊のふゆを賜へかし

と歌ひ乍ら、三千彦の後に従ひ、しづしづと奥の方から現はれて来た。逃腰にな

つてゐたテーラは、「コリヤたまらぬ」と上り口より慌てて庭にひつくり返り、

向ふ脛を打ち四這となつて裏口の闇に紛れて逃出して了つた。キングレス其他の

面々は何れも真の捕手にあらず、テーラが虎熊山の盗人をワザとに変装させ、此

狂言を描いたのであつた。そして二週間以前に躍り込み、家内を殆ど全滅の厄に

会はせた泥棒も、又キングレスの部下の者であつた。キングレスはスマナー姫の

言霊と三千彦の神力に圧倒され、五体俄に戦慄し、其場にドツと尻餅をつき、口

許りポカンとあけて、慄うてゐる。捕手に化けてゐた十数人の小泥棒も同じく、

其場に腰を抜かし、ふるひ戦いて居る。

三千彦は巖然として座敷の中央に座を構へ、青年隊並に泥棒組に向つて、
歌を挨拶に代へて謡つた。 宣伝

三千彦 人は神の子神の宮 神に齊しき者ならば

天地を経綸すると云ふ 尊き神の御使ぞ

小さき欲に捉はれて 広き此世を自ら

身の置所もなき迄に 狭め行くこそ歎てけれ

限りも知らぬ天地の 清けく広き世の中に

安養浄土の樂しみを 得させむ為にウブスナの

斎苑の館にあれませる 此世の垢を洗ふてふ

瑞の御霊の神柱 神素盞鳴の大神は

神の司を四方の国 放ち玉ひて曲神の

虜となれる人々を 安きに救ひ助けむと

計らせ玉ふ尊さよ

吾れは三千彦宣伝使

神の力を身に受けて

フサの国をば横断し

漸く茲に来て見れば

音に名高き仙聖郷

高天原の楽園も

怪しき雲霧立こめて

常夜の暗と成さがり

悪鬼羅刹は縦横に

跳梁跋扈なしにける

此惨状を一瞥し

神の使の身を以て

いかでか看過すべけむや

吾宣る教は皇神の

聖き尊き勅言ぞ

心を清め耳すませ

謹み畏みきこしめせ

弱味につけ込む風の神

寄るべ渚の未亡人

スマナー姫の留守宅へ

をどり込みたるテーラこそ

げにも憐れな曲津身の

醜の虜となり果て

重き罪をば知らずして

犯したるこそうたてけれ

キングレスや其外の

捕手と称する人々よ

汝は眞の捕吏ならず どころかの山に山砦を

構へて旅人をおびやかす 大泥棒と覚えたり

誠捕手の役ならば 織弱き姫の言霊に

いかでか打たれて倒るべき 心に弱味のある者は

只一言の言霊も きつく恐るるものぞかし

許しがたなき奴なれど 吾等も同じ神の子の

同胞なれば咎めずて 誠の道にまつるはせ

救ひやらむと思ふこそ 吾赤心の願ぞや

心を直し魂清め 今迄尽せし罪科を

皇大神の大前に 包まずかくさずさらけ出し

今後を戒め善道に いづれも揃うて立帰れ

吾れも汝も神の御子 いかにか曇れる魂も

研き上ぐれば元の如 水晶魂となりぬべし

あゝ惟神々々 神に誓ひて宣り伝ふ

旭あさひはてる共とも曇くもる共とも
月つきは盈みつ共とも虧かくる共とも
假たとへ令だい大地ちちは沈しづむ共とも
誠まことにまさる力ちからなし
此この世よの主しゅ権けんを握にぎる共とも
誠まことの道みちを欠かくならば
これ風ふう前ぜんの燈とも火しびぞ
省かへりみ玉たまへ諸もろ人びとよ
神かみの教をしへの三み千ち彦ひこが
一いち同どうに向むかひ大おほ神かみの
神かみ心こころ審つぶさに宣のべ伝つたふ
あゝ惟かむ神な々が々ら
御み靈たま幸さきひましませよ
□

と繰くり返かへし繰くり返かへし宣せんでんかを以もつて一いち同どうに説とき諭さとした。キングレスは涙なみだをハラハラと流ながし、犬いぬ突つ這くばとなつて三み千ち彦ひこに向むかひ、
キングあな五な教ひけうの宣せんでんし三み千ち彦ひこ司つかさの前まへに、私わたくしは一い切っの罪ざい悪あくを打うちあけて白はく状じやうを致いたし
ます。モウ此この上うへはあなたあなたの御み教をしへに從したがひ、善ぜん道だうに立たち歸かへりまするから、今いま迄までの罪つみをお
赦ゆるし下くださいませ。私わたくしの如ごとき悪あく人にんは又またと世せ界かいにムこみますまい。実じつの所ところは虎とら熊くま山やまの山さん
皆さいに立た籠こもり、十じ里り四し方ほうの村むら々むらを劫あびあかし、旅たび人びとを苦くるめ居をりましたる所ところ、ババラモ

ン教の軍人たりし、セール、ハールの両人、沢山の部下を引つれ、虎熊山に登り
来り、私等の部下二十人と共に高手小手に縛られ、止むをえず降服致し、彼等の
乾児となり、此方の方面へ働きに出て居る者でムいます。そして此郷のテーラと
いふ男は、吾々仲間と常に気脈を通じ、家尻切、庫破りの手引きをしてをつた者
でムいますが、二週間以前に当家を塵殺し、此財産を横領せむと、彼れテーラの
献策に仍り、抜刀を以て押入り、家族を全滅させむと計りました所、天罰忽ち酬
い来て、只一人のスマナー姫さまを打漏らし、それが為に忽ち陰謀露顕致し、身
動きもならぬ神罰にあてられ、懺悔の情に堪へませぬ。何卒々々赦しがたき吾々
なれ共、今の宣伝歌のお詞の通り、心も広き大直日に見直し聞直し宣直し下さい
まして、命文はお助けを願ひます。たつて許さぬと仰有れば、是非もムいませぬ
ば、私の命をお取り下され、部下十数人の命をお助け下さいまして、彼等に誠の
教をお伝へ下さつた上、神様のお道に御救ひ下さいませう」
と面に誠を現はして、心の底より謝罪する。
三千 人間界から云へば赦しがたない大罪人、お前達は今日の法律に依れば、強

盗殺人罪として首のない代物だが、神様は大慈大悲にまします故、改心さへすればキツとお許し下さるだらう。併し此三千彦は人を審判く権利もなければ、許す権利もない。従つてお前達を苦しめる権能もない。どうか誠の道に立帰り、朝な夕なに神さまにお仕へして、神の御子たる誠の人間に立帰つて貰ひたい。それが神の御子たる三千彦の希望である。其処にゐるキングレスの部下の人達、拙者の云ふ事が心にはまつたならば、今茲で神様にお詫をなさるがよからう。又青年会の人達も此郷はウラル教の教を奉ずると聞いてゐるが、どうか神様の御心を誤解せぬ様、誠の道を歩んで下さい。真にウラル教の教が拡まつてゐるならば、此仙聖郷は昔の儘に、天下の安楽郷として、太平無事でなければならぬのだ。然るにかかる惨事の突発するといふのは、神の御心に反いた点があるのであるまいかと、此三千彦は愚考致します。そしてスマナー姫様は親兄弟夫に別れ、心淋しく暮してゐられるのだから、青年の方々は陰に陽に、親切に守つて上げて下さい。そしてどこ迄も父母祖先の靈に対し孝養を尽し、亡き夫に、貞操を固く守られるやう、保護して下さい。願つておきますよ。』

タークは感涙に咽び乍ら、

タークありがた有難しまこと誠の神かみのあれまして

亡ほろぼし玉たまひぬ醜しこの曲津まがつを。

御詞みことばを朝あさな夕ゆふなに能よく守まもり

神かみの大道おほぢに仕つかへ進すすまむ

インターまなをしへつかさわれも亦こと教司の言ことの葉はを

肝きもに銘めいじて忘わすれざるらむ

三千彦みちひこ「みちのくの山の奥おくにも皇神すめかみの
守まもりありせば安やすくましますせ。

いにしへ せんせいきやう
古の仙聖郷に立直し
笑み栄えつつ永久にあれよ

スマナー姫 三千彦の神の司に助けられ

今日は嬉しくゑみ栄えける。

おそひ来る醜の曲津の影もなく

亡びし今日ぞいと嬉しき

斯かる所へ村の中老、各自に得物を携へ、裏口表口より慌しく走り来る。又スマナー姫を捜しに行つた青年は、比較的遠路の為、一人も未だ歸つて来ない。裏口の水門壺の中にアブアブして苦しんでゐる男を見れば、逃げしなに過つて落込んだテラであつた。俄に大地はビリビリと震動し、四辺の山岳は轟々と唸り出したとみるまに、轟前たる爆音、天地もわるる許りに響き来り、水門壺におちて

居た、テーラは其震動にはね飛ばされて、二三間飛上り、どんと大地に投げ付けられ、苦しげに泡をふいてゐる。此音響は虎熊山の火山が一時に爆発した響であつた。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 松村真澄録)

第二章 均霑(一六七八)

虎熊山の俄の爆発に、仙聖山は云ふも更なり、此郷土の山川草木は激烈に震動し、三千彦を除く外、何れも顔色蒼白となり、慄ひ戦いてゐた。熔岩は七八里隔てた此地点まで遠慮会釈もなく降りくるその凄じさ。されど此大きな家にも拘はらず、只の一個も当らなかつたのは神様の御守護と、何れも感謝の念を催すのであつた。流石の猛悪なるテーラも、キングレスも、部下の小盗人も、俄に怖けつき、思はず知らず両手を合せ、一生懸命に祈願し初めた。その声は一時、裏山の

谷々の木精を響かした。

スマナー姫「皆さま、恐ろしい事でムいましたな。あの様な……一時は巨大な熔岩が雨の如くに降つて参りましたが、お神徳によりまして、吾家には只の一つも当らず、又あの地響で家も倒れず、皆さまも無事に命を拾はれしは、全く尊き神様の御守護でムいませう」

と云ひ乍ら窓を開いて、村落の家々を眺めて見た。然し乍ら黒煙天に漲つて黒白も分らぬ真の暗となつて居た。実際今日は朝早くより何処ともなく薄暗く、何れも夜分と思つてゐたがその実、まだ昼の最中であつたのである。別に村の家々にも火災も起らず、阿鼻叫喚の声もなきに安心の胸を撫でおろし、

スマナー「皆さま、私の家は村中一度に見下ろせる所でムいますが、村方はあの騒動に火災も起らず、叫びの声も聞えませぬから、一軒も残らず神様のお神徳を頂いたのでせう。サア之から神様に感謝の祭を致しまして、皆さまに直会を頂いて貰ひませう」

三千「いや、それは結構です。此様な大爆発、雨の如く降り来る熔岩が、此広い

家に一箇も当らず、村中安全と云ふのは全く不思議です。此れも神様の御神徳でせう。サア青年隊の方々、御苦労乍らお祭の用意を願ひます」

タークは三千彦の言葉に従ひ、青年隊を率ゐ、いろいろ供物の用意をなし、祭典の準備に取りかかった。漸く祭典の用意は出来た。ここに三千彦、スマナー姫は新しき祭服をつけ、恭しく神前に祝詞を奏上し、祭典も無事に終了した。それより村中の老若男女は此広き家に集まり来り、キングレスの部下も斎場に列し、直会を頂く事となつた。

スマナー姫は嬉しげに宴席の中央に立つて、自から歌ひ自ら舞ふ。

スマナー姫「此処は名に負ふ秘密郷 北に仙聖山を控へ

東に虎熊の山聳え立ち 白青黄色紫の

花は芳香薫じつつ 胡蝶は高く舞ひ遊び

迦陵嚩伽は涼しき声を放ちて 神世を謡ふ

実にも尊き仙聖郷の 青人草の喜びは

外の国には例なき

中国一の瑞祥ぞ

醜の曲津の時を得て

一度は荒び狂ひしが

尊き神の御使人

三千彦司があれまして

吾家を初め此里の

醜の災除かせ玉ひ

今は全く古の

神代に帰りし嬉しさよ

仙聖山の峰高く

五色の雲の被衣して

雲をば起し雨降らし

五日の風や十日の

雨も時をば違へずに

降りしく厚き御恵は

仙聖郷の名に負ひし

吾住む郷の喜びぞ

勇めよ勇め里人よ

踊れよ踊れ皆の人

今日の生日の喜びは

外へはやらじ幾千代も

つづかせませと大前に

祈る吾等が真心を

神は必ずみそなはし

清く諾なひ玉ふべし

あゝ惟神々々

實にも嬉しき人の世の

誠まことの道みちを踏ふみしめて 神かみの教をしへを守もるならば

此この世よに枉まがの恐おそれなし 妾わらはも尊たふとき足たらち乳ちね根の

親おや兄きやう弟たいや背せの君きみに 悲かなしき別わかれをなせしより

心こころは曇くもり胸むね痛いたみ 身みも世よもあらぬ思おもひにて

一いち度どは此この世よを去さらむかと 狭せまき女をんなの心こころより

思おもひ定さだめて仙せん聖せいの 山やまに立たちたる白はく骨こつ堂だう

それの御みまへ前に平ひれ伏ふして 今いまや果はてむとする時ときしもあれや

名なさへ目め出で度たき三み千ち彦ひこの 神かみの司つかさの御みめ恵ぐみに

果は敢かなき命いのちを救すくはれて 吾わが家やに帰かへり窺うかがへば

早はやくも魔まの手ては内うち外そとに 拡ひろげられたる恐おそろしさ

闇やみを幸さいはひ裏うら口ぐちに 立たちて様やう子すを覗うかがへば

従いとこ兄なと名の乗のるテーラさま 捕とり手てと名の乗のる人ひと々びとが

青せい年ねん隊たいのタークさま インターさまと何なに事ことか

争あげ論つらひつつ妾わらはが命いのち 死しせしとや思おもひ玉たまひけむ

ひやくせんまん 心配り

感謝の涙にほだされて

三千彦司と諸共に

奥の襖を引開けて

其場に立出で言霊を

かすかに宣れば人々の

心の暗は晴れ渡り

清く尊き惟神

珍の身魂に歸りたる

その喜びや如何許り

感謝の言葉もなきまでに

妾は喜び泣き入りぬ

あゝ惟神々々

神の恵みを何処までも

頂きまして直会の

此酒宴を快よく

聞き召されと宣り奉る

朝日は照るとも曇るとも

月落ち星は失するとも

虎熊山は割るとも

神に任せし人の身は

いかで恐れむ今目の辺り

神の恵を蒙りて

笑み栄えたる嬉しさよ

あゝ惟神々々

神の御前に慎みて

畏み感謝し奉る

三千彦みちひこ 〇 諸々の罪つみや穢けがれを払はらはむと

爆発ばくはつしけむ虎熊とらくまの山やま。

虎熊とらくまの峰みねに潜ひそみし枉まが神かみも

今は全いまく逃まつたげ失うせにけむ。

仙聖せんせいの清きよけき郷さとに來きて見みれば

思おもひがけなき事ことのみぞ聞きく。

スマナーの姫ひめの命みことの真ま心こころを

愛めで玉たまひなむ天地あめつちの神かみは。

インターヤタークの君きみの真ま心こころに

バータラの家いへは栄さかえ行ゆかなむ
□

ターク 〇 思おもひきや魔ま神かみの猛たける此この郷さとに

神かみの使つかひの來きたりますとは。

傾かたむきし家のいへ柱はしらを立たて直なほす
君きみは誠まことの三千彦みちひこ司つかさよ
□

インター 村むら肝きもの心こころの暗やみは晴はれにけり

バータラの家いへの雲くもを払はらひて。

昼ひるさへも暗くらくなりぬる今日けふの空そら

明あかさむ為ためか爆発ばくはつの聲こゑ。

吾わが胸むねに潜ひそむ枉まが津つも逃にげ失うせぬ

かの爆発ばくはつの強つよき響びびに。

獅し子くま熊まも虎とら狼ほかみも戦をのきて

鎮しづまりにけむ爆発ばくはつの聲こゑに
□

三千彦みちひこ「何事なにごとも皆皇神みなすめかみの御心みこころぞ

仰あふぎ敬あやまへ神かみの御子みこ達たち。

産土うぶすなの山やまを立たち出いでし師しの君きみの

御身おんみ如何いかにと思おもひ煩わづらふ。

さり乍ながら吾師わがしの君きみは神人しんじんよ

いと平たひらけく安やすくましまさむむ」

スマナーは三千彦みちひこに盃さかづきをさし乍ながら、

スマナー「もし宣伝せんでん使様しさま、妾わたしの今後こんごの身みの振ふり方かたに就ついては、如何いかが致いたしたら宜よろし

うムこざいませうか。何卒どうぞお示しめしを願ねがひたうムこざいます」

三千みち「私わたしが斯かうなさいませ……とお指さし図づは致いたしませぬが、貴女あなたのお心こころにお感かんじな

された最善さいぜんの方法ほうほうを以もつておやりなされたら如何どうでせう」

スマナー「はい、有難ありがたうムこざいます。左様さやうならば貴方あなたのお蔭かげで命いのちのない処ところを救すくはれ、

又またこうして沢山たくさんの方かたも誠まことの道みちへ立たちかへかへつて下くださつたのでムこざいますから、妾わたしはこれに

越した喜びはムいませぬ。山林も田畑も宝も何も要りませぬ。妾は此家に三五教の神様やウラルの神様をお祀り致し、祖先や、夫の菩提を弔ひ、比丘尼となつて、一生を送りたうムいますが、如何でムいませうな」

三千「成程、それは誠に殊勝なお考へです。三千彦、双手を挙げて賛成致します。スマナー「早速の御承知、有難う存じます。就きましては妾の家は先祖代々の：此界限での富豪でムいしますが、もはや比丘尼となつて神様にお仕へする以上は、財産なんか、必要は認めませぬ。何卒バータラ家の財産全部を、社会公共の為に捧げ度いと存じますが、如何でムいませうか」

三千「それは至極結構です。定めて村人もお喜びになるでせう」
スマナー「全財産を四つに分け、その一部をエルサレムの宮に献じ、一部を神館の維持費に当て、残りの二部を村人に寄贈致しましたら如何でムいませうかな」
三千「それは至極よいお考へです。さうなさいませ。然し乍ら今ここに改心をせられたキングレス、外十数人の方々は、いま泥棒をお廃めになつた処で、百姓するにも田畑はなし、商売をするにも資本もないと云ふ場合ですから、此方々にも

少しなりと山林なり田畑なりお与へになり、農業をおさせになつたら如何でごさいませうか」

スマナー「はい、どうも有難うごさムいます。キングレス様其外の方々が御承知さへ下されば此村に居つて貰つて正業に就いて貰ひませう」

三千「キングレス様、其他の方々、今スマナー様が貴方等に相当の財産を分配したいと仰有るがどうでごさムいませう。改心なされた以上は、此仙聖郷に於て農業を営み、安全なる生活を送られたら宜からうと思ひますが、貴方のお考へは如何でごさムいますか」

キングレスは落涙し乍ら両手をつき、

キング「ハイ、重々の罪を赦された上、夢だにも見る事の出来ないやうな御恵み、あまりの事で、勿体なうて返す言葉もごさムいませぬ。何分にも宜しく御願申します」

三千「あ、それは結構々々。これ、スマナー様、これで財産の処分が略落着しました。貴女もこれから重荷が下りたやうなものだから、此家を修繕して神様の御舎となして里人を善に導き善根をお積みなさいませ。私も貴女に会つて思はぬ御

用をさして頂きました。あゝ惟神靈幸倍坐世
と天に向つて合掌し嬉し涙にくれてゐる。

三千「世の中に醜の枉津はなけれども

只心より湧き出づるかな。

身の内に枉さへなくば獅子熊も

虎狼も物の数かは。

誠ほど世に恐るべき物はなし

鬼も大蛇も逃げ失せて行く。

バラモンの神の教を振捨てて

今日は誠の三千彦となる」

スマナー姫「玉の緒の命危き折節に

待てよとかかる玉の御声。

三千彦の君の現はれ来まさずば

吾は靈界の人なりしならむ。

テラの醜の言葉に怖ぢ恐れ

死なむとせしぞ愚なりけり。

さり乍らテラの君のあらばこそ

此喜びの来りしならむ。

世の中に悪きものとして無かるべし

只吾心暗き故なり。

村肝の心の空に雲なくば

月日も清く身を照らすらむ

ターク 『仙聖の郷も今日より古の

花咲き匂ふ園となるらむ。

三千彦の神の司の御恵みに

吾里人は甦りつつ。

スマナーの比丘尼の君によく仕へ

朝な夕なに道を守らむ

インター「吾とても比丘尼の君の真心の

雨にぬれつつ忍び音に泣きぬ。

嬉しさの涙は胸に充ち溢れ

身も浮く許り勇み立つかな

キングレス「枉事のあらむ限りを尽したる

吾^{われ}にも神^{かみ}の恵^{めぐ}み賜^{たま}ひぬ。

虎^{とらくま}熊^{やま}の山^{あくじ}に悪^{たく}事を企^{たく}らみつ

今^{いま}もありせば亡^{ほろ}びしならむ。

此^{この}郷^{さと}に現^{あら}はれ来^{きた}り爆^{ばく}発^{はつ}の

なやみ逃^{のが}れし事^{こと}の嬉^{うれ}しき

テーラはノソリノソリと足^{あし}を痛^{いた}めて此^{この}場^ばに這^はひ来^{きた}り、庭^{には}の土^ど間^まに犬^{いぬ}突^{つく}這^{ばひ}となつ

て、

テーラ「枉^{まが}神^{かみ}の醜^{しこ}の限^{かぎ}りを尽^{つく}したる

吾^{われ}今^{いま}よりは悔^くい改^{あらた}めなむ。

百^{もも}人^{びと}よ吾^{わが}罪^{つみ}科^{とが}を赦^{ゆる}せかし

村^{むら}の僕^{しもへ}となりて仕^{つか}へむ

愈いよいよここにバータラ家の遺産あさんは、スマナーの意志いしに従したがひそれぞれ分配ぶんばいされて、上じや下うげ貧富ひんぷの区別くべつなく、郷民きやうみんは互たがひに業げふを楽したのしみ近隣きんりん相和あひわし、和氣わき靄々あいあいとして世よを送おくる事こととなつた。三千彦みちひこは宣伝せんでんの旅たびが急せくので、永ながく留とどまる訳わけにも行いかず、二三日にさんちちとう逗留りうして里人さとびとに神かみの教をしへを伝つたへ、タークを館やかたの留守るす居ゐと頼たのみ置おき、スマナーはエルサレムさんばいへ参拜さんばいせむと、三千彦みちひこの許ゆるしなれば、見みえ隠かくれに後あとを慕したふて進すすみ行ゆく事こととなつた。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 北村隆光録)

第二三章 義侠ぎけふ (一六七九)

仙聖郷せんせいきやうの村人むらびとは、今迄いままで土地とちの財産ざいさんは全部ぜんぶバータラ家けのものとなり、何れいつも悲惨みじめな小作人こさくにんとなり、仙聖郷せんせいきやうに住すみ乍ながら、実じつに悲惨ひさんの生活せいくわつを送おくつて居ゐた。所ところが偶然ぐうぜんの出来事できごとより山林田畑さんりん でんばたを作つくれるだけ与あたへられて、嬉々ききとして其業そのげふを楽したのしみ、又未亡またみばうじ

人のスマナーを神の如くに敬つて居た。甲乙丙三人の男は山林に薪をからむと出で行き、木蔭に腰打ち卸し、雑談に耽つて居た。

甲「オイ、世も変れば変わるものぢやないか。俺達は世界から羨まれる仙聖郷の住民であり乍ら、祖父の代からみじめな小作人の境遇に陥り、働いて作った米の大部分はバータラ家に納め、肝腎の米は一粒も口に入らず、裏作の麦類を飯米として露命を繋いで来たが、今年から、お米を頂く事が出来るやうになつたのも、全く神様のおかげだよ。是でこそ仙聖郷相当の生活が出来る事だらう、本當に嬉しい事だなア。テーラの悪人も此頃すつかり改心するし、泥棒迄がああやうに田畑を耕すやうになつたのだから、世の中も変つたものだなア」

乙「何と云ふても天与の産物を独占する者があつた為め、吾々は苦しんで来たのだ。斯うなつたら村に苦情も起らず、愛神愛人の道も完全に行はるであらう。何程信心せよと云ふても、今日食ふ飯も無いやうの事では信心も出来ず、人が何程困つとつても助ける事も出来ず、人の持つて居るものでも、叩き落して取りたいやうに思ふものだが、かうして平等になつた以上は、悪事悪念は断たれるであ

らう。テラの奴、村中の憎まれ者だつたが、善悪不二と云ふて、あの奴が彼様悪事を企みよつたものだから、吾々はこんな結構に成つたのだ。悪人だつて憎めぬよ。悪が變じて善となり、善が變じて悪となると云ふのは、大方こんな事を云ふたのだらうよ」

丙「テラの奴、随分俺達を今迄苦しめよつたが、彼奴もこれで一切の罪亡ぼしになるであらう。仲々気が利いた事をやつた。虎熊山の泥棒を引ぱつて来て、あんな荒い仕事をやり、又泥棒を役人に仕立てて、財産を横領しようとしたのは、吾々の到底考へ付かない芸当だ。泥棒だつて元からの悪人ではないと見えて、あの通り朝から晩迄神妙に働いて居るぢやないか、俺達も、も些し甲斐性があつたら、彼れ達の仲間に入つて居たかも知れないからなア」

甲「お前のやうな気の弱い男はまア乞食位のものだなア。俺だつたら屹度泥棒の親分位に、あのままでモウ一二年経つたなら成るかも分らなかつたよ。実の所は二三年前から考へて居たが、そんな事をウツカリ相談する訳にも行かず、一人の泥棒も心細いなり、泣き泣き今迄暮れて来たのだ。併し乍らテラの奴、三五教

の先生の前で、「村人の僕となつて尽しますから許して下さい」といつて置き乍ら、此頃少し見幕が荒いぢやないか。鼻を「ピコ」づかせ乍ら「お前達がこんな結構になつたのも俺のお蔭だ」と云ふて威張りやがる。番太のくせに俺達の頭をおさへようとするのでから業腹だ。一つ青年隊を召集して、テーラを元の通り番太にこき卸した方が慢心せいでよいかも知れないよ」

乙「馬鹿云ふな、四民平等とか、衡平運動とかが、盛に行はれて居る世の中に、いつ迄も怪体な思想に因へられて居るものぢやない。テーラは吾々の恩人見たやうなものだ。バータラ家があんな目に遇つたのも、何かの因縁だらう、吾々人民の膏血を絞り、贅沢三昧に暮して来た報いだ。仙聖郷三百人の恨が凝結してあんな惨事が突発したのだ。スマナー姫様も、元は貧民の腹から生れ、バータラ家に拾ひあげられて奥様になられたのだから、吾々貧民の味方をして下さつたのだ。人間と云ふものは自分が難儀をして来ねば同情の起るものではない。博愛だとか、同情だとか云つて居る者に、一人も博愛心や同情心を保つて居るものはない。世の中を博愛と、同情の仮面を被りて胡麻かす贗君子、贗聖人ばかりだ。あの比丘

にさま
尼様こそは本当に吾々の救世主様だ」

斯く話す所へ、泥酔に酔ふてやつて来たのは、一たん恐さに改心したテラであつた。テラは丸い目をギョロツと剥き出し、肩を聳やかし乍ら、口汚く、テラ「オイ、其処に居る餓鬼はダダ誰人だい。仙聖郷の救世主テラ様のお通りだぞ。早く茲へ来て土下座を致さぬか。貴様達は此方様のお蔭によつて親類の財産を分けて貰ひ、何百年振りに地主となつたのぢやないか。俺が一つ頑張らうものなら、親類の此方の、皆物になるのだが、そこは救世主様だけあつて、お前たちの物になるやうに取計らつてやつたのだ。恩知らず奴、いつも俺を番太扱ひにしやがつて、碌に挨拶もせぬぢやないか」

甲「これや、テラ、貴様は何を云ふのだ。不届き千万にも虎熊山の泥棒と腹を合せ、俺たち青年隊を騒擾罪で引張らうとしたでは無いか。吾々が地主となつたのは、先祖代々の恩恵が報うて来たのだ。恩に着せない。些と心得ないと村中が貴様を恨んで居るぞ。世の中に何が恐ろしいと言つても、恨と人気程恐ろしいものはないぞ。些と心得て酒を喰はぬやうにせねば、村中寄つて集つて、叩き払ひ

にせられて仕舞ふぞ。不心得者奴が」

テーラ「ナ、何を吐しやがるんだい。此村に俺に指一本でもさへる奴があるかい。

グズグズ吐すと、恐れ乍らと訴へてやらうか」

甲「ハ、ハ、貴様の訴へる所は、虎熊山の泥棒の岩窟であらう。お気の毒乍ら虎

熊山は半以上爆発し、貴様の親分も友達も、木端微塵になつて居るのを知らぬの

か。貴様の悪行を村中が連判で上へ届けたならば、それこそ貴様は、どんな運命

になるか分らぬのだ。今迄は吾々も財産が無いので、何を云つても官が取り上げ

て呉れなんだが、もはや、租税を納める公民となり、選挙権も獲得したのだから、

官だつて屹度少々の無理だつて取り上げて呉れるのだ。何程貴様が威張つても、

大勢と一人とは叶はぬから、好い加減に引込んだらよからう。貴様の偵羅もモウ

駄目だ。そしてそんな憎まれる商売は止めて仕舞へ」

テーラ「グズグズ吐すと、キングレスの親分に貴様の悪口を報告して、フン縛つ

てやるぞ」

甲「こら、まだ昔の夢を見て居るのか。キングレスはもはや貴様の様な者を相手

にする男ぢやないぞ。もう此頃は吾等の親切なる友達だ。此間も遇つたら貴様の事を云つて大変悔んで居た。今度グツグツ云つたら知らして呉れ。懲戒の為めに足を縛つて沙羅双樹の枝に俯向に吊るしてやらう。さうしたら些とは改心をするだらうと云つて居たぞ」

テーラ「ナ、何を吐きやがるんだい。そんなことに驚く哥兄ぢやないぞ。グツグツ吐すと片ツ端から笠の台を張り飛ばしてやらうか」

と云ふより早く早く蝶螺の如き拳骨を固め、ブウブウと風を切つて撲りつけむと暴れ出した。三人は木の幹を盾に取り、右へ左へと避け乍ら、身を守つて居る。テーラは勢に乗じ怒り狂ひ、三人を逐ひかけ廻す。俄に現はれた大の男、矢庭に後からテーラの首筋をグツと握り、雷のやうな声にて、

男「これや、又しても貴様は暴れるのか。もう了見はせぬぞ」

テーラは此声に縮み上り、

テーラ「ハイ、マ、誠に済みませぬ。チヨツ、チヨツ、チヨツと酒に喰ひ酔つたものだから脱線を致しました。キングレス様、どうぞ是限り酒も慎み、乱暴も致

しませぬから、何卒許して下さいどうぞゆるくだ」

キングレス「イヤ、許す事は出来ぬ。幾ら云つても貴様は駄目だ。頭に穴をあけ、逆さに木に吊り上げ、ちと血を出してやらぬ事には性念が入るまい。これこれ三人の方、もう私が現はれた以上は大丈夫です。サア貴方方思ふ存分、此奴を撲つてやつて下さいくだ」

三人は喜んで此場に走り来る。

甲「キングレス様、よう来て下さいました。別にこんな男を撲つた所で、何の効もありませぬから、苦しめてやらうとは思ひませぬが、どうぞ将来乱暴をせないやうに充分誠めてやつて下さいませじゅうぶんまことまじ」

キングレスは、

キング「ハイ、承知致しました。これやテーラ、此後乱暴を致すと此通りだぞ」と云ふより早く猫を掴む様に、強力に任せ掴み上げ、四五間向ふの田圃の中へ放りつけた。テーラは足を打ちチガチガし乍ら、四這になつて田の中を横ぎり、雲を霞と逃げて行く。是よりテーラは猫の如くにおとなしくなり、又キングレスは

里人さとびとから強力がうりきと崇めあがられ、悪人あくにん征服せいふくの役目やくめとなり、此仙聖郷このせんせいきやうに持もて囃はやされて一生いつしやうを無事ぶじに送おくつた。あゝ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ。

(大正一二・七・一七 旧六・四 於祥雲閣 加藤明子録)

第五篇 讚歌応山さんかおうさん

第二四章 危母玉きもだま (一六八〇)

玉国別たまくにわけ、真純彦ますみひこの二人ふたりはスーラヤの湖みづうみの西岸せいがんに着ついた時とき、初稚姫はつわかひめの嚴肅げんしゆくなる訓くん戒かいに仍よりて、伴ともなひ来きたりし三千彦みちひこ、伊太彦いたひこ、治道居士ちだうこじ其他そのたと別わかれて、逸早いちはやく聖地せいちに進すすまむと夜よを日ひに継ついで旅たびの疲つかれも苦くにせず、足あしを早はやめて漸やっやくエルサレムエルサレムに程近ほどちか

き、サンカオの里に着いた。此処にはシオン山より流れ来る、ヨルダン河が轟々と水音を立てて流れてゐる。其北岸の細道をスタスタとやつて来ると、俄に一天墨を流した如く黒雲塞がり、えも云はれぬ陰鬱の空気が漂うて来た。そしてあたりは森閑として微風一つ吹かず、何ともなしに蒸し暑く身体各部からねばった汗が滲んで来る。毒ガスにでもあてられた様に息苦しくなり、川べりの木蔭に二人は倒れる様にして腰を卸し、草の根に顔を当てて地中から湧き出づる生気を吸ひ、健康の回復を計つてゐる。これは数十里を隔てた東方の虎熊山が爆発し、折柄の東風に煽られて、毒を含んだ灰煙が谷間の低地へ向つて集まつて来たからである。

二人は息も絶え絶えになり、小声になつて天の数歌を奏上してゐる。

真純「モシ先生、モウ一息で聖地エルサレムへ到着するといふ間際になつて、俄に天地が暗くなり、斯様に息が苦しく最早堪へ切れない様になつたのは、何か神様のお気障りがあるのでは無いと思いますまいか。茲迄来て不幸にして斃れる様な事があれば、千載の恨でムいます。何うあなたはお考へですか」

玉国「ウン、どうも変だなア、私にも合点がゆかぬ。併し今日の昼頃に遥東の空に当つて、不思議な響がしたと思へば、それから天が暗くなり、地の上迄がこんな空気に包まれて了つたのだ。大方どこかの火山が爆発したのではあるまいか……とも思はれる。何分此空気は、微細な灰の様な物が交つてゐる。少時ここでお土に親しみ神様を祈つて体の回復を待つより仕方がない。私も何だか苦しくて、四肢五体がガタガタになつたやうだ。あゝ惟神靈幸倍坐世」と合掌してゐる。

斯かる所へ、ワンワンワンと幽かに遠く犬の鳴声が聞えて来た。此声を聞くと共に両人は夢から醒めたやうに、何となく心持がさえざえして来た。

真純「あ、あの声はスマートぢやムいますまいか、どうも聞覚えがある様ですな。そしてあの声が耳に入ると共に私は俄に気分が冴えて参り、血の循環がよくなつたやうでムいますワ」

玉国「ウン成程、私もあの声を聞くと共に元気が回復して来たやうだ。スマートに間違ひない。さうすれば初稚姫さまも近くへお出になつてるとみえる。ハテ嬉

しい事ことだな。併しかし吾々われわれ二人ふたりがかやうな所ところに「へこたれ」てゐる所ところを姫様ひめさまに見みつけられたら、大たい変へんな恥はぢだから、一ひとつ元げん氣きを出だして宣せん伝でん歌かを謡うたひ、ボツボツ歩あゆむ事ことにせうか」

真ま純すみ「左さ様やうなれば行ゆけるか行ゆけぬか知しりませぬが、ソロソロ歩あるいてみませう」
と両りやう人にんは杖つゑを力ちからに立たち上あがり、歩あゆまうとすれ共ども、膝ひざの関くわん節せつがだるく、且かつ笑わらふ様やうで、何どうしても足あしを運はこぶ事ことが出来できなかつた。

斯かかる所ところへ矢やを射いる如ごとく、東ひがしの方ほうより走はしつて来きたのはスマートであつた。スマートは頻しきりに、頭あたまと尾をを振ふつて嬉うれし相さうな表情へつじやうを示しめし、力ちから一杯いっぱい大おほきな声こゑでワンワンと吠ほえ立たてる。

玉たま国くに別わけは、

玉たま国くに「あゝあなたはスマートさま、能よう来きて下くださつた。定さだめて初はつ稚わか姫ひめ様さまも御ご一いつ所しょでムいませうなア」

と人にん間げんに云いふ如ごとく挨拶あいさつすると、スマートは玉たま国くに別わけの裾すそを喰くはへて、切しきりに引ひ張っぱる。玉たま国くに「ハテナ、何なにか吾々われわれの身みに災わざはひがかからむとしてゐるのだらう。スマートさま

は神のお使だから、サア真純彦、後に従つてどこなつと行かうぢやないか」
真純「ハイさう致しませう」

と云へばスマートは喰はへた裾をはなし、尾を振り乍らヨルダン河の北岸なるサ
ンカオの小高き峰を指して登り行く。七八丁も登つたと思ふ所に、目立つて巨大
なる橄欖の樹や其他の雑木が山の二合目あたりに、一つの森をなしてゐる。行つ
て見れば小さい古ぼけた祠が建つてゐる。

玉国「ハテナア、スマートさまが茲へ参拝して行けといふ事だらう。これも何か
訳があるに違ひない」

と兩人は自然に跪き、天津祝詞を苦しき息の下より、千切れ千切れに奏上した。
祠の遙か後方より優しき女の声。

初稚姫「三五教の宣伝使

初稚姫は茲に在り

スーラヤ湖辺に汝が命

其他の神の御使と

袂を分ちスマートに

助けられつつ来て見れば

天に冲する黒煙　　八テ訝かしやと大空を

眺め居たりし時もあれ　　幽かに聞ゆる爆発の

声諸共に地の上は　　不快の邪気に包まれぬ

これぞ全く虎熊の　　山の尾の上の崩壊と

神の御告げに悟り得て　　汝等が身の上案じつつ

暫し様子を伺へば　　天教山の太柱

木花姫の御詫宣　　八大竜王の其一つ

いよいよ古巢を立出でて　　カンラン山を奪はむと

三千年の蟄伏を　　破りて来る怖ろしさ

意外の教にスマートと　　此処に難をば避け乍ら

汝が来るを待ちぬたり　　三千彦司　治道居士

伊太彦　デビス、ブラワ　　ーダ　　其他の神の御子達は

何れも無事にましますと　　汝等二人の身の上は

神の御告に悟り得て　　危くなりしと聞きしより

スマートさまを遣はして　　ここにお招き申したり

やがて竜王ヨルダンの　　河遡り日向なる

シオンの山に居を転じ　　又も悪逆無道なる

行為をなして神界の　　大経綸を妨害し

此世を悪魔の世となして　　跳梁跋扈なさむとす

暫くすればマナスイン　　ナーガラシヤーが出で来り

汝等二人の命をば　　奪ひて去らむは目のあたり

九死一生の危難をば　　のがれし汝こそ目出たけれ

あゝ惟神々々　　御霊幸ひませよ

と歌ひ終り、二人の前に姿を現はし玉ふた。此時初稚姫は此社より二三丁も奥の

森の中にマナスイン竜王の帰順を祈つてみたが、容易に効験の現はれ難きを知り、

兎も角二人の命を救はむと、神力をこめ、赤裸となつて、サンカオの滝に打たれ

てゐた。そしてスマートの声を聞いて、二人が無事に此祠迄着いた事を知り、滝

の麓より衣服を着替へて、歌をうたひ乍ら茲へ現はれたのである。

玉国別は何となく自然におつる涙を拭ひ乍ら、声をかすめて、

玉国「初稚姫様、吾々兩人、神徳未だ足らず、殆んど聖地に間もなき地点迄近付

きまして、此川べりを通る折しも俄に気分が悪くなり、手足の自由を失ひ、腑甲

斐なくも倒れて居りました。何か神様に御無礼をしたので、お叱りを蒙つたので

はあるまいかと、兩人が私かに案じ煩ひ、お詫を致して居りますと、あなたのお

遣し下さいました此スマートさまの声が聞えて、俄に元氣回復し此処迄誘はれて

参りました。貴女のお姿を拝するにつけ、嬉しさと、懐かしさとで、自然に涙が

こぼれます。私達をお招き下さつたのは、何か変つた御用ではムいますまいか」

初稚「玉国別さま、真純彦さま、よく無事で此処まで来て下さいました。今も私

が歌つた通り、マナスイン竜王がゲツセマネの苑を占領し、エデンの花園や黄金

山を蹂躪せむと致します故、スマートさまに先へ行つて貰ひ、竜王が占領せない

様にいろいろと守護を致し、あなた方が此街道を御通りと悟りました故、危難の

身に及ばぬ事を虞てお助け申さむと、ここに待つてゐたのでムいます。やがてマ

ナスイン竜王は、虎熊山を立出で、いよいよ時節の到来とゲツセマネの苑を占領すべく、山河草木を震撼させ乍ら、進んで来るのですが、ゲツセマネの苑には、到底身を置く所が無いので、此河を遡り、シオン山へ参るでせう。さうすれば巨大な竜体でムいますから、あなた方の姿を見れば尾の先の剣にて、一打に致しませう。息のつまるやうな空気が、低地にさまようて居るのは、やがて竜王が登つて来る証拠でムいます。竜王の頭の向ふ所は、十里位先まで邪気がただよひますから……間もなく大きな音を立て、竜体が上つて来るでせう」

玉国別は打驚き乍ら、

「姫様の御恵は到底言にも尽されませぬ。実に感謝の至りでムいます。若しも貴女が居られなかつたならば、吾々は御神業を完全に勤める事が出来なかつたかも知れませぬ」

と又涙を拭ふ。真純彦は感極まつて一言も発し得ず、俯いて忍び音に泣いてゐる。折柄西方より轟々と地響きさせ乍ら、中空に黒雲の旗を立てた様にピカピカ鱗

を光らせ、山の如き怪物が東を指して登り来る。玉国別、真純彦は此姿を見て、俄に体すくみ其場に跪坐んで了つた。

初稚「お二人様、モウ安心です。竜王が通過致しました。やがて邪気も追々に晴れるでせう」

玉国「ハイ、何うも恐ろしい事で△いました。斯様な者が此聖地の近辺へやつて来るとすれば、埴安彦、埴安姫様の御神業も、並大抵では△いますまいな」

初稚「中々並大抵の御神業ぢや△いませぬ。それ故ウバナダ竜王の玉や、シャーガラ竜王の玉、並に水晶の三個の玉があなた方のお弟子に神様から渡されてゐるのです。これさへ聖地へ納まらば、いかにマナスイン竜王が聖地を窺へばとて、

何うする事も出来ませぬ。此三個の玉には、不思議な神力があります。あなた方のお手になれば別に不思議も現はれませぬが、之を神様のお手にお渡しになれば、天地を自由自在に動かす事が出来ます。それ故、いかにマナスイン竜王が暴威を振ふとも、如何ともする事が出来ませぬ。真純彦さまは玉を持つてお出でせうなア」

真純 「ハイ、力限り保護致しまして、一個丈は此処迄送つて参りました」

初稚 「それは誠に結構でムいます。定めて神さまも御喜び遊ばす事でムいませう。

マナスイン竜王があなたの姿を認めずに過去つたのは、先づ神界の為何程結構だ

か分りませぬ」

真純 「同じ玉でも、神さまがお持ちになるのと、吾々が持つのは働きが違ふの

でムいますか」

初稚 「それは違ひます。靈相應の力より出ぬものでムいます。何程宣伝使が神力

がある」と云つても、大神様の御化身には及びませぬからなア」

真純 「私が玉を持つてゐた為に、さうするとあの川べりに於て、あんな苦しい、

息のつままるやうな目に会つたのですか。つまり玉の威徳に負たやうなものですな。

小人玉を抱いて罪あり……とはこんな時の事を云つたのでせう」

初稚 「猫に小判、豚に真珠だとか云ふ譬がムいましたなア。ホ、ホ、ホ、」

と笑ふ。真純彦は頭をかき乍ら、

真純 「さうすると、三千彦や伊太彦が所持してる玉も、ヤツパリ私と同様でムい

ますかな」

初稚「伊太彦さまだつて、三千彦さまだつて同じ事ですワ。結構な玉を懐に持つ

たと云ふ誇りがありますので、途中に於ているの苦しい目に会つたり、妨害

に出会つたりしてゐられますが、やがてゲッセマネの苑まで参る時には、道は変

つてゐますが、一度に会ふ事に神様が仕組んでゐられますから、ゲッセマネの苑

迄行けば、スーラヤの湖辺で別れた御連中と無事に面会が出来るでせう」

真純「そんなら姫様、私の懐に預かつて居つて、大切な宝玉を汚してはすみませ

ぬから、何卒ここで貴女に預かつて戴く訳には参りませぬかな」

初稚「それは御免を蒙りたうムいます。あなたのお役目ですから、役目以外の事

は到底神界から許されませぬ。すべて神さまは順序ですから、順序を誤つては天

地の経綸が破れます。そして女が玉を抱けば、玉照姫さまのお母様の様に、お腹

がふくれますから困りますよ。世の中の分らぬ人間から、初稚姫は墮落したとみ

えて、男が出来たなどと言はれては迷惑ですからなア、ホ、ホ、」

真純「お玉さまだつて、夫なしに結構なお子さまをお生みになつた例もムいます。

あなたにお子さまが出来たつて、誰がそんな事思ひませうか。あなたのお肉体は吾々の如き粗製濫造品とは違ひますから、そんな事仰有らずに御預かり下さいませな。何だか恐ろしうなつて参りました」

初稚「其玉を持つて居りますと、マナスイン竜王がつけ狙ひますから、私は恐ろしうムいますワ。玉さへ持つてゐなければ竜王だつて相手にませぬ。其玉ある故に悪魔が欲しがつて覗ふのですからなア」

真純「ハテ、困つた事だなア。結構な御用をさして頂いたと思ひ、得意になつて今迄やつて来たのに、此玉がある為に最前のやうな苦しい目に会はねばならぬとは、何と云ふ因果な役を勤めたのだらう」

初稚「そこが靈の因縁ですから、之は何うしても人間の左右する事は出来ないのです。まだ聖地までは余程間がムいますから、余程用心なさいませぬと、あなたの懐に玉の光つてるのがマナスイン竜王の目に入らうものなら、それこそ引返して参りますよ。御用心なさいませよ、ホ、ホ、ホ、」

真純「モシ先生、何う致しませう。あなた暫く御預かり下さいませまいか。玉国

別さまと名迄ついてるのですもの。ここ迄私が奉持して来たのですから、此処から預かつて下さつても宜いでせう」

玉国「ハ、ア、さうするとお前は矢張自己愛におちてゐるのだなア、おれに玉を持たして、竜王の犠牲となし、自分は助かるといふ狡猾い考へだらう。イヤそれでお前の心も分つた。ヨシ、犠牲になつてやらう」

真純「メ、滅相な、どうしてそんな薄情な事を思ひませう。あなたに持つて頂きたいと申したのは、靈相応だと思つたからです。あなたは私から比ぶれば、幾層倍の御神徳のあるお方、それ故玉の光も一層輝きませうし、あなたがお持ちになれば、竜王も決して覗はないと思つたからです。あなたは初稚姫様に次いで生神様でゝいますからなア」

玉国「玉を持たぬ私が、お前の側に居つてさへ、あれ丈竜王の毒氣に中てられたぢやないか。到底私の様な神力の足らぬ者は、玉を預かる資格がないのだ。それだからお前に持つて貰うたぢやないか」

真純「本当に結構な玉の光に位負して、有難迷惑だ。併し乍ら之も御神業だと思

へば結構けつこうです。それぢや仮令たとへり竜王りゅうわうが私わたしを吞のまうと構かまひませぬ。身命しんめいを賭として玉たまの保護ほごを致いたし、聖地せいち迄まで参まゐる事ことに致いたませう」
初稚はつわか「サア、何どうやら邪氣じやきも去さつた様やうです。あの通とほり日輪にちりん様さまも拜をがめ出だしました。ソロソロ参まゐりませう」

玉国たまくに「真ますみぞらにはか曇くもり四方よも八方やもは黒くろき真ますみみのさまとなりぬる」

真ます純み「真ますみとは清きよきたたえにあらずして

黒くろき身み魂たまの真ます墨すみなりけり。

今いま迄までは力ちからと頼たのみ来きたりしを

恐おそろしくなりぬこれの真また玉たまは」

初稚^{はつわか} 『いざさらば貴^{うず}の聖地^{せいち}に進む^{すす}べし

玉国別^{たまくにわけ}よ玉守彦^{たまもりひこ}よ

かく歌^{うた}ひ了^{をは}り、三人^{さんにん}はスマートに守^{まも}られて、道^{みち}々宣^{せん}伝^{でん}歌^かを謡^{うた}ひ乍^{なが}ら、ヨルダン河^がの河^{かは}辺^へを伝^{つた}うて、西^{にし}へ西^{にし}へと進^{すす}み行^ゆく。

(大正一二・七・一八 旧六・五 於祥雲閣 松村真澄録)

第二十五章 道歌^{だうか}〔一六八一〕

玉国別^{たまくにわけ}はサンカオ山^{さん}の祠^{ほくら}を立^{たち}出^いで、ヨルダン川^がの北^{ほく}岸^{がん}を下^{くだ}り乍^{なが}ら、元^{げん}氣^き恢^{くわ}復^{いふく}し、聖地^{せいち}の近^{ちか}づいたに何^{なん}となく心^{こころ}勇^{いさ}み立^たち、声^{こゑ}も涼^{すず}しく宣^{せん}伝^{でん}歌^かを謡^{うた}ひ初^{はじ}めた。

玉国別^{たまくにわけ} 『神^{かみ}の教^{をしへ}にヨルダンの川^{かは}の辺^{ほとり}に北^{きた}の道^{みち}

すす 進み行くこそ樂しけれ 遙に見ゆるは橄欖の

やま 山の尾の上か聖場か ヨルダン川の水清く

なが 流れの音は涼々と 天地に響く心地なり

れいざん 霊山会場の蓮華台 蓮の山にあれませる

このはな 木花姫の御守り 一度に開く初稚姫の

つづ 珍の司に従ひて 心の空も真純彦

ふところ その懐に輝ける 玉国別の今日の旅

なん 何とはなしに勇ましく 天にも上る心地して

あし 足も次第にかかるがると 流れに沿ふて進むなり

かむながら 唯神々々 吾行先はゲツセマネ

つき 月の輝く花苑に 百花爛漫艶競ひ

かみ 神の使の吾々を 媚を呈して待つならむ

みちひ 三千彦司、伊太彦や 鬼春別の治道居士

ひめ デビスの姫やブラワゝーダ その他の殿の御使は

もはや聖地に着きけるか 吾等は道を急ぎつつ

只一向に進み来て もしや彼等に遅れなば

これ末代の恥辱なり とは云ふものの神界の

仕組ばかりは吾々の 曇りし身魂は分らない

ヨルダン川の川の面 吹く夏風は吾胸を

涼しく清く撫でて行く 黄金の峰と聞えたる

橄欖香ふ聖山に 弥永久に鎮まれる

野立の彦の御化身 埴安彦の神様は

吾等一行の恙なく 到着せしと聞きまさば

嘸や喜び給ふらむ 八大竜王の所持したる

三つの珠まで受取りて いよいよ神業成就の

貴の御玉を献る 吾身の上こそ樂しけれ

案ずる勿れ真純彦 もはや聖地も見えて来た

日出別の神司 数多の伴人随へて

吾等一行の到るをば

喜び迎へ門外に

現はれ待たせ給ふらむ

思へば思へば勇ましや

これも全く瑞御魂

神素盞鳴の大神の

珍の使とあれませる

初稚姫の御引立

慎み感謝し奉る

勝利の都は近づきぬ

進めよ進め勇み立て

貴の聖地に参上り

珍の力をみてづから

埴安彦に授けられ

再び陣容立直し

シオンの山に忍びたる

ナーガラシヤを言向けて

奇しき功績を永久に

立てねばおかぬ吾望み

遂げさせ給へ惟神

聖地にゐます皇神の

御前に願ひ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

仮令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

誠一つの言霊の

御稜威によりて玉国別は

漸く都に近づきぬ

思へば思へば皇神の

仁慈無限の御仕組

感謝にあまり自ら

涙は腮辺に漂ひぬ

あゝ惟神々々

感喜あまりて言葉なし

これにて沈黙仕る

と謡ひ終り、後振向いて初稚姫の御顔を見れば、姫の容貌は崇高の上にも崇高を

増し、形容し難き喜びと威厳とをたたへてゐる。玉国別は思はず知らず、ハツと

頭を下げ道の傍に身を転じ、揉手をしながら、

玉国「いや、誠に失礼な事を致しました。サアどうかお先へおいで下さいませ」

初稚「神様は順序でムいますからな、ホ、ホ、」

と笑ひ乍ら先に立つて進み行く。

スマートは初稚姫の後より尾を振り乍ら従いて行く。

真純「もし先生、貴方、又失敗致しましたね。今初稚姫様が只一言、神様は順序

だと仰有つたでせう。貴方が偉さうに先に立つておいでになるものだから、叱ら

れたでせう。サンカオ山の麓でも、「神は順序だ。順序を破れば秩序が乱れる」と仰有つたのを忘れたのですか」

玉国「いや、そんな考へではない。姫様を御案内申上げる積りで先に立つたのだ。畢竟私の考へは先伴をお仕へする考へだつたよ」

真純「貴方御案内遊ばす丈の資格があるのですか。エルサレムの勝手は分つて
るのですか。勝手分らずに御案内も出来すまい。彼方の方が大抵エルサレムだ
らう位の事では、案内者とは云へませぬからな。神様のお道だつて充分究めて置

かねば宣伝使となれないと同じに、道案内だつてさうではありませぬか」

玉国「さう云へばさうだが、肝腎の聖地に近付いたのだから、慎んで苦情がまし
い事は云はないで欲しいな。俺だつて気がもめるのと嬉しいのとで、チツと許り

は脱線するかも知れないからな」

真純「聖地に近づいたから御注意を申し上げるのです。嬉しいから脱線するやう
な事でどうなりますか。道中は私と二人だから何程へマやつても恥にもなりません
ぬが、エルサレムに着けば錚々たる神司がおりますから、第一、神素盞鳴大神

様の御神徳ごしんとくにくわん関しますよ。ここはいづのみたまさま厳御魂様の御鎮座所ごちんざしよですから、産土山うぶすなやまの齋苑館いそやかたとは、余程よほど窮屈きうくつですよ。厳いづの御魂様みたまさまから、「何なんと素盞すさのをのみこと鳴尊ののみことも先さきの見みえぬ神様かみさまだな。あのやうな宣伝使せんでんしをようも遣つかはしたな」と思召おぼしめしたら、貴方あなた許ばかりの恥はぢぢやありません。つまり主人しゅじんの名誉めいよを傷きずつけるやうなものです。ヤレ聖地せいちへ着ついたから嬉うれしいと思おもつちやなりません。益々ますます緊張きんちやうして、心得こころえ上うへにも心得こころえねばならぬでせう」

玉国たまくに「あ、お前まへならこそ、面おもてを犯をかして、ようそこ迄まで云いつて呉くれた。や、有難ありがたい。沢山たくさんの弟子でしがあつても、私わたしの肺腑はいふを衝つくやうな意見いけんをして呉くれる者ものは無ない。人間にんげんは何なにが不幸ふかうだと云いつても、真心まごころで忠告ちゆうこくして呉くれるものがないほど不幸ふかうはないからのう。イヤ、氣きがついた事ことがあれば、何卒どうぞ、私わたしは怒おこらないから注意ちゆういして貰もらひたい」

真純ますみ「貴方あなたに御注意ごちゆうい申まを上げた事ことは山程やまほどムごいすが、もはや聖地せいちも近ちかづきましたから道々みちみち申まを上げて、どうせ申まを上げきれないと思おもひまして……又またお姫様ひめさまの御同道ごどうだうですから、あまりの事ことを申まをせば先生せんせいの御人格ごじんかくにくわん関まりますから、貴方あなたユツクリお考かんがへ下くださいませ。又また一人ひとから氣きをつけられて氣きづく位くらいではいかぬ」と、厳いづの靈みたまのお筆先ふでさきにもありますからな。然しかし人ひとの欠点けつてんはよく分わかります、自分じぶんの顔かほの墨すみは分わから

ぬものでムごきいます。私わたしの欠点けってんも沢山たくさんありませう。何なんと云いつても貴方あなたの教をしへを受けた弟子でしですから、欠点けってんだらけでせう、いや間違まちがひだらけでせう。何卒どうぞ御注意ごちういくだ下さいませ

せ」
玉国たまくに「私わたしの教育けういくを受けたから欠点けってんだらけ、間違まちがひひだらけ、とはどうも仕方しかたがないな。イヤさうだらう。お前まへに間違まちがひだらけを教をしへとつたら、そこは神直日かむなほひ大直日おほなほひに許ゆるして貰もらふのだな」

初稚はつわかひめ姫あとふりかへは後振返あとふりかへり、

初稚はつわか「オホ、、、、大変たいへんにお話はなしがはづんで居をりますな。これからは最早もはや聖域せいみきない内ないになりますから、宣伝歌せんでんかの外ほかは一切いっさい喋しゃべらないやうにして下ください。此玉このたまさへ納をさまれば、何程いくばなりとお喋しゃべりなさつて宜よろしい」

玉国たまくに「はい、畏かしこまりました。屹度きつと心得こころえます」

初稚はつわか「さうして、御両人ごりやうにんとも自分じぶんの欠点けってんをよく考かんがへて、今いまの内うちにお直なほし成なさいませや。聖地せいちには立派りつぱな神司かむつかさばか許をり居をられますから、何卒どうぞお恥はづかしくない様やうにお願ねがひしますよ。貴方あなたは今勝利いましよつりの都みやこへ近ちかづいたとお謡うたひなさいましたが、勝利しよつりの都みやこと御油断ごゆだん

なされば、聖地に於て敗者となり、失敗の都となるかも知れませぬよ。何事も九分九厘と云ふ所が大切です。最も注意を要する所です。誰でも得意になると九分九厘で転覆するものですからな」

玉国「あ、何と窮屈な事でムいますな。私は只今迄難行苦行して漸く聖地の空を見たのですから、やれやれユツクリ一服をさして貰つて嬉しく楽しく参拝をしようと思ひましたが、人間の考へは実に果敢ないものですな。エルサレムと云ふ所は天国浄土かと思つてゐましたのに意外にも窮屈な所でムいますな」

初稚「結構な処の恐い所だ」と敵御魂の神諭にも出てゐるでせう。油断は少しもなりませぬよ。寸善尺魔の世の中ですから弥勒の世が完成する迄は、腹帯をしつかりしめて気を張弓にして置かなくては魔神に襲はれますからな」

玉国「聖地でさへも魔神が居りますか」
初稚「美しい花には害虫多く、よき果物には虫害多きが如く、宝の集まる所には盗人の狙ふ如く、世界中の人間がエルサレム エルサレムと云つて憧憬してるのですから、悪の強い欲の深いものは皆聖地に来て、何か思惑を立てようとするの

ですよ。エルサレム程偽善者の集まる所はないのですから、よく善悪正邪を弁へて、御交際を願ひますよ。それ丈け御注意致しておきます。又真純彦様も最前から玉国別さまの欠点を親切に注意されましたが、貴方には玉国別様以上の欠点がありますから、よく反省なさいませや」

真純「恐れ入りました。聖地に到着迄に幾千も時間がムいませぬから、何だか俄に心忙しくなつて参りました。之から自分の欠点を考へもつて歩きますから、姫様何卒ユツクリ歩いて下さいませ。さう急いでお歩き下さると、自分の欠点を考へる暇がムいませぬからな」

初稚「よい考へは到底人間では出ませぬよ。神様にお願ひなさいませ。さうすれば刹那刹那に気をつかせて貰ひます。今から考へたつてよい考へが出るはずはムいませぬわ」

真純「然らば惟神に任して参りませう。取越し苦労は致しますまい」
初稚「ア、そこへお気がついたらそれで宜しうムいます。貴方はいつも宣伝歌の

末尾に惟神々と仰有るでせう。それさへお忘れにならなければそれで宜しうム

います。サア急いで参りませう

玉国「姫様、真純彦を通し結構な御教訓を賜はりまして、玉国別も初めて落付き

ました。有難く感謝致します

初稚「感謝なんかして頂くと妾困りますわ」

と一層足を早めて進み行く。

真純彦は道々小声に謡ひ乍ら、二人の後について行く。

真純彦「あゝ有難や有難や 待ちに待つたるエルサレム

吾目の前に開展し 何とはなしに村肝の

心は勇み身は踊り 足の歩みも軽々と

知らずに早くなりにけり 只何事も惟神

神に任せと姫様の 千古不滅の御教訓

今更乍ら有難く 感謝の涙漂ひぬ

神が表に現はれて 善と悪とを立分ける

此世を造りし神直日
心も広き大直日

只何事も人の世は
直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す
神の教を聞き乍ら

ついうかうかと忘れ行く
人の心ぞ浅間しき

取越苦労や過越の
苦労をやめて刹那心

善悪正邪に超越し
只何事も皇神の

心のままに任しなば
いかなる重き神業も

いと平けく安らけく
奉仕し得べき真諦を

今更の如悟りけり
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つともかくるとも
仮令大地は沈むとも

神の誠の御教に
従ひ進む身なりせば

如何なる枉の猛びをも
いと安々と免れむ

次第一次第しだいにエルサレム
山の景色も近づきて

茂り合ひたる橄欖の
木の葉の風にそよぐさま

見ゆる許りになりにけり　いよいよこれよりゲッセマネ

神の集まる花園に　時々刻々に近づきて

別れて程経し神司　三千彦伊太彦其外の

神の柱に会ふならむ　思へば思へば勇ましや

あゝ惟神々々　御霊幸ひましませよ

と謡ひ乍ら漸くにしてヨルダン川の渡し場に着いた。昔はここに黄金橋と云ふ

金の橋のかかつてみた処である。川の西岸には日出別命数多の神司を従へ、幾百

旒とも知れぬ紫赤白黄浅黄の旗を河風になびかせ、初稚姫一行の到着を待たせ玉

ひつつあつた。日出別命の命によつて新造の無棚舟は、四人の水夫が櫓を操り

乍ら、此方に向つて漕ぎ来る。川の向ふには、ウラーウラーの声山岳も揺ぐ許り

に聞えて来た。初稚姫一行は迎への舟に身を托し悠々として向ふ岸に渡り、川岸

に着くや日出別命は初稚姫の側にツと寄り添ひ、固き握手を交換した。次いで玉

国別、真純彦に握手を交はし、数百人の神司や信徒に前後を守られて、安の河原

と称^{とな}へられたるゲツセマネの園^{その}へと練^ねり行^ゆく事^{こと}となつた。

(大正一二・七・一八 旧六・五 於祥雲閣 北村隆光録)

第二六章 七福神(一六八二)

日^ひの出^{わけ}別^{のみこと}命^{さいう}の左^さ右^{いう}には道^{みち}彦^{ひこ}、安^{やす}彦^{ひこ}の両^{りやう}人^{にん}が従^{したが}ひ、初^{はつ}稚^{わか}姫^{ひめ}一^{いつ}行^{かう}を導^{みちび}いて数^{すう}百^{ひやく}旒^{りう}の五色^{ごしき}の旗^{はた}を風^{かぜ}に翻^{ひるがへ}し乍^{なが}ら、百^{ひやく}花^{くわ}爛^{らん}漫^{まん}たるゲツセマネの園^{その}にと進^{すす}み入^いつた。玉^{たま}国^{くに}別^{わけ}一^{いつ}行^{かう}が竜^{りう}王^{わう}の三^{さん}個^この玉^{たま}を捧^{ほう}持^ぢして来^{きた}りし其^{その}功^{こう}績^{せき}を賞^{しやう}する為^ため、特^{とく}に埴^{はに}安^{やす}彦^{ひこ}尊^{のみこと}の命^{めい}により歡^{くわん}迎^{げい}宴^{えん}が開^{ひら}かれた。ゲツセマネの園^{その}には種^{しゆ}々^{じゆ}の作^{つく}物^{りもの}や、音^{おん}楽^{がく}や演^{えん}劇^{げき}が盛^{さか}んに催^{もよほ}されて居^ゐた。さうしてコウカス山^{さん}よりは、言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{のみこと}が数^{あまた}多^たの神^{かむつ}司^{かさ}を引^ひき連^つれ、二^に三^{さん}日^{にち}前^{まへ}に早^{はや}くも聖^{せい}地^ちに到^{たう}着^{ちやく}されて居^ゐた。

玉^{たま}国^{くに}別^{わけ}、真^{ます}純^み彦^{ひこ}は途^と中^{ちゆう}に於^{おい}て初^{はつ}稚^{わか}姫^{ひめ}に「聖^{せい}地^ちは結^{けつ}構^{こう}な所^{ところ}の恐^{おそ}ろしい所^{ところ}だ」と誠^{いまし}められ、筋^{きん}肉^{にく}迄^{まで}緊^{きん}張^{ちやう}させ居^ゐたにも拘^{かか}はらず、この大^{おほ}袈^げ裟^さの歡^{くわん}迎^{げい}に肝^{きも}をつぶし、夢^{ゆめ}

かと許り呆れてゐる。只見るもの、聞くもの意外の事許りで語る事も知らず、無言の儘初稚姫の後について進んで行く。日出別の神は俄作りの建物をさし示し、日の出別「サア皆様、貴方方の御苦勞を慰める為め、神様の思召によつて、種々の余興が催されて居ます。これから此建造物に於て、七福神宝の入船と云ふお芝居が初まりますから、悠悠気をゆるして御覧下さいませ」

玉国別は案に相違しながら、

玉国「いや、どうしてどうして、そんな気楽な事が出来ませうか。真純彦に持たせた此宝玉を、無事神様にお渡しする迄は、芝居所ではムいませぬ。是ばかりは平にお恕し下さいませ。うつかりして九分九厘で顛覆しては大変ですからなア」と何処迄も警戒し体を固くして居る。

日の出別「決して決して御心配なさいませぬ。此通り貴方方の御到着を祝ふために宝の入船と云ふ神劇が催されて居るのです。貴方も宝を抱いてヨルダン河を船にて渡り、この聖地へお這りになつたのですから、宝の入船の主人公は貴方方ですよ」

玉国「ハイ。真純彦、お前はどうか考へるか。どうも大教主のお言葉が私には些と許り解し兼ねるのだがなア」

真純「先生、これや神様から気を引かれて居るのかも知れませぬよ。兎も角お断りを申て、早く此玉を埴安彦の神様にお渡しして来うではありませぬか。さうでなくてはお芝居を見る気がしませぬわ」

初稚「決して御心配は要りませぬ。這入つて御覧なさいませ。いやいや貴方が役者にならねばならぬのですよ。やがて治道居士、伊太彦、三千彦、デビス姫、ブラワ、一ダさまが見えることですから、七福神になつて貰ふ積りです。治道居士さまは布袋、玉国別さまが寿老人、真純彦さまが毘沙門天、伊太彦さまが大黒さま、三千彦さまが恵比寿さま、それから、デビス姫さまが弁財天、と云ふやうに、各自にちやんとお役が定つて居るのです。サアどうぞ楽屋へお這入り下さい。私等は見せて貰ふのです。実の所は貴方に役者になつて貰ふのですから、是も御神業だと思つてお勤め下さいませ」

玉国「ハテナ、些とも合点が往きませぬわ。御命令とあれば俄俳優になつてもよ

ろしいが、てんで台詞が分りませぬからねえ」

日の出別「台詞なんか要りませぬよ。其時神様が憑つて口を借りて仰有いますから、承諾なさればよいのです」

真純「モシ先生、イヤ寿老人さま、神様の命令だ、千両役者になりませうか」

玉国「何と云つても神様の御命令とあれば背く訳には行きませぬまい。勤めさして頂きませう。そして三千彦、伊太彦はもはや此方へ見えて居りますか。どうして

も吾々とは二三日後れるやうに思ひますがなア」

言依別「時間空間を超越したる神の道、そんな御心配は要りませぬ。直に今此処へお出になりますよ。総て神様の御国は想念の世界ですから、想念の儘になるのです。此処が外の地点とは違つて尊い所以です。さうでなくてはエルサレムと云つて神様がお集まり遊ばす道理がありませんから」

玉国「左様ならばお受け致します」

真純「私も先生と同様お受け致します」

と云ふや否や、二人の姿は忽ち七福神の中の一人名となつて居た。いつの間にやら、

治道居士、三千彦、伊太彦、デビス姫、ブラワ、一ダ姫其外の人々は集まり来て、何れも七福神の姿となつて居る。愈茲に七福神宝の入船の奉祝神劇は演ぜられた。数多の神司や信者は、此広き建物の中に、立錐の余地なき迄に集まつて、愉快げに観覧し、其妙技を口を極めて賞揚した。神劇の次第は左記の通りであつた。

抑我日の下は神の御国なり 天地ひらけ陰陽分れ

青人草を始めとし 万物爰に発生して

天地人の三体備はりぬ 天津御国の太元は

大国常立の大御神 又の御名は天照皇大御神なり

地津神の太元は豊国主の大御神 又の御名は神素盞鳴尊

豊葦原の瑞穂の国産土山の 底津岩根に宮柱太敷立て

三五の神の都を奠め賜ひしより 千代万代に動きなく

天下泰平国土安穩 五穀成就万民鼓腹擊壤の樂みを享く

實げに有あり難がたき神かみの国くにの
草木くさきも靡なびく君きみが御み代よ

かくも目め出で度た国くにの中うちに
四海しかい波なみ風かぜ豊ゆたかにて

雲くも井いの空そらに寿ほぎ舞まふ鶴つるや
千ち年とせの松まつの緑みどりの色いろ深ふかく

万ばん歳ざいの龜かめも楽たのしむ天てん教けうの山やまの
高たかく澄すみきる月つきのあたり

たなびく霞かすみの中なかよりも
真ま帆ほをば風かぜに孕はらませつ

浮うかれ入いり来くる宝たからの御み船ふね
七し五ご三さんの静しづ波なみかきわけて

積つみ込こむ宝たからの数かず々かずや
まばゆきばかりあたりを照てらす

うるはしさ

丁ちやう子しや分ぶん銅どうの玉たまの袋ふくろに
黄こ金がねの鍵かぎもかくれ蓑みの

七しち宝ほう壮さう嚴ごんの雨あめに濡ぬれし
小こ笠がさの露つゆや玉たまの光ひかりと

打うち出での小こ槌づち
七しち福ふく神じんの銘めい々めいが

乗のり合あ舟ひぶねの話はなしこそ面おも白しろき。

中なかにも口くちまめな福ふく禄ろく寿じゆ長ながい天あ窓たまを振ふり立たてて、

福祿 天下無双のナイスお弁さま、イナ弁財天女どの、貴女は新しい女と見えて、
こんな変痴奇珍な男子計りの船の中へ、案内もせないのに、何と思つて同席の榮
を賜はつたのかな

弁天女は面恥ゆげに莞爾と笑み乍ら、

弁天 「ホ、ホ、アノまあ福祿寿さまの御言葉とも覚えませぬ。好く考へて御覽、

何程新しい女だとして、ナイスだとして、五百羅漢堂を覗いたやうなスタイルして居

らつしやる醜男子の側に来られないと云ふ法律は発布されては居りますまい。五

六七の御代が開ける魁として、今度エルサレムの宮に於て、玉照彦命、玉照姫命

二柱の神様のお目出度い御婚礼があるので、御祝のため貴神等は、この宝舟に乗

つて聖地エルサレムの竜宮城へ昇られるのでせう。何程福の神だと云つて、男子

許りでは花も実もありますまい。昔から七福神は聞いて居るが、六福神は聞いた

事が無い。夫れで妾が天津神様の御命令で、俄に貴神等の仲間に加はつたのです

よ

福祿 「コレお弁さま、御心配下さるな。この福祿寿一神あつても下から読み上げ

て見ると十六福の神だよ。へん濟みませぬナア。そこへ寿老人（十六神）を加へて三十二神ですよアハ、ハ、ハ、ハ。それよりも身の上話でも聞かして貰つた上、都合によつて加へて上げようかい」

弁天「三十二神の処へ妾が一神加はれば、三十三相の瑞の御魂ですよ。一神欠けても三十三魂にはなりますまい。女は社交上の花ですからねー。妾の素性を一通り聞かして上げますから、十六神さま謹聴なさいませホ、ハ、ハ、ハ」

六福「謹聴々々ヒヤヒヤ」

弁天「妾は神代の昔の或る歳、頃は弥生の己の巳日、二本竹の根節を揃へて、動き出でたる嶋だと云ふので、竹生島と称へられる、裏の国の琵琶の湖に浮べる一つの嶋に、天降りました天女の中でも、最も勝れたナイスの乙女ですよ。自分から申しますと何んだか自慢するやうですが、神徳があまりあらたかなと言ふので、世人より妙音弁財天女と崇められ、妾の身体は引張り凧の様に日の下の国の四方に分霊を祭られて居ります。先づ東の国では江の島、西の国では宮嶋に、今一体は勿体なくも古、伊邪那岐尊、伊邪那美尊の二柱の神様が天の浮橋に渡らせたま

ひ、大海原おほうなばらに天降あまくだり、始はじめて開ひらかれたる淤能碁呂嶋おのしじろじま、その時とき、鵓せきれいと云いふ小鳥ことりに夫婦ふうふうの道みちを教をしへられ、天照大神あまてらすおほかみを生うみ給たまふてより、又また一名いちめいを日ひの出嶋でじまと名付なづけられ、この国人くにびとに帰依きえせられ、福徳ふくとくを授さづけしによつて、美人賢婦びじんけんぶの標本へうほんとして七福しちふく神じんの列れつに加くははつた事ことは、十六福神じふろくふくじんさまも遠とほうの昔むかしに御存知ごぞんぢの筈はず。アナタも何時いつの間まにやら福祿寿ふくろくじゆでなくて、モウロク（最もう六ろく）十三じふさんになりましたねー、ホ、ホ、ホ、

福祿ふくろく「ヒドイなア」

六福ろくふく「アハ、。オホ、、、、、」

顔色かほいろの黒くろいのを自慢じまんの大黒天だいくてんは、槌つちを持もつた儘座ままざに直なほり、

大黒だいく「弁天べんてんナイスの今いまの話はなしを聞きいた以上いじやうは拙者せつしやも男をとこだ。一ひとつ身みの上話うへばなしを初はじめて見みよう。一同いちどう御迷惑ごめいわくながら御聴聞おききなさいませ。

抑そもそも拙者せつしやは、神素盞鳴大神かむすさのをおほかみの御子みこにて、八百米杵築やほよねきづきの宮みやに鎮しづまりし、大国主命おほくにぬしのみことでござる。生うまれつきの慈悲心じひしん包つつむに由よしなく、貧まつしき者ものを見みるに付つけ、不ふ便びんさ忍しのび難がたく、一切いっさいの衆生しゆじやうに福徳ふくとくを与あたへむとして心こころを碎くだき、チンチンチンいちに米俵たはらを踏ふんまへ

小判こばんに金箱かねばこ、立烏帽子たてゑぼし、柵ますに財槌さいづち、束熨斗たばねのし、お笹ささをかたげて千鳥足ちどりあし」

大黒だいこく「ア、コレコレさう踊り廻まはすと船ふねの上うへは危険けんのんだ。モウ良よいモウ良よい御中止ごちゆうしを願ねがひます」

大黒だいこく「エ、時ときに寿老人じゆうらうじんの殿どの、貴神こなたは何時いつも何時いつも渋しぶい面かほをして落付おちつき払はらつてゐるが、こんな芽出度めでたい時ときには、チツと笑わらつて見みせても可いいぢやないか」

寿老じゆうらう「イヤ是これは又迷惑まためいわく千万せんばん、物価ぶつか騰貴とうき生活せいくわつ難なんの声喧こゑやかましき、この辛からい時節じせつに、あま顔かほをせよとは、粹すみにして且かつ賢明けんめいなる方々かたがたにも似合にあはぬお言葉ことばではこゝらぬか。拙せつ

者しやは何時いつも苦にがい顔かほをして俟約けんやくを第一だいいちと守まもり、郵便貯金ゆうびんちよきんを沢山たくさんにして、他人たにんに損そんをかけず、自分じぶんも損そんを致いたさねば、心勞しんらうなき故ゆゑ、長命ちやうめいを仕つかまつるのぢや。長命ちやうめいに過すぎたる

宝たからはこゝらぬ。兎角とかく、拙者せつしやの行やり方かたを見習みならへば、たとへ福ふくは授さづからなくとも、自然しぜんに福徳ふくとくが保たもてますぞや」

福祿ふくろく「ヘン、何程なにほど長命ちやうめいしたとて、ソナ苦にがい顔かほをして一生いつしやう送おくるのなら、余あまり福徳ふくとくでも在あるまい。笑わらつて暮くらすのが、何なにより人生じんせいの幸福かうふくだ。高利貸かうりがしの親父おやぢでも、たま

には笑わらふぢやないか。ナア、皆みなの福神連中ふくじんれんちゆうさま」

寿老「イヤ恐れ入る。併し自分は是でも人の知らぬ心のよるこびに充ちて、楽しく日を送つて居るのだ。サテ、愚老許りお喋舌いたして皆様の交際を忘れて居た。余りの楽しさと、面白さと、今度の御婚礼の目出度さとに気を取られて、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ。サア是からお交際申さう」

と傍にあり合ふ妻琴を引寄せ掻きならし、

(歌)「忍ぶ身や 夜な夜なもゆる 沢の 螢火に 夜更渡りぬる」

寿老「余り長いのは皆様のさはりになる。長い者を俗に長者と言ふさうぢや。ヤ、是はしたり、長い者とは福祿寿様へ差合しました。失礼々々」

布袋和尚は吹出して、

布袋「アハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、コリヤ面白い 面白い 面白い」

い ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、奇妙々々」

毘沙門天は、むつとした顔しながら、

毘沙門「ヤイ、そこな土仏坊主奴。何がそれ程可笑しいのだい。袋と腹とで乗合船の居所を狭めて居る癖に、チツと位遠慮召さつても可いだらう」

布袋「ア、コレコレ毘沙殿。さう腹立まいぞや、腹立まいぞや、立腹まいぞや。少々は乗合の邪魔にも成るだらうが、ソコは仲間の事だから、神直日大直日に見直し聞直してマアマア曰く因縁を聞き玉へ。夫れ一家一門附合、朋友、得意先、丸う無くては治まらないと云ふ道理は、拙者のこの天窓で判るだらう。眼まで丸い布袋和尚だ、ハ、ハ、ハ、ハ。まつた腹は大きくなければ、心がさもないものだ。そこで愚僧が此大きい腹を突き出し、腹鼓を打つて一通りお話致すでムらう。」ソレ、この袋といつぱ「見たる事聞きたる事、よしあし共に忘れぬ様、中へ納めて斯の通り、もたれて居申すなり。又世に子宝と云へるが、稚き者ほど可愛者はあり申さぬ。その稚き者を団扇を持つて行司仕り居り候也。ア、宜き楽みかな宜き楽みかな」

福祿「イヤ布袋どの、尤も尤も、尤も次手に笑はしやるのも尤も尤も。」笑ふ門へは福祿「サレバお咄し申しませう。夫れ天窓が長ければ背はズント低うムる。低うなければ愛嬌を失ひます。先づ入口を這入るにも長いによつて余ります。天窓を下げて這入ります。それで愛嬌がムるだらうが、愛嬌ついでに皆さま、お

と勇める顔色、威あつて尊く、実に有難き靈験なり。

皆一同にあふぎ立て、中に取分け弁財天。

弁天「何れに、おろかは無けれども、多聞天のおん物語、勇ましや。イザヤ発船、又の御げん」

とのたまふにぞ、さらばさらばと漕ぎよせて、竜宮館の水の面に、清き宝の入船や、七福神の靈験も、仁義釈教、恋無常、勧善懲悪聞明し、改過を作るその主は、近松ならで松の元、一とふし込し、竹本ならぬ国武彦の御助け、梅の香床しき一輪の、花の流れや汲み取る綾の、聖地の玉の井に、映る言靈影きよく、照り輝きし玉照姫や、暗をも照らす玉照彦二柱、九月八日の慶びを、筆にうつして未広く、伝へ栄ゆる神祝ぎの、尽きせぬ神代こそ芽出度けれ。

(大正一二・七・一八 旧六・五 北村隆光・加藤明子共録)

(昭和一〇・六・一六 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第六五卷 山河草木 辰の巻  
終り